

長	野	県		
埋	蔵	文	化	財
セ	ン	タ	ー	
年	報		39	

2022年度

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報 39
～ 2022年度～

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター



①長野市 長沼城跡 北三日月堀の痕跡（堀は人が立ち並ぶ上方・南から）



②長野市 長沼城跡 二の丸推定地出土の鳥形水滴



③坂城町 上五明条里水田址 豎型製鉄炉跡（平安時代）



④松本市 真光寺遺跡 古墳石室（南から）



⑤松本市 南栗遺跡 遠景（写真中央が長野自動車道・北西から）



⑥辰野町 沢尻東原遺跡 竪穴建物跡出土土器（縄文時代中期）



⑦飯田市 西浦遺跡 古墳時代前期の集落跡（北東から）



⑧飯田市 川原遺跡 焼失した竪穴建物跡（古墳時代中期）

目 次

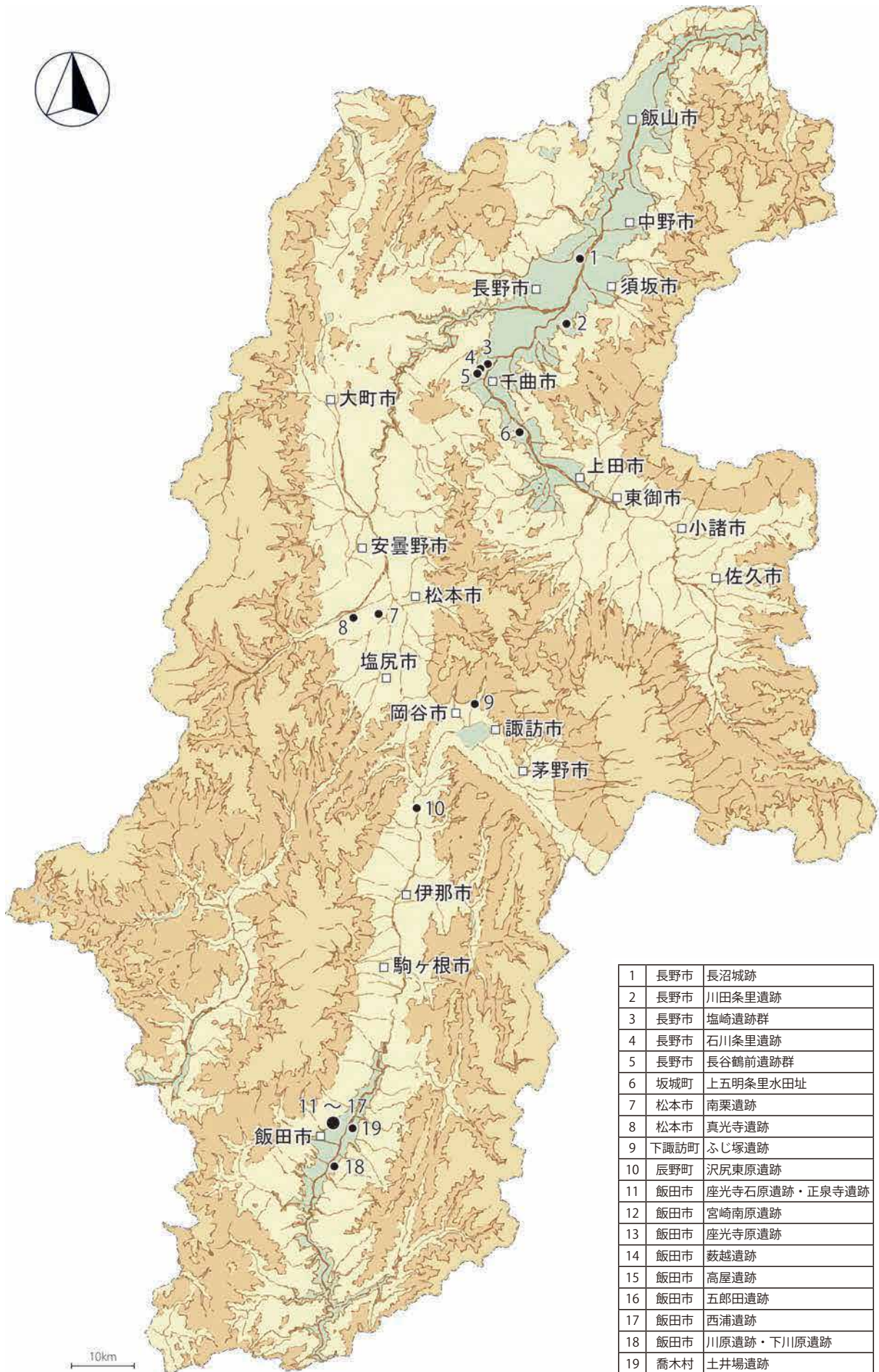
口絵写真

- ①長野市 長沼城跡 北三日月堀の痕跡
- ②長野市 長沼城跡
二の丸推定地出土の鳥形水滴
- ③坂城町 上五明条里水田址 竪型製鉄炉跡

- ④松本市 真光寺遺跡 古墳石室
- ⑤松本市 南栗遺跡 遠景
- ⑥辰野町 沢尻東原遺跡 竪穴建物跡出土土器
- ⑦飯田市 西浦遺跡 古墳時代前期の集落跡
- ⑧飯田市 川原遺跡 焼失した竪穴建物跡

目 次

I	2022年度の事業概要	1	V	指導者招へい	47
II	発掘作業の概要	2	VI	会議・研修会への参加	48
	(1) 長沼城跡	3		(1) 会議・委員会等	48
	(2) 川田条里遺跡	7		(2) 研修会等	48
	(3) 上五明条里水田址	9	VII	学校・関係機関への協力	49
	(4) 真光寺遺跡	13		(1) 学校等への協力	49
	(5) 南栗遺跡	17		(2) 職員派遣・技術指導等	50
	(6) 座光寺石原遺跡・正泉寺遺跡	21		(3) 調査資料の利用	51
	(7) 座光寺原遺跡・宮崎南原遺跡	22		(4) インターンシップ等	52
	(8) 五郎田遺跡・藪越遺跡・高屋遺跡	23		(5) 県有施設利用の応急的保存処理	53
	(9) 川原・下川原遺跡	26		(6) 派遣等の受入	53
	(10) 西浦遺跡	28	VIII	組織・事業の概要	54
	(11) 五郎田遺跡	30		(1) 組織	54
	(12) 座光寺石原遺跡・土井場遺跡	32		(2) 職員	54
III	整理等作業の概要	33		(3) 事業	55
	(1) 塩崎遺跡群・石川条里遺跡・ 長谷鶴前遺跡群	34	IX	調査研究ノート	56
	(2) ふじ塚遺跡	36		(1) 飯田市五郎田遺跡出土の 直弧文の描かれた高坏について	57
	(3) 沢尻東原遺跡	38		(2) 私牧としての 佐久穂町小山寺窪遺跡について	61
IV	普及公開活動の概要	40		(3) 坂城町上五明条里水田址における 製鉄炉について	69
	(1) 施設公開	41		(4) 南信地域における物質文化の一例 —糸切鋏と沢蟹をめぐる習俗—	73
	(2) 現地説明会	42			
	(3) 速報展・講演会等	43			
	(4) 展示室・県庁ロビー展示等	44			
	(5) 講座・出前授業・職場体験	45			
	(6) 出版物	46			
				奥付	



1	長野市	長沼城跡
2	長野市	川田条里遺跡
3	長野市	塩崎遺跡群
4	長野市	石川条里遺跡
5	長野市	長谷鶴前遺跡群
6	坂城町	上五明条里水田址
7	松本市	南栗遺跡
8	松本市	真光寺遺跡
9	下諏訪町	ふじ塚遺跡
10	辰野町	沢尻東原遺跡
11	飯田市	座光寺石原遺跡・正泉寺遺跡
12	飯田市	宮崎南原遺跡
13	飯田市	座光寺原遺跡
14	飯田市	藪越遺跡
15	飯田市	高屋遺跡
16	飯田市	五郎田遺跡
17	飯田市	西浦遺跡
18	飯田市	川原遺跡・下川原遺跡
19	喬木村	土井場遺跡

図1 2022年度 調査・整理対象遺跡

I 2022年度の事業概要

本年度は、発掘調査事業は、国4件（一部市・ネクスコを含む）、県4件、市町村4件（うち2件は技術支援）、民間事業1件の計13件となった。このほかに県教育委員会からの研修等受託事業及び普及啓発や地域協力などの自主事業も行った。

1 発掘調査事業

国関連6億6574万円、中央新幹線2億2288万円、長野県1億8874万円、その他7963万円の計11億5599万円（2023年2月14日現在の見込）の受託費により、18箇所の発掘作業と4箇所の整理作業を行った。

(1) 発掘作業

長野市長沼城跡：堀跡、平場（二の丸推定地）、土塁跡（天王宮）などの遺構を確認した。遺構保存のため、下位の状況は土層採取調査によって観察した。なお、冬期調査地点では、大型テントを設置し、防寒防雪をはかった。

長野市川田条里遺跡：保護協議により面的な調査は工事の影響を受ける地表下2mまでとし、下位地層の状況は、やはり土層抜き取り調査によって確認した。

坂城町上五明条里水田址：製鉄炉跡を伴う平安時代後期の集落跡（1面）、前期末の洪水砂層の下位の古墳時代～平安時代前期の複数の水田面（2面・3面）が検出された。また、3面の水田面より古い可能性がある河道跡と古墳時代の遺物包含層も認められた（4面）。

松本市真光寺遺跡：昨年度調査の古墳SM01の西約40mより、ほぼ同規模の円墳SM02が検出された。その西側では、墓坑群のほか、火葬施設や銭^{さし}緡埋納坑からなる中世遺構群が検出されたが、なかでも径80cm以下の小土坑からは歯、頭骨、顎骨しか出土しておらず、首だけを埋納した可能性が指摘され、注目される。

松本市南栗遺跡：集落域の南端で、奈良から平

安時代中期の竪穴建物跡34軒や、灰釉陶器などが副葬された平安時代の木棺墓3基を含む遺構が検出されている。

飯田市座光寺原遺跡・宮崎南原遺跡：弥生時代後期の方形周溝墓がのべ4基検出された。集落域が隣接し、50m以内の範囲におさまり、集落跡に関連する墓域と考えられる。

飯田市川原遺跡・下川原遺跡：天竜川左岸の低位段丘上にあり、前者からは弥生から古墳時代の方形周溝墓5基が検出された。古墳時代中期の竪穴建物跡群や5間×3間の大型掘立柱建物跡も確認され、当該期の低位段丘の土地利用が明らかになることが期待される。

飯田市西浦遺跡：古墳時代前期集落跡がみつかった。区画溝や建物跡の主軸は2方向あり、2時期に渡っていると思われる。また、埋土に炭化物を多く含み、壁の一部が被熱赤化した平安時代後期の竪穴建物跡から和鏡と紡錘車が出土している。祭祀行為に伴うものだろう。

(2) 整理等作業

長野市塩崎遺跡群：弥生時代前期から中期前半の土器の整理が進み、遠賀川系統の土器が多量に含まれていることが判明した。

下諏訪町ふじ塚遺跡：礫石経の分類、注記などが進み総数6万3208点に達することが判明した。また、銭貨96点の応急的保存処理を実施できた。

辰野町沢尻東原遺跡：報告書刊行に向けて、土器実測や図版づくりを行った。

2 普及公開、研修事業

施設公開、現地説明会、出前講座、職場体験、速報展、講演会、地域展（掘るしん）のほか、地域団体に協力した歴史・考古学講座も実施した。また、奈良文化財研究所などの専門研修ほか、職員自己研鑽研修も行っている。

（川崎 保）

Ⅱ 発掘作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	面積㎡	調査期間	時代、内容	主な遺物
長沼城跡	長野市	長沼地区 河川防災ステーション 整備事業	16,845	2022.4.12～ 2023.3.31	中世～近世：城館跡 堀跡、溝跡、土坑、建物跡（掘 立、礎石）、遺物集中、集石跡、 焼土跡、柵列跡	古代～近代：土器、陶磁器 中世～近世：石器（臼、石鉢、砥石、 五輪塔、石碑）、土製品（土錘、輪羽 口）、金属製品（銭貨、鉄砲玉、鉄釘、 家具等の金具類）、その他（被熱赤化 した壁材、鉄滓、動物骨）
川田条里	長野市	(仮称) 若穂スマート IC 整備事業	7,734	2022.9.1～ 10.31	縄文晩期：旧自然地形 古墳～古代：水田跡	古代：須恵器
上五明条里 水田址	坂城町	一般国道18号 坂城更埴バイパス (坂城町区間) 改築工事	3,700	2022.4.1～ 5.31 9.1～ 12.20	古墳：集落跡 遺物集中 平安：集落跡 竪穴建物跡、土坑、製鉄炉跡、 焼土跡 古代：水田跡、溝跡	古墳～平安：土器（土師器、須恵器） 平安：灰釉陶器、土製品（輪羽口）石 器（砥石）、金属製品（刀子、鉄滓）
真光寺	松本市	一般国道158号 (松本波田道路) 改築工事	2,000	2022.5.23～ 12.23	古墳：古墳 中世以前：溝跡 中世：集落跡、墓跡 竪穴建物跡、火葬施設跡、墓坑	縄文：土器、石器 古墳～奈良：土器（土師器、須恵器） 中世：土器、金属製品（鉄釘、銭貨）、 木、漆製品
南栗		松本 JCT 建設事業	6,000	2022.5.12～ 12.23	奈良平安：集落跡 竪穴建物跡、掘立柱建物跡、墓 坑、土坑、配石跡、井戸跡 平安以降：溝跡	奈良平安：土器（須恵器、土師器、灰 釉陶器、緑釉陶器）、石製品（こもあ み石）、土製品（紡錘車）、金属製品 (帯金具、刀子、鉄製紡錘車、鉄釘)、 その他（鉄滓、人骨）
座光寺石原	飯田市	社会資本整備 総合交付金 (広域連携) 事業 座光寺上郷道路	5,250	2022.4.21～ 12.19	時期不明：土坑	縄文：土器、石器 平安・中世・近世以降：土器、陶磁器
正泉寺			1,270	2022.7.11～ 9.13	古墳～平安：集落跡 竪穴建物跡、焼土跡（古墳）、 土坑（時期不明）	縄文：石器 弥生：土器、石器 古墳～平安：土器、鉄製品（鉄鏃）、 土製品（輪羽口）
座光寺原	飯田市	社会資本整備 総合交付金 (道跡) 事業 座光寺上郷道路	500	2022.8.1～	弥生：方形周溝墓 時期不明：溝跡、土坑	縄文：土器、石器 弥生：土器
宮崎南原			400	2023.1.12	弥生：方形周溝墓 時期不明：土坑	縄文：土器、石器
五郎田	飯田市	国補道路改築 (地域連携) 事業	975	2022.7.27～ 11.15	弥生～古代：集落跡 竪穴建物跡（古代）、土坑（弥 生～古代）	弥生：土器、石器（磨製石鏃、打製石 斧） 古墳：土器、石器 奈良平安：土器
藪越			160	2022.6.23～ 11.15	弥生～古代：集落跡 竪穴建物跡、土坑、溝跡	弥生：土器、石器（磨製石鏃、打製石 鏃、磨製石斧、磨製石包丁、有肩扇状 形石器） 古墳：土器 奈良平安：土器
高屋			350	2022.4.25～ 11.15	古墳～古代：集落跡 竪穴建物跡、土坑、流路跡（時 期不明）	弥生：土器、石器（磨製石鏃、打製石 斧） 古墳：土器（土師器、須恵器）、石器
川原	飯田市	防災・安全交付金 (道路) 事業・国補 ダム建設（治水ダ ム）事業（合併）	5,970	2022.4.18～ 2023.1.17	縄文：集落跡 弥生～古墳：方形周溝墓、集落 跡 竪穴建物跡、掘立柱建物跡 中世以降：土坑、溝跡、集石遺 構	縄文：土器、土製品（土偶）、石器 (石鏃、石匙、打製石斧) 弥生：土器、石器（有肩扇状形石器、 磨製石鏃） 古墳：土器（土師器、須恵器）、石器、 石製品（砥石、白玉） 平安：土師器 中世以降：陶磁器 近世、近代：銭貨
下川原			2,660		時期不明：土坑	土師器、陶磁器
西浦	飯田市	中央新幹線 建設工事	4,100	2022.6.13～ 12.23	縄文、古墳～平安：集落跡 竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土 坑、溝跡 古墳：古墳	縄文：土器 古墳：土器、石器、石製品（管玉）、 金属製品（刀子）、ガラス製品（勾玉、 小玉） 平安：土器、陶磁器、金属製品（和 鏡、鉄製紡錘車）
五郎田			確認調査1,600 本調査 830	2022.6.1～ 6.3 2022.9.14～ 2023.1.11	弥生～平安：集落跡 竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土 坑、溝跡（古代、近世以降、不 明）	弥生：土器、石器（磨製石鏃、打製石 斧、有肩扇状形石器） 古墳：土器、石器 古代：土器、土製品（輪羽口）、その 他（鉄滓、モモ種子、流木）
座光寺石原	飯田市		確認調査4,800	2022.11.22～ 12.23	なし（本調査不要）	縄文～古代：土器 中近世：陶磁器
土井場	喬木村		確認調査9,700	2022.12.19～ 2023.2.3	なし（本調査不要）	なし

(1) ながぬまじょうあと 長沼城跡

長沼地区河川防災ステーション整備事業

所在地及び交通案内：長野市穂保1036番2ほか国道18号長野バイパス（アップルライン）大町交差点から北北東に約1km

遺跡の立地環境：千曲川左岸の氾濫原に立地。長沼城跡や長沼地区の現集落は自然堤防上にある。遺跡西方の集落内を通る北国街道脇街道（松代道）沿いには往時の街並みが残っている。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.4.12～2023.3.31	16,845㎡	岡村秀雄 綿田弘実 広田良成 大泰司統

検出遺構（2021・2022年度の合計数）

遺構の種類	数	時期
堀跡	3	中世～近世
溝跡	9	中世～近世
土坑	96	中世～近代
遺物集中	3	中世～近代
建物跡（礎石含）	6	中世～近代
集石	16	中世～近代
焼土址	5	中世～近代
柵列	2	中世～近代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	古代～近代（坏・甕・碗・皿・内耳鍋・カワラケ）
土製品	中世～近世（土錘・鞆羽口）
石器・石製品	中世～近世（臼、石鉢・砥石・五輪塔・石碑）
金属製品	中世～近代（銭貨・鉄砲玉・筭・鉄釘・家具等の金具類）
その他	中世～近世（被熱赤化した壁材、鉄滓、動物骨）

調査の概要

長野県埋蔵文化財センターでは、長沼地区河川防災ステーション整備事業に伴い、平成3年秋から、長沼城跡の発掘調査を行っている。

長沼城は戦国時代、武田信玄ゆかりの城とされ、千曲川沿いの平地に築造された南北約650

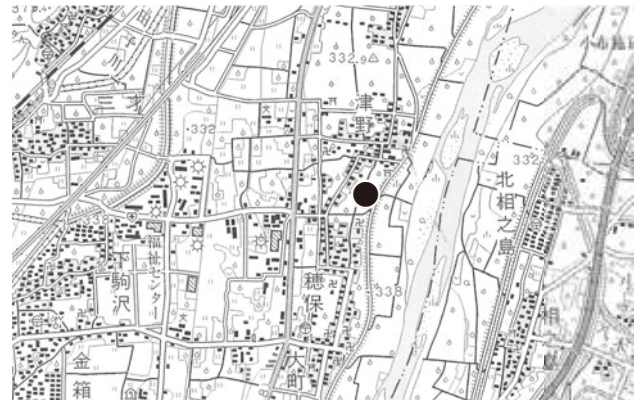


図2 長沼城跡の位置（1：50,000）

m、東西約500mという大規模な平城で、16～17世紀の城跡と考えられている。

調査では、中世・戦国時代～近世・江戸時代（約400年前）の堀跡、溝跡、土坑、遺物集中などの遺構が確認されている。またカワラケ、内耳鍋などの土器や陶磁器、石臼や五輪塔、銭貨や鉄砲玉、釘、刀子等の金属製品、その他被熱赤化した壁材や動物骨などの多様な遺物が出土している。

調査にあたり、文化庁、県教育委員会、市教育委員会の協議の上、調査対象区の多くの箇所では、検出された遺構全てを完掘するのではなく、未掘のまま後世に残す方針が定められた。また遺構保護のために、調査面を川砂で被覆後に埋め戻す方法を採用している。

一方、普及公開活動は地域と連携し、現地説明会は長野市教育委員会と地元住民自治協議会が主催する歴史講座の一環として、長野県埋蔵文化財センターが協力する方式で開催された。

堀跡の調査（口絵1-①・②・図4）

調査区北側で、縄張り想定図にほぼ一致して北三日月堀跡を面的に確認し、部分的にその城内側の側面と底面、堆積状況を観察した。深さは現地表面から約3mで、東側は現堤防内にまで及ぶ大規模な堀跡である。

二の丸推定地を囲むように配置されている中堀跡のうち、北三日月堀跡南方の一部で石積みを確認した。石積みは城内側の堀跡肩部に幅50cm程の大きな凝灰岩を三段程積み重ねている。土づくりの城と想定されていた長沼城跡を評価する上で、新たな発見である。

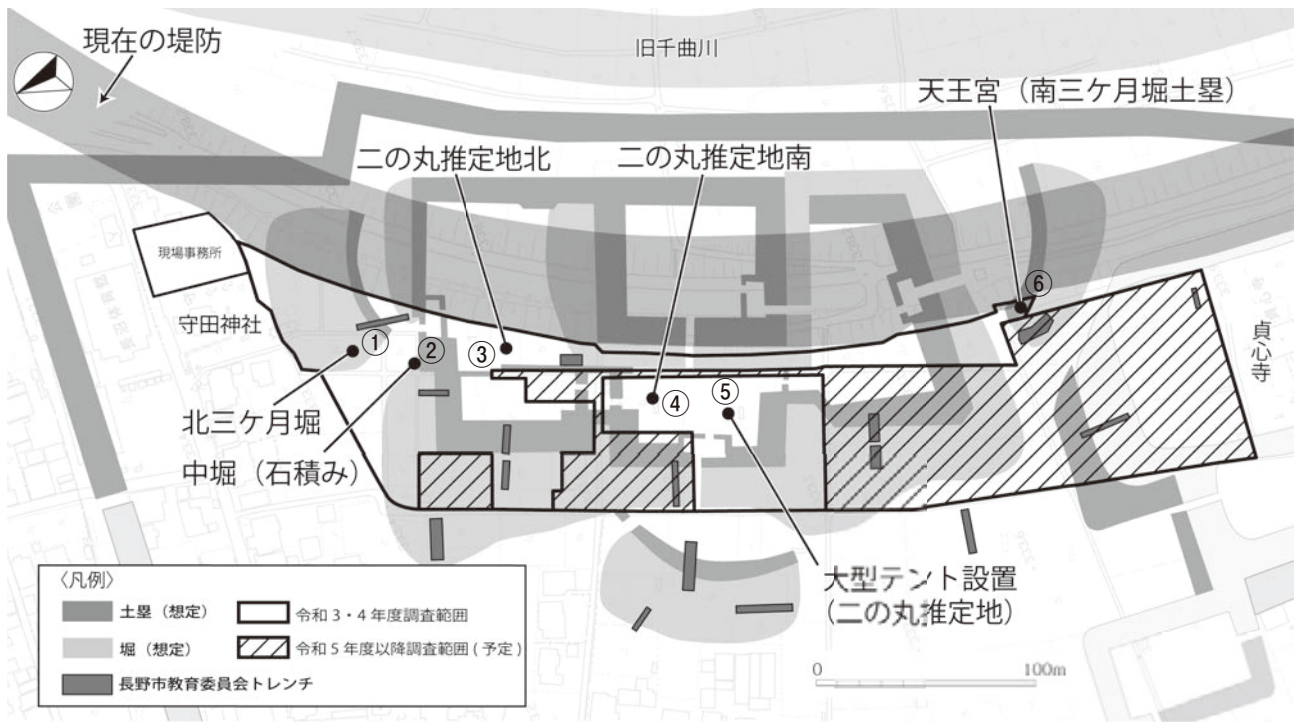


図3 縄張り想定図と調査範囲（長野市埋蔵文化財センター所報32掲載図に加筆）

土層採取調査と地下レーダー探査（図5・6）

先述のとおり、遺構の多くを後世に残す調査方針のもと、各所に想定される堀跡の存否を明らかにするために、必要最小限の土層採取によって、地下の状況を観察した。調査にあたっては、縄張り想定図を参考に小規模なトレンチ調査を行い、打設地点を決定した。その結果、多くの箇所で見つかった堀跡の存在が確認でき、得られた炭化物などから、年代測定などの科学分析を実施している。

地下レーダー探査は中堀跡の石積みの分布状況を確認するため、次年度調査地点を含めた中堀周辺で実施した。正式な報告前の速報結果では、検



図4 中堀跡の肩付近で見つかった石積み

出した石積みの東側にも石積みらしき痕跡が広がる可能性があり、詳細な結果が待たれる。

平場の調査（図3-③・④・図7・9）

二の丸推定地北側からは、焼土や炭化物が広く



図5 地層採取調査



図6 地下レーダー探査



図7 二の丸推定地北

分布する範囲が確認でき、カワラケや16世紀中～後半頃の瀬戸焼の丸皿などの生活道具が出土していることから、中世～近世の屋敷地や建物跡だった可能性が考えられる。炭化物を洗浄すると炭化した米・麦・雑穀類が検出されたため、この一帯は倉庫的な施設を持つ空間と想定している。また二の丸推定地南側では、建物などの柱基礎と推測される平らな石の列や、小石を敷いたような跡、礫や五輪塔を伴う溝跡などを確認している。

大型テントの導入（図3-⑤・図8・10・11）

二の丸推定地では、12月から翌3月までの冬期



図8 大型テント設置



図9 調査区と千曲川（西上空から）



図10 大型テント内 掘立柱建物跡の柱穴

調査用に長さ60m・幅15mの大型テントを設置した。当センターとしても初めての試みであるが、風雪環境下での調査精度の維持と作業の安全面を考慮した方策で、想定以上の効果があった。

大型テント内では、五輪塔等の転用と考えられる礎石や径70cm前後の掘方を持つ3間3間の掘立柱建物跡、作業場と推測される炭や焼土を伴う土坑や堅穴を検出した。さらに土塁跡とそれに伴う堀跡も確認されている。

土塁の調査

長沼城における土塁については、城の南側に位置する、現在の天王宮に唯一残存していると伝えられている。今回の調査範囲内は、水田・畑と平坦な地形で、唯一、天王宮地点のみが小高い。

大型テント内で確認された土塁跡も、上部は後世の削平を受けていた。

天王宮の調査（図3-⑥・図12・13）

現在、天王宮は堤防から突き出すように残って



図12 覆屋設置



図11 大型テント内調査風景

いる。この調査時期も12月以降と冬期に及ぶため、足場を組み覆屋を設置した。断面観察では、下部に非常に硬い層が確認でき、土塁の基盤ではないかと考えている。縄張り想定図から、南三日月堀に伴う馬出しの土塁と推測している。この調査から、本城における土塁構築の実態が把握できると考えている。

なお、天王宮調査に伴う掘削土は復元等の利用に供するよう、他の土と分けて仮置き保管した。今後に向けて

これまでの調査で、堀跡、平場（二の丸推定地）、土塁跡などの城を構成する遺構が確認されてきている。今後も考古学的手法で遺構調査を進め、出土遺物の整理作業を継続し、縄張り想定図を含む文献史料とも関連づけ、築城から現代までの変遷を明らかにしたい。

また、来年度は有力武士の館跡とされる地点の調査があり、その成果が期待される。（岡村秀雄）



図13 天王宮の調査

(2) かわだじょうりいせき 川田条里遺跡

(仮称) 若穂スマート IC 整備事業

所在地及び交通案内：長野市若穂川田字塚本北
1287-2 ほか

上信越自動車道若穂バス停北西の側道沿い

遺跡の立地環境：長野盆地の東部に位置し、千曲
川右岸の後背湿地に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.9.1～2022.10.31	7,734㎡	綿田弘実 大泰司統

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	古代(須恵器)

発掘調査の概要

本遺跡は上信越自動車道(以下「高速道」という)建設に伴って、当センターが1989・1990年に発掘調査を行っている。調査範囲は南西から北東に通る路線約2.4kmと長大で、調査面積は136,160㎡に及んだ。当時、周囲に止水用鋼矢板を打設して、地表面下2～5mまで全面を掘削した。

調査の結果、洪水砂・泥炭層で埋没した弥生時代中期～近世の水田跡が重層的に検出され、各時期の水田の変遷が把握された。特に古墳時代と奈良時代の小区画水田、奈良・平安時代の条里型水田の発見は注目された。また弥生時代の水田跡は標高345m前後と国内で最も高い場所にある。

今回の調査は、(仮称)若穂スマートインター建設を目的とし、複数年度にわたり本体・側道、調整池部分を記録保存するものである。今年度調査を行った調整池部分は永久構造物に該当しないため、県教育委員会、市教育委員会との協議により、面的な調査は工事で影響を受ける深度の地表下約2mまでを調査対象とし、それ以下の堆積環境や旧地形を把握する目的の調査は限定的な掘削

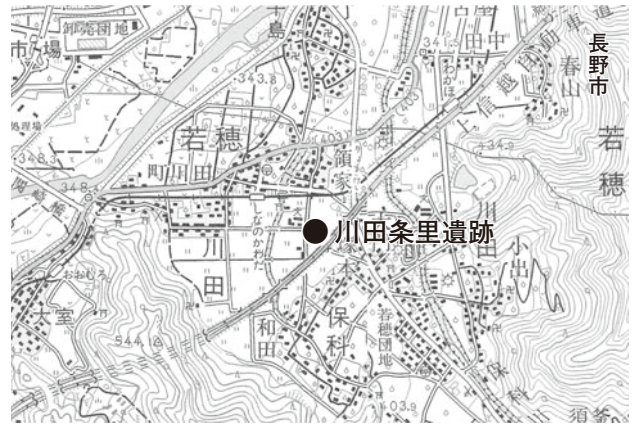


図14 遺跡の位置(1:50,000)

に止めることとなった。

土層抜き取り調査の実施

現水田下に遺存する水田跡と立地環境を把握し、面的調査の必要箇所を確定することを目的に、地層断面を定方向の柱状に採取でき、効率的かつ安全性が高い地層抜き取り調査(ジオスライサー掘削法)を、専門業者に委託して実施した。同調査は長沼城跡でも実施している。

調査区内4か所に設定した延長20m程度の直線4本に各10地点、これに1地点を加えて計41地点に鋼矢板を杭打機で打設する方法で、幅約40cmのステンレス製専用器具を地表下4mまで打ち込み、厚さ10cmほど地層を抜き取った。採取した土層断面は現地にてデジタルカメラで撮影し、画像処理を行った上で、地点ごとに水準値をそろえて配置・編集した柱状図を作成した。また、堆積状況が良好に観察できる代表的な6試料について、地層断面の剥ぎ取りサンプル作成を委託した。

当センターでは、全土層断面を実測図化・写真撮影した後、層厚20cm間隔で切り取ってベニヤ板上に仮置きして、年代測定を最優先に花粉・プラントオパール分析等、自然科学的分析を目的とした土壌試料を採取した。この試料のうち、砂質層とシルト質層については砕いてふるいにかけて、泥炭層については水洗し、種実を含む植物遺体と礫等を採取した。

土層抜き取り調査の成果

抜き取った土層断面から、4地点各1か所の堆積状況が観察しやすい試料を選び、泥炭層の最下層・最上層各4点、中間層1点から採取した試料

合計9点について、特急仕様で放射性炭素年代測定を委託した。測定結果は、泥炭層最下層試料は縄文晩期後葉から弥生前期頃、最上層試料は7～8世紀頃を示した。中間層は弥生後期頃の年代であった。

今回の調査地点は、後背湿地中央部に位置し、高速道B2区の西側に隣接している※。B2区では弥生時代後期から9世紀前半まで、8面の水田を調査した。今回の試掘と高速道報告書の土層断面図を対照し、県立歴史館保管の高速道調査時のカラー写真を参照して検討したところ、両地点の土層は整合している。事業に伴う影響範囲には、高速道建設で面調査を実施した、古墳時代～奈良時代に比定される水田面が、少なくとも2面存在することが想定された。

水田跡の面的調査は11月末に終了できない見込みとなったため、次年度に再開する予定である。今年度実施した年代測定やプラントオパール分析、花粉分析等の科学分析と土層抜き取り調査の結果から調査実施計画を立案することとしている。

(綿田弘実)

※高速道調査では調査区を南からA・B・C・D・E区の5地区に区分している。

参考文献

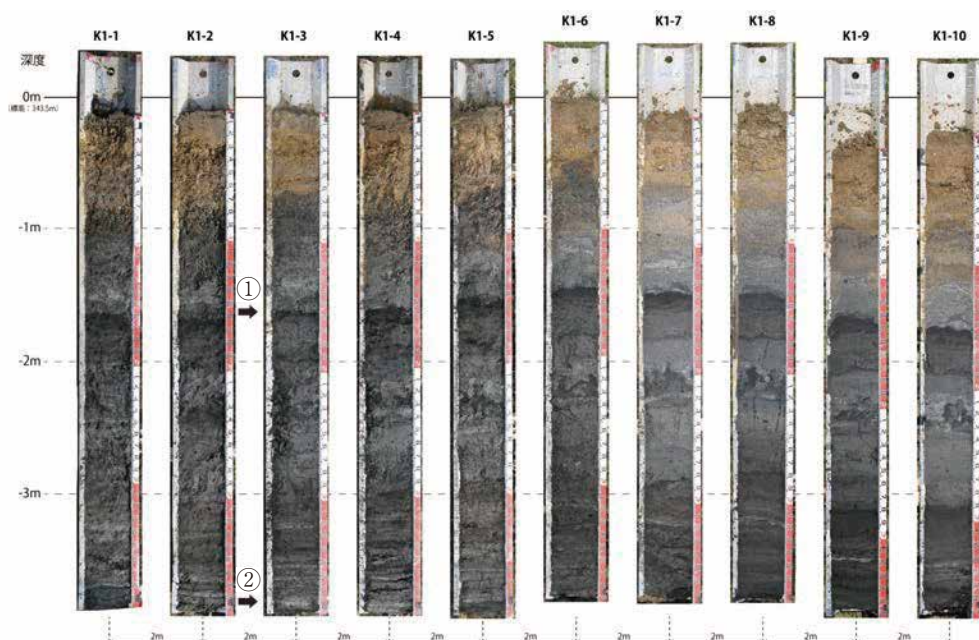
長野県埋蔵文化財センター 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10—長野市内その8—川田条里遺跡』



図15 土層抜き取り調査の状況



図16 抜き取り試料の観察と実測作業



①1,341 ± 22yrBP ②2,434 ± 22yrBP 土層中から採取した植物片の放射性炭素年代値 (AMS測定)

図17 土層抜き取り試料の配置図一例と堆積土層の年代測定値

(3) 上五明条里水田址

一般国道18号坂城更埴バイパス
(坂城町区間) 改築工事

所在地及び交通案内：坂城町上五明453-2 ほか
JR 坂城駅から南西約1.5km

遺跡の立地環境：千曲川左岸の氾濫原上に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.4.1～5.31・ 9.1～12.20	3,700㎡	市川隆之・水科汐華・ 酒井実姫・熊木奈美

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	7 (25)	平安時代
土坑	11 (58)	平安時代
製鉄炉跡・焼土跡	1 (2)	平安時代
溝跡	14 (15)	古代
水田跡	2 (2)	古代
遺物集中ほか	2 (2)	古墳時代

() 内は2021年・2022年の合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・土製品	古墳時代後期～平安時代 (土師器、須恵器、灰 釉陶器、羽口)
石器	平安時代 (砥石)
金属製品	平安時代 (刀子、鉄滓)

調査の概要

当センターでは、これまで上五明条里水田址で平成9・12年度に上室賀坂城(停)線に係る調査、平成18～22年度に力石バイパスに係る調査を実施してきた。今回、力石バイパスの南の先線部分が国道18号バイパス改築工事として計画されたことから、令和3年度より記録保存のための発掘調査を実施することとなった。本年度は2年目にあたり、昨年度調査区の西隣の地区を対象に、周辺が水田耕作をしない4・5月、9～12月に調査を行った。

調査面は、昨年同様の2面を想定していたが、

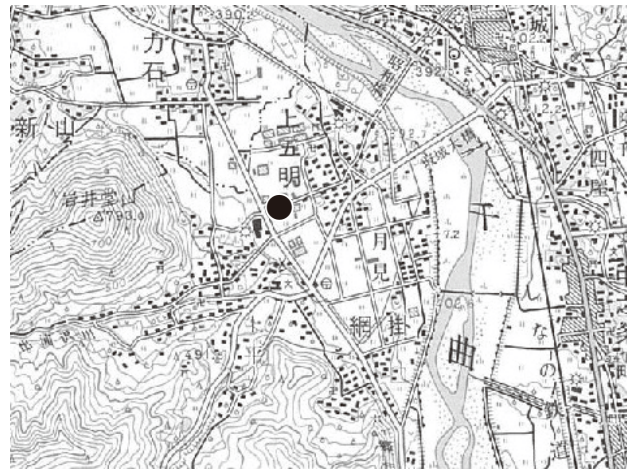


図18 遺跡の位置 (1:50,000)

昨年度の2面の中間で洪水砂層被覆の水田跡が確認されたため、その面を新たに令和4年度の2面とし、昨年度の2面にあたる調査面を令和4年度の3面とした。さらに3面より下層の河道跡内で炭化物を伴う遺物包含層を確認し4面とした。

検出遺構は、1面が平安時代の竪穴建物跡や製鉄炉跡など、2・3面が古代の水田跡、4面が土器埋設遺構である。

調査地点の旧地形と変遷

上五明条里水田址は千曲川左岸の氾濫原上に立地し、調査地点は上五明条里水田址内の中央西側の福沢川と出浦沢川谷口の扇状地先端付近にあたる。調査区西側には扇状地先端部から北北西方向に延びる微高地が隣接し、調査地点はその微高地東側の一段低い場所である。

調査地点の現地形は南西から北東方向へ傾斜するが、3・4面で明らかになった旧地形は、西側谷からの河道跡や千曲川の網状河道跡の低地が複数重なり、その間に狭い微高地が残る地形であった。



図19 調査区遠景 北西より

た(図20)。この河道跡は、浅く広いU字形断面形で内部にあまり堆積物がみられないものと、岸が急傾斜で幅が狭く何層も砂・シルトが堆積するものがある。前者は形成以後の流水がなく堆積土も少ない千曲川の網状河道跡、後者は堆積物が頻繁に運ばれた西側谷からの河道跡とみられる。前者の河道跡は調査区南東から北西方向に抜ける2・3面水田跡が確認された河道跡、後者が1面の自然流路と4面の調査区西端で確認された河道跡にあたる。後者の河道跡は2・3面間では確認できず、時期毎の流路移動が激しいことを物語る。

また、西側谷からの河道跡は埋積スピードが速く千曲川の網状河道跡は遅いため、調査区南東—北西方向の千曲川の網状河道跡は、形成時期が古いながら長く窪地として残り2・3面水田跡に利用されている。一方、西側谷からの河道跡は形成時期が新しいとみられるが3面までになんまり埋没している。いずれの河道跡も2面までは窪地と認識できるが、埋積が進んで1面の洪水砂層被覆以後では南東—北西方向に緩やかに傾斜する地形となり、河道跡の痕跡はわからない。この1面以後は複数の水田土層が重なるが、西側谷からの河川、あるいは用水等で運ばれた土砂により西側の堆積土が増加し、最終的に南西—北東方向へ傾斜する現地形になった。

平安時代後期の集落跡

1面では平安時代後期の竪穴建物跡7軒と製鉄炉跡1基、土坑、自然流路跡を検出した。竪穴建物跡は昨年度調査区より密度は低く、全体的に分

散している。竪穴建物跡の平面形は長方形を基調とし、南東隅に石組粘土カマドを設けている。製鉄炉と重複して検出された竪穴建物跡(SB21)はカマドを伴わず床面も不明瞭であった。製鉄に係る作業場所とも考えられるが、製鉄炉とは軸方向が異なり、竪穴建物跡の壁に製鉄炉が重なることから関連する施設かは不明である。また、SB25とした竪穴建物跡は、壁から少し離れて周囲をめぐる浅い溝跡がみつかつており、竪穴建物跡周囲の構造を知る上で興味深い事例といえよう。

これらの竪穴建物跡からの出土遺物は土師器小形坏、黒色土器椀、灰釉陶器が少量出土したのみだが、SB22とした竪穴建物跡からは比較的多くの鉄製品が出土した。

今回、注目される遺構として製鉄炉跡1基がある。遺存状態は良好で、円形の炉体に排滓溝を付設したオタマジック形の竪型炉の基部部分とみられる。円形の炉体周囲には粘土を積み上げた炉壁の下端部が僅かに残り、排滓溝内にも流動滓が遺存していた。この製鉄炉は1基のみ単独で検出され、時期も平安時代後期以後としかわからない。調査区内では周囲に他の精錬工程を想定できる遺構もみつかつておらず、現時点では製鉄のみ1回の操業とみられる。ただ、昨年度調査では鍛冶炉の可能性のある焼土跡、力石バイパス調査地点では精錬鍛冶を行ったとされる大型竪穴建物跡や製鉄炉の炉壁を廃棄した土坑もみつかつており、集落全体に製鉄に係る遺構が点在している。

上五明条里水田址では、力石バイパス調査地点

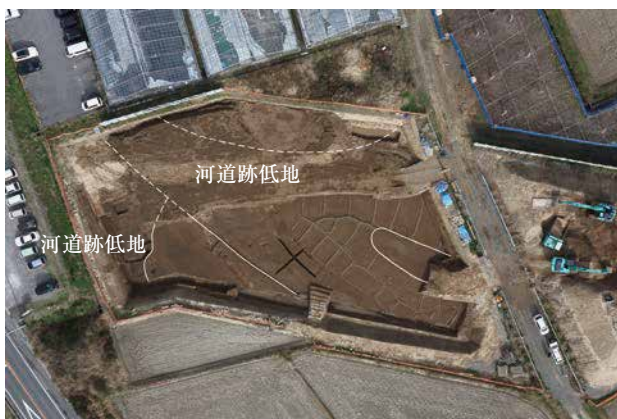


図20 3・4面の地形



図21 1面の遺構

から昨年度の調査範囲まで長さ700mほどの範囲に平安時代後期の竪穴建物跡が分布し、坂城町教育委員会の立ち合い調査地点や上室賀坂城（停）線調査地点まで含めると調査地点西側の微高地を中心に南北約1km東西300mほどの範囲に竪穴建物跡が分布するとみられる。このなかで比較的多くの土師器の食器集中廃棄がみられた力石バイパス調査地点南端の微高地付近が集落中核部とみられ、今回の調査地点はそれに近接した場所といえる。

なお、1面では他に自然流路跡1条が検出された。時期は検出面から平安時代前期以後だが、竪穴建物跡との重複がなく時期の詳細は不明である。流路管理できなくなった時期に流れ込んだのだろうか。

平安時代前期以前の水田跡

1面検出土層となるシルト～細砂層は、その上面で平安時代後期の遺構が検出され、層中からは平安時代前期の完形須恵器坏が単独で出土したことから、平安時代前期末のいわゆる「仁和の洪水」砂層に比定できる。そのシルト～細砂層も層厚が薄く、その下層にある灰白色シルト層との層理面が不明瞭であった。このことから洪水砂層が薄く洪水以後の耕作で攪拌された可能性があり、洪水砂層で被覆された遺構は遺存不良と判断し、面的調査は実施しなかった。

1面検出土層より下層では河道跡の窪地地形が明瞭に現れ、そこで洪水砂層で被覆された水田跡が数枚確認された。そのなかで比較的遺存状態良好と判断した水田跡を2面・3面として調査した。

2面水田跡（図22）は本年新規に調査したが、被覆砂層が薄い場所もあり、所々水田土壌の粘土をブロック状に混入する部分があった。畦跡も低く、その畦跡を切るような畝間溝状耕作痕や、畦跡とずれて断片的な砂層を伴う畦基部とみられる段差も検出された。このことから2面は洪水砂層で被覆された1時期の水田跡ではなく、洪水以後の耕作痕が重なっているとみられる。捉えられた畦跡がすべて同時期とはいき切れないが、その畦跡から1辺8m四方の方形の区画を地形に沿って並べた水田と認められる。また、畝間溝状の耕作痕は畦跡を切っていると認められ、洪水以後に畑に転用された可能性もある。

3面水田跡（図24）は、昨年2面として調査されたものだが、比較的厚い砂層に被覆され遺存状態は良好である。3面では微高地と水田跡のある低地の比高差が2面よりも顕著に認められ、水田跡は北西方向に傾斜する窪地地形のなかを、傾斜方向に通る畦で区画し、直交方向に短い畦で区切る。地形に合わせた区画で、傾斜の緩やかな場所では4×10mほど、傾斜が急な場所では3×4m前後の狭い区画とし、微高地北西側は三角形の水田を形づくる。西側は上層水田の耕作により削平されているが、微高地境で溝跡1条が検出された。大畦と認定できたものはない。

これら2・3面水田跡の出土遺物は土器小片が僅かにあるのみで時期の詳細は不明である。ただし、後述する4面より上層に位置し、平安洪水砂層より下層にあることから、古墳時代～平安時代



図22 2面水田跡



図23 2面水田跡の畝間溝状耕作痕

前期とみられる。

これまで知られている上五明条里水田址の平安時代前期水田跡よりも古い水田跡となり、こうした平安時代以前の水田跡が河道跡の窪地内に遺存していることが判明した。

古墳時代の土器包含層と土器埋設遺構

調査区西壁際では西側谷から流れ込むとみられる河道跡がみつき、その底面上で厚さ10cmほどの炭化物層が確認された。その上部からは土師器・須恵器片が採取され、板状の木製品や完形の小形壺が正位で出土した。

この河道跡は調査区北端で2・3面水田跡がみつかった千曲川の網状河道跡と重複するとみられるが、重複関係は直接確認できなかった。ただ、遺物包含層より上部に3面被覆砂層と同一と思われる厚い砂層堆積が認められ、3面水田跡より古い可能性から4面とした。完形の土師器小形壺は、近接して石がみつき（図26）、後述する土器埋設遺構と類似した出土状況だが、同様のもの

とは断定できなかった。炭化物層は一定範囲に集中し、焼土もみられたので、この周辺で火が焚かれたとみられる。

この炭化物層の上部にあるシルト層は、河道跡の周囲の微高地まで広がるが、微高地上の同層下部で完形の土器を埋設した遺構を検出した（図27）。この土器埋設遺構は甕を正位に埋設したもので、上部を粘土と石で閉塞している。性格は明らかではないが、何等かの内容物を入れていたと想像される。

以上、本年度調査では昨年度同様に平安時代後期集落と水田跡が確認でき、新たに下層の遺構や土器包含層も確認した。これらの遺構は千曲川や西側谷からの河道跡が重複する旧地形が、平坦化していく地形変化過程のなかに位置づけられ、さらに平安時代後期の集落の一端を明らかにすると共に製鉄炉の発見もあったことは大きな成果と考える。（市川隆之）

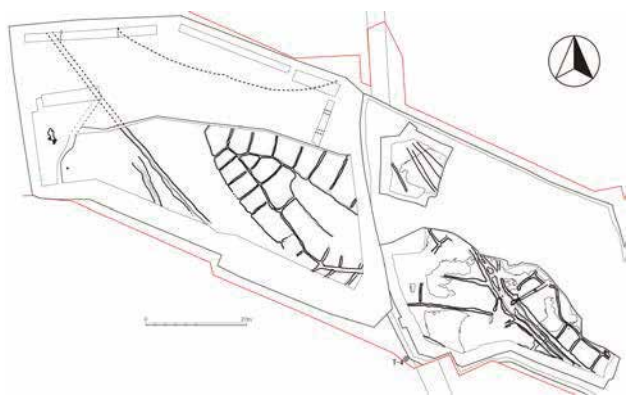


図24 3面水田跡



図26 4面河道跡内の完形土器出土状況



図25 4面河道跡内の炭化物層の状況



図27 4面土器埋設遺構

(4) 真光寺遺跡

一般国道158号（松本波田道路）改築工事

所在地および交通案内：松本市波田1717-2ほか
長野自動車道松本ICから西に5.1km

遺跡の立地環境：梓川右岸に形成された河岸段丘上に立地。遺跡の西部には1557（弘治3）年に再興されたと伝わる真光寺が所在しており、東方およそ0.4～1.5kmには、7世紀後半以降の築造と推定される安塚古墳群、秋葉原古墳群が分布する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.5.23～2022.12.23	2,000㎡	若林 卓 寺内隆夫

検出遺構

遺構の種類	数	時期
古墳	1（2）	古墳時代終末期
竪穴建物跡	1（1）	中世
火葬施設跡	16（23）	中世
溝跡	2（19）	中世以前
土坑	120（270）	近世以前（中世墓坑を含む）

（ ）内は2021年・2022年の合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代、古墳時代終末期～奈良時代、中世
石器	縄文時代（打製石斧、剥片）
金属製品	中世（鉄釘、銭貨）
木・漆製品	中世

調査の概要

松本波田道路改築工事に伴い、2020年度から調査を実施している。2020年度は一部で表土剥ぎを行い、2021年度に本格的な発掘調査に着手した。

2021年度の調査では、7世紀末葉から8世紀初頭の築造と考えられる古墳（SM01）、中世の火葬施設跡、中世の可能性が高い溝跡・柵跡・土坑などの遺構のほか、縄文時代中期の遺物を確認した。

本年度は、昨年度調査区の南～南西隣接部分

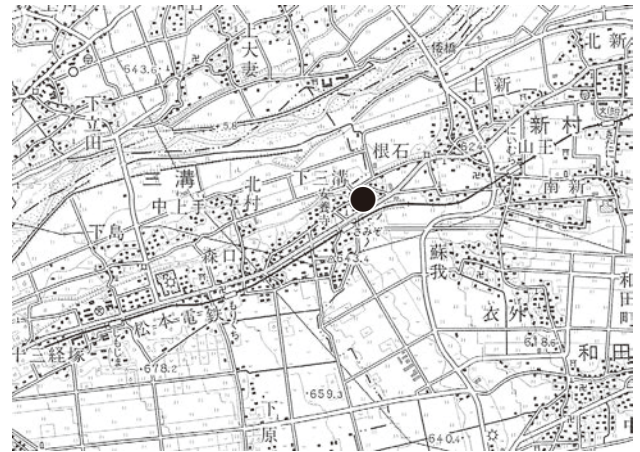


図28 遺跡の位置（1：50,000）

を調査した。調査範囲の北東部で新たな古墳（SM02）が確認され、西部で竪穴建物跡・溝跡・火葬施設跡・土坑（墓坑を含む）などの中世遺構群が検出された（図29）。

古墳（SM02）の調査

昨年調査した古墳（SM01）の西約40mに位置する。墳丘は削平によりほとんど失われている。部分的にわずかに残存する周溝から推測すると、東西規模11.5mほどの円墳と考えられる。内部主体は横穴式石室である。墳丘同様、上部を失い、下部のみ残存する。石室はN43°Wに長軸をとり、南東に開口する（図30）。

石室は地盤を細長く掘り窪めた掘方内に構築されており、半地下式といったような形態である。

壁体の構築は、扁平な河原石を用い、側壁は平積みに、奥壁は下段に大振りの石を3枚並べ立てた上に平積みに積み上げている。平面形は無袖であるが、奥壁から2.6mと5.3mの位置に、左右の側壁から内側に突出するように設置された二対の立柱石により、石室を3分割する意識が働いていたことは明らかであろう（羨道、前室、後室）。石室の規模は、全長8.7m、幅は奥壁で1.1m、前室中ほどで1.23m、羨道後端で1.35m、羨道前端で1.85mを測り、羨道は開口部に向かってやや外開きとなる。高さは奥壁で0.7mを測る。

床は掘方底に薄く敷土を施す。さらに奥側70cmの部分を除く羨道には、その上に礫を敷き詰めている。最奥部の40cmほどの部分は、大振りの礫が主体で、区画帯の意味合いをもつものかもしれない。



図29 古墳 (SM02) と中世遺構群 (北から)



図30 古墳 (SM02) の横穴式石室



図31 前室遺物出土状況

石室壁体と掘方壁の間は黒色土と砂礫で充填されている。裏込め石は特に認められない。

遺物は、石室から人骨・歯、土器が出土した。金属製品や玉類は確認されていない。

人骨類は前室左やや奥寄りに集中し、床面から10cmほど上位の平石の上に四肢骨の長軸を揃えてまとめ置いたような状況である。追葬時あるいは廃絶時の片付け行為を示唆しよう。

土器類は土師器坏が若干あるものの、ほとんどは須恵器類である。開口部前面から羨道前半にかけて大甕破片が多数出土した。前室では、前半左

側壁脇で、坏・蓋類、長頸壺、フラスコ瓶、鉢などが集中して出土した (図31)。後室では、左側壁脇を主体に坏・蓋類が多く出土したほか、右奥寄りで完形の坏蓋2個体が並んで出土した (図32)。2個体とも天井体部境に稜をもつ形態である。上下逆転させて坏身とみることもできよう。羨道出土の須恵器の中に「美濃 (国)」の刻印があるものが見つかった (図33)。「濃」字の直下に1本の横線があり、「国」の痕跡である可能性が考えられる。

これらの出土土器から、古墳 (SM02) は7世

紀後半に築造され、8世紀へと追葬が続いたと考えられる。

扁平な河原石で構築する無袖の横穴式石室は、安塚古墳群や秋葉原古墳群の内部主体に用いられている。特に安塚6号墳・秋葉原1号墳と本古墳の石室は構造・用材法に類似点が多い。

古墳(SM02)の築造は安塚・秋葉原古墳群の最も古い一群とほぼ同時期と考えられる。同質的な石室構造をもつ古墳の築造が、梓川右岸地域の広い範囲で展開することの歴史的背景、それを考えてゆくことが今後の大きな課題となろう。

(若林 卓)

中世遺構群の調査

調査区西半部で検出された中世遺構群(図29)は、重複関係から大きく3段階に分かれる。

区画溝・柵内に諸施設が設置されはじめる段階

最も古い段階と考えられる遺構には、溝跡(SD19)及びこれに主軸方位がほぼ一致する竪穴建物

跡(SB01)、屈葬人骨が見つかった隅丸長方形墓坑(SK216、図34)などがある。

これらは、中世の火葬施設や、小規模墓坑に切られている。一方、当該遺構をはじめ、調査区全域においても古代にさかのぼる遺物はないため、中世の時間幅内に収まると考えられる。

溝跡(SD19)は柵跡(SA01、昨年度調査)と直交し、30m四方を超える範囲を区画していたとみられる。その中に諸施設が配置されていたと考えられるが、調査区東側部分が大きくかく乱を受けていたため、施設の有無をはじめ、全貌は不明である。

また、古墳(SM02)墳丘の北側で北宋銭を含む^{ぜにさし}錢縷を埋納した小ピット(SK159、図35)が見つかった。ここから東側(昨年度調査区)は中世の遺構が皆無であった。このことから、錢縷埋納坑が中世遺構群の東端(図29)を示している可能性が考えられる。埋納銭の分析はこれからであり、施設の設置開始と同時に埋納されたかは今後



図32 後室坯蓋出土状況



図34 屈葬人骨が見つかった隅丸長方形墓坑(SK216)



図33 「美濃國(国)」刻印須恵器



図35 錢縷出土状況(SK159)

の課題である。

火葬の場へ変貌する段階

次の段階には、埋まった竪穴建物跡を切り、区画溝に接する場などに火葬施設（図36）が造られていく。これらは、調査区西側で多くみられるものの、東側にも点在しており、中世のある時期、広範囲が火葬に関わる場に変貌したと考えられる。

一方、隅丸長方形墓坑（SK216、屈葬）→火葬施設（SX21）→隅丸長方形墓坑（SK212、洪武通宝を伴う屈葬）の新旧関係（図34）が確認できたことから、火葬の場であるとともに、土葬による埋葬も続いていたとみられる。

首塚とみられる小規模墓坑が密集する段階

火葬施設を切る遺構には小規模墓坑がある。これらの墓坑は、現真光寺のお堂から真東に40m～50m付近に密集する。また、一部では墓坑同士が接し、列をなす状況が認められた（図29）。

各墓坑は、約80cm×70cm以下の不整な隅丸長方形や楕円形を呈し、垂直に近い掘り込みは50cm前



図36 焼けて変形した銭が出土した火葬施設（SX26）



図37 蓋石をかぶせた墓坑（SK213）

後を測る。壁際にこぶし大の礫を入れた例が多くみられた。また、墓坑上面に平石が置かれた例があった。平石直下が空洞となる例（図37）もあり、蓋石に利用されていたと考えられる。

墓坑の底面付近からは、焼成を受けていないヒトの歯・頭骨片・顎骨片が出土した（図38）。一方、顎骨以下の部位は確認できていない。また、銭に密着する状態で木の薄片が出土した例があり、遺骸を納めた木製容器の一部だった可能性がある。副葬品はほとんどなく時期限定は難しいものの、永楽通宝を伴う例があり、小規模墓坑の設置はおおむね中世後半に比定できよう。

歯や頭骨片・顎骨片だけ（本来は首か）が小規模な土坑に埋納され、しかも、それらが互いに接するように列状をなしている点などから、ごく短期間に大量のヒトの生首を並べて埋葬した可能性が考えられよう。

狭川真一大阪大谷大学教授のご教示によれば、戦乱に伴って討ち取られた者の首を埋めた首塚の可能性が考えられる。鎌倉材木座中世遺跡のように、大量の頭骨などをまとめて埋めたのではなく、個別に穴を掘って丁寧に埋納している点に本遺跡の特徴が認められる。

今後、遺構・遺物の整理作業を進めるとともに、関連する史料や伝承の調査、歯の人類学的な調査を進めた上で、特異な埋葬の要因を解明していく必要がある。（寺内隆夫）



図38 墓坑底面付近の歯・頭骨片出土状況（SK205）

（5）南栗遺跡

みなみくり いせき

松本 JCT 建設事業

所在地及び交通案内：松本市島立5023ほか

長野自動車道松本 IC から南に 3 km

遺跡の立地環境：鎖川左岸の自然堤防背後の緩斜面に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.5.12～2022.12.23	6,000㎡	河西克造 大竹憲昭 平林 彰

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	34	奈良・平安時代
掘立柱建物跡	5	奈良・平安時代
墓坑	3	平安時代
土坑	14	平安時代
溝跡	1	平安時代以降
配石	2	平安時代
井戸跡	1	平安時代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	奈良・平安時代（須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器）
石器	平安時代（こもあみ石）
土製品	平安時代（紡錘車）
金属製品	平安時代（帯金具、刀子、紡錘車、鉄釘、鉄滓）
その他	平安時代（人骨）

調査の概要

南栗遺跡は、奈良・平安時代を主体とした集落遺跡で、南北約0.7km、東西約1.2kmの規模を測る。その北側には北栗遺跡が隣接し、南側には鎖川を挟んで下神遺跡がある。このように奈良井川西部には、奈良・平安時代の大規模集落が遺跡群の様相を呈している。

中部縦貫自動車道の松本 JCT が南栗遺跡の遺跡範囲内に建設されることとなり、発掘対象面積は



図39 遺跡の位置（1：50,000）

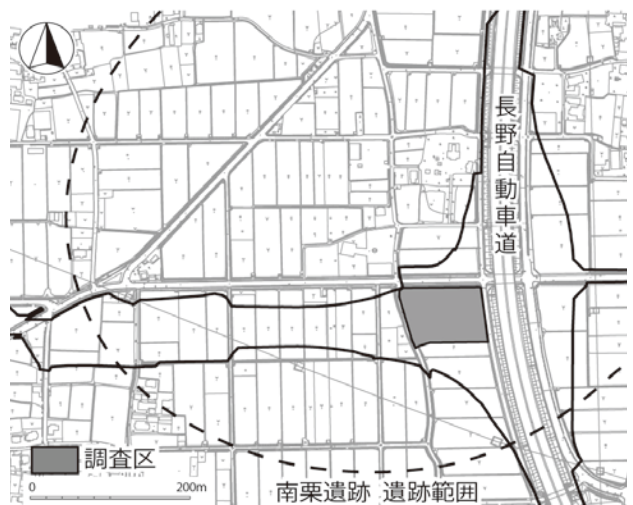


図40 南栗遺跡の調査区

59,400㎡と広域に及ぶ。発掘調査は本年度から開始され、調査は来年度以降も実施する予定である。

南栗遺跡の調査歴

南栗遺跡では、1983～1985年に松本市教育委員会による圃場整備に伴う発掘調査と、1985・86年に長野県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）による長野自動車道建設に伴う発掘調査が実施されている。

前者は、遺跡範囲のほぼ中央部で面的調査と試掘調査が実施された。そして、古墳時代後期～中世にわたる遺構が確認され、この地が複数時期にわたり居住域として利用されていたことが判明した。なお、その時の調査で奈良時代の竪穴建物跡床下から、完形の佐波理鏡が出土している。

後者は、南栗遺跡の遺跡範囲を南北に縦断する形で実施され、調査対象面積は39,390㎡に及ん

だ。この調査で、古墳時代後期～平安時代の竪穴建物跡322軒、掘立柱建物跡104軒に加え、中世と近世以降の遺構が確認された。検出された遺構は、南北方向約600mに広がり、奈良・平安時代の遺構は著しく重複する特徴がみられた。特筆する遺構は、L字状に配置する掘立柱建物跡や竪穴建物跡、完形の八稜鏡が副葬された平安時代の墓坑がある。

奈良・平安時代の集落の広がり

今回の調査区は、遺跡範囲の南端付近に位置し、長野自動車道調査区の西側に隣接する。

調査では事前に主な課題を2点設定した。長野自動車道調査区の西側における遺構の広がり、集落の南限を捉えることである。

調査の結果、調査区のはほぼ全域に奈良・平安時代の遺構が分布し、長野自動車道調査区より西側へ集落が広がっていることが判明した。そして、本年度調査区の南端で確認された流路跡は、長野



図41 長野自動車道調査区遺構配置図
(県埋文センターほか1990に加筆)

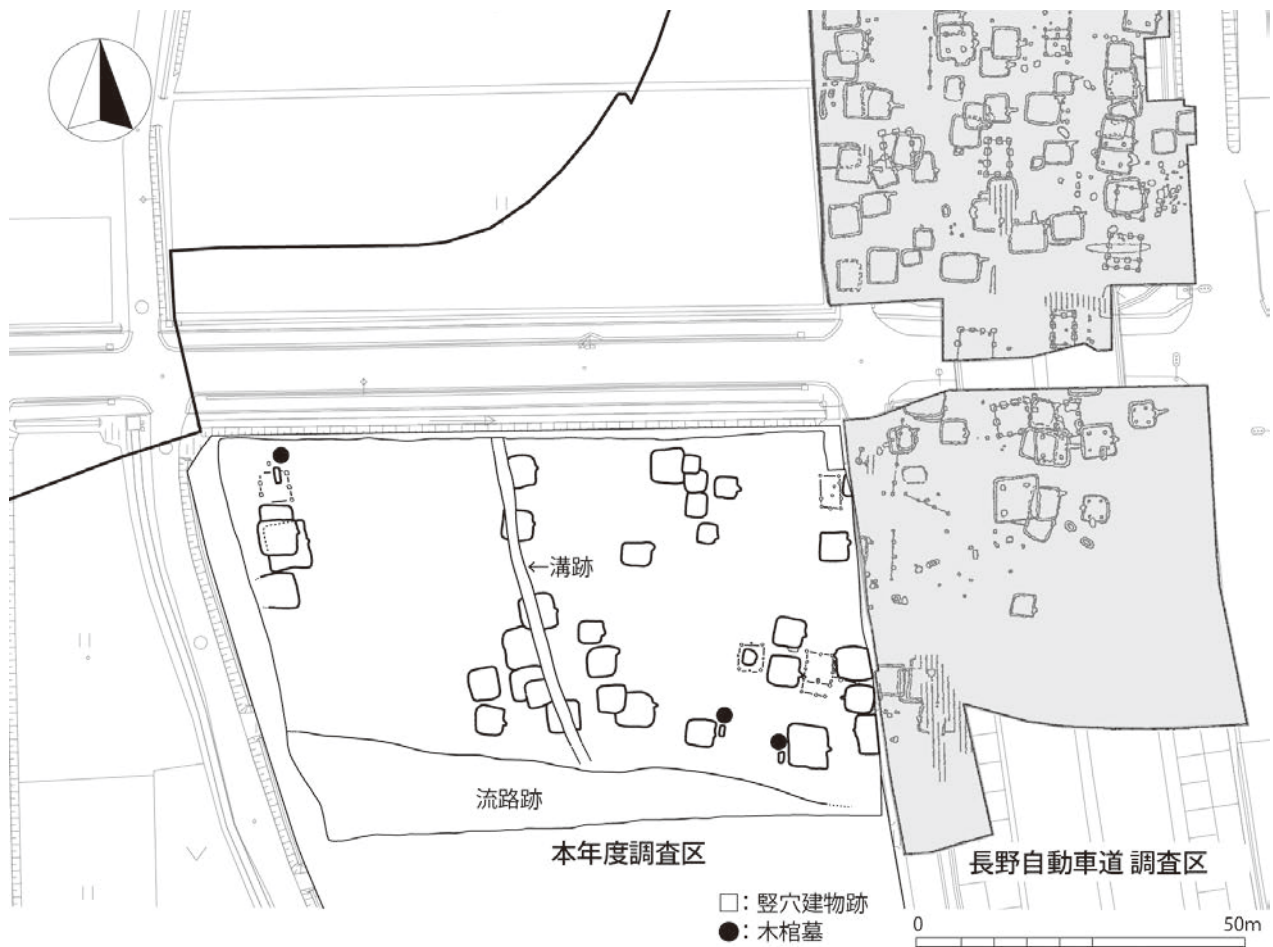


図42 主要遺構配置図



図43 調査区全景（南方上空から 右は長野自動車道）

自動車道調査区の南端で遺構が少なくなる位置とほぼ一致しており、この流路跡が集落の南限と推定される。また、北側と西側の調査区外へは遺構が広がっていくことがうかがえた。

本年度調査区で確認された竪穴建物跡の時期は、8世紀中葉～10世紀後葉と推定される。遺構配置をみると、遺構の集中域と空白域があり、中には、竪穴建物跡が5～6軒重複する場所も確認された。南栗遺跡の集落に遺構集中域と空白域があることは、長野自動車道調査区でもみられたことである。

奈良時代の大型竪穴建物跡

竪穴建物跡は34軒確認されたが、規模の大きい遺構が古い傾向がみられた。その中には、一辺7mを測り、柱痕が残る柱穴が6基存在する竪穴建物跡がある。これら大型の竪穴建物跡は、8世紀に構築されている。また、掘方が方形を呈する側柱の掘立柱建物跡が確認された。出土遺物が僅少で詳細な時期は不明であるが、掘方の形状と大型の竪穴建物跡と主軸が一致することなどから奈良時代と推定でき、上記の遺構はセットになると推定される。

平安時代の木棺墓

平安時代の遺構では、木棺墓3基（SK02・



図44 奈良時代の大型竪穴建物跡

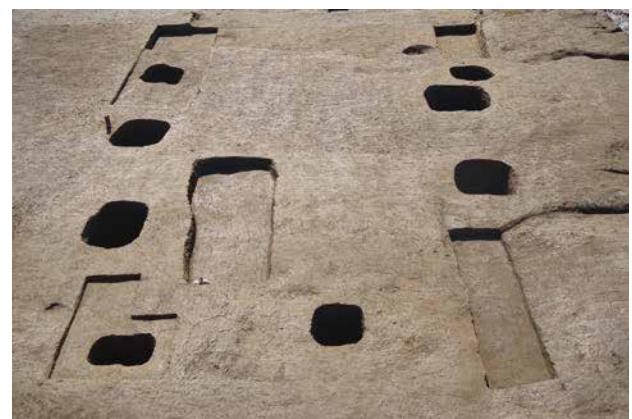


図45 奈良時代と推定される掘立柱建物跡

11・12) の発見が注視される。

木棺墓の形状は長方形で、長辺は南北方向を向く。木棺の木質部は遺存しなかったが、土層の違

いなどから3基とも木棺の範囲が確認された。遺構によって若干の違いはあるものの、規模は掘方が長辺2.1m、短辺0.8m、木棺の範囲は長辺1.8m、短辺0.5~0.6mを測る。すべての木棺墓から骨（歯）が出土し、その出土位置から、頭部を北に置き埋葬されたことが判明した。また、2基の木棺墓（SK02・11）からは副葬品が出土した。SK11とした木棺墓の隅には灰釉陶器の小瓶2個が並置され、SK02では灰釉陶器の碗2点と皿2点、内黒土器の壺1点がまとめて副葬されており、灰釉陶器の壺の内側からは土師器小皿が逆位の状態で確認された。供物などを入れた可能性があるだろう。なお、木棺墓の時期は、SK11が9世紀後葉、SK02が10世紀後葉、SK12は出土遺物が僅少のため、詳細な時期は不明である。

調査区を縦断する溝跡

調査区の中央部では、南北に縦断する溝跡が発見され、本年度調査区外に延びる。幅1.6m、深さ1.8mを測る大規模な溝跡である。断面形は逆台形を呈し、堀跡に酷似する。この溝跡は竪穴建物跡が埋没後に構築されている。出土遺物からは平安時代以降としか把握できないが、遺跡が所在する島立地区には、新村・島立条里的遺構があり、両遺跡の範囲は重なる部分がある。したがって、確認された溝跡は、「条里」と関係する可能性もある。遺構の性格については、来年度以降の調査成果を待って判断したい。

今回の南栗遺跡の発掘調査は、本年度緒についたばかりである。調査の進行に伴い用地内における集落構造を明かにし、既存の考古学的資料と合わせることで、遺跡の実態をより解明したいと考えている。
(河西克造)

引用・参考文献

松本市教育委員会ほか1984『松本市島立南栗遺跡—緊急発掘調査報告書—』

長野県埋蔵文化財センターほか1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7—松本市内その4— 南栗遺跡』



図46 平安時代の木棺墓（SK02）



図47 木棺墓（SK02）に副葬された土器



図48 木棺墓（SK11）に副葬された土器

(6) 座光寺石原遺跡・ 正泉寺遺跡

社会資本整備総合交付金（広域連携）事業

1 座光寺石原遺跡

所在地及び交通案内：飯田市座光寺2363-1ほか

JR 元善光寺駅から南西約1.3km

遺跡の立地環境：土曾川沿いに形成された谷地形
左岸の緩斜面に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.4.21～2022.12.19	5,250㎡	伊藤 愛 遠藤恵実子

検出遺構

遺構の種類	数	時期
土坑	8 (10)	不明

() 内は2020年からの合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文時代、平安時代、中世、近世以降
石器	縄文時代（打製石斧、石鏃）

調査の概要

令和2年度より続く、座光寺上郷道路の建設に伴う本調査である。

本年度は1・3～8・11区で調査を実施し、8区で時期不明の土坑を8基検出した。ほとんどの調査区で砂礫が堆積していたことから、当該地一帯は土曾川の氾濫原にあたり遺構の密度は低く、遺物の大半は流れ込みによるものと考えられる。

2 正泉寺遺跡

所在地および交通案内：飯田市座光寺4090-1

JR 元善光寺駅から南西約1.2km

遺跡の立地環境：土曾川左岸の自然堤防上に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.7.11～2022.9.13	1,270㎡	伊藤 愛 遠藤恵実子



図49 遺跡の位置（1：50,000）

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	15 (17)	弥生時代～平安時代
焼土跡	2 (2)	古墳時代
土坑	8 (12)	不明

() 内は2020年からの合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代～平安時代
石器	縄文時代（打製石斧）、弥生時代（石鏃）
鉄製品	古墳時代（鉄鏃）
土製品	平安時代（羽口）

調査の概要

昨年度の調査地の東隣で確認調査を実施した。

調査の結果、切り合いの激しい15軒の竪穴建物跡を確認した。遺物が多量に出土しており、古墳時代から平安時代が主体である。深掘りトレンチからは弥生土器も出土しており、第2面の存在をうかがわせる。
(伊藤 愛)



図50 遺跡遠景（中央が正泉寺遺跡、奥の谷間が座光寺石原遺跡）

(7) 座光寺原遺跡・ 宮崎南原遺跡

社会資本整備総合交付金（道路）事業

1 座光寺原遺跡

所在地および交通案内：飯田市座光寺828

座光寺スマートインターから南東約1.2km

遺跡の立地環境：土曾川左岸山麓部扇状地に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.8.1～2023.1.12	500㎡	伊藤 愛 遠藤恵実子

検出遺構

遺構の種類	数	時期
方形周溝墓	3	弥生時代後期
溝	2	不明
土坑	25	不明

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代・弥生時代
石器	縄文時代（石錘）

調査の概要

座光寺上郷道路建設に伴う調査で、3基の方形周溝墓と土坑を確認した。方形周溝墓はそれぞれが近接するが、重複はしない位置に造られている。規模はSM1とSM2が8m、SM3が11.5mで、平面形は隅丸の正方形である。



図52 座光寺原遺跡全景（上：北西）



図51 遺跡の位置（1：50,000）

主体部は造成による削平を受けていることから検出はなく、遺物は周溝内から流れ込みの縄文土器片などが数点出土したのみで、遺構に伴うものはみられなかった。

2 宮崎南原遺跡

所在地および交通案内：飯田市座光寺813-3ほか
座光寺スマートインターから南東約1.2km

遺跡の立地環境：土曾川左岸山麓部扇状地に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.8.1～2023.1.12	400㎡	伊藤 愛 遠藤恵実子

検出遺構

遺構の種類	数	時期
方形周溝墓	1	弥生時代後期
土坑	3	不明

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代
石器	縄文時代（打製石斧）

調査の概要

方形周溝墓1基などが確認された。検出は一部で規模は9mと推測される。主体部は調査区外のため検出はなく、遺物は周溝覆土内から縄文土器片などが数点出土したのみである。

座光寺原遺跡と宮崎南原遺跡で検出した周溝墓は直線距離50mであることから、一連の墓域であることが考えられる。今回の調査により一帯は周溝墓が複数造られた墓域であることを確認することができた。周辺には弥生時代後期を中心とした集落遺跡が分布していることから、こうした集落に関わる墓域と考えられる。（遠藤恵実子）

(8) 五郎田遺跡・ 藪越遺跡・高屋遺跡

国補道路改築（地域連携）事業

1 五郎田遺跡

所在地及び交通案内：飯田市座光寺3993-1ほか
JR 元善光寺駅から南西へ約1km

遺跡の立地環境：天竜川右岸の低位段丘上で、天竜川支流の土曾川左岸の土石流堆積物上に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.7.27～2022.11.15	975㎡	長谷川桂子 両角太一

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	3	古代
土坑	89	弥生時代～古代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代、古墳時代、古代
石器	弥生時代（磨製石鏃、打製石斧、敲石）

調査の概要

国道153号の拡幅に伴い、国道の東側に位置する五郎田遺跡、藪越遺跡、高屋遺跡の調査を本年度から開始した。五郎田遺跡は、弥生時代から古代の土器の散布地として知られていたのみであったが、2020年度に行った確認調査で遺構が密集する様子が明らかとなり、2021年度のリニア中央新幹線工事に伴う調査で、弥生時代から古代と長期間にわたり大規模な集落が展開していることが判明した。

今回の調査対象地のうち最も北部の1区と南部の4区の調査を実施した。4区は昨年度のリニア中央新幹線調査地点の西端から北西へ70mほど離れている。1区は砂礫の互層が堆積し、河道が存在したと考えられる。包含層は認められず遺構も検出されなかった。なお、旧耕作土である水田土壌と

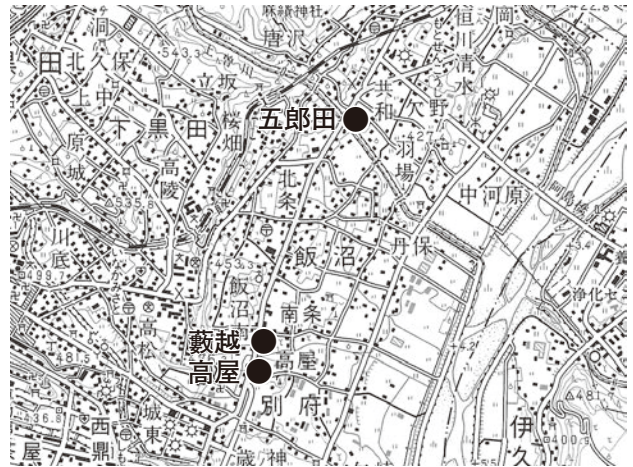


図53 遺跡の位置（1：50,000）

砂礫層の間に摩耗した土器片を多く含むシルトや砂のブロック土から構成される堆積物が分布していた。層相から土石流の末端部分と考えられる。

4区は多数の土坑と竪穴建物跡3軒がみつかった。
遺構と遺物

竪穴建物跡は火床や床面の一部が検出できただけで、明確な掘り込みは確認できなかった。土坑については、直径1mほどの円形を呈するものを数基検出した。掘立柱建物跡の一部であると考えられる。平面検出や断面観察から柱痕は確認できなかったが、底面の一部が凹んでいるため、柱や上屋の重みが影響していると考えられる。また直径0.7～1.2mほどの円形～楕円形の土坑のうち数基からは、底部に古墳時代の土器がまとまって出土する例が認められた。遺物は廃棄されたものと考えられる。特に注目できるのはSK34とした土坑で、小形丸底土器や台付甕が集中してみつかった。



図54 五郎田遺跡 1区全景（南から）



図55 五郎田遺跡 4区全景（北西から）



図56 SK34遺物出土状況

遺物は、弥生時代から古代の土器が出土している。弥生土器は少量で、古墳時代の土器は高坏、小形丸底土器、台付甕、甕、古代では土師器のほか灰釉陶器や須恵器がみついている。石器は弥生時代の磨製石鏃や打製石斧が出土した。

周辺の遺跡との関係

五郎田遺跡が位置する段丘上には、伊那郡衙と推定される国史跡の恒川官衙遺跡をはじめ、土曾川を挟んだ対岸には円面硯や帯金具・馬具などの遺物が出土している堂垣外遺跡がある。

本年度の調査で、五郎田遺跡（リニア新幹線調査地点）の弥生～奈良・平安時代の居住域は国道付近まで広がっていることが分かったが、国道を挟んで北西側に隣接する正泉寺遺跡と一体となる可能性も考えられる。今後、正泉寺遺跡の調査を行ったところで、両者の関係が明らかになるであろう。

2 藪越遺跡

所在地及び交通案内：飯田市上郷飯沼3406-1ほか
JR伊那上郷駅から南東約1km

遺跡の立地環境：天竜川右岸の低位段丘上で、天竜川支流の栗沢川左岸の土石流堆積物上に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.6.23～2022.11.15	160㎡	長谷川桂子 両角太一

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	6	弥生時代後期～古代
土坑	10	弥生時代～古代
溝跡	4	弥生時代～古代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代、古墳時代、古代
石器	弥生時代（磨製石鏃、打製石鏃、打製石斧、磨製石包丁、有肩扇状形石器）
鉄製品	時期不明

調査の概要

飯田市教育委員会や旧上郷町教育委員会によってこれまでに3回の発掘調査が行われ、弥生時代から古墳時代を中心とする集落遺跡の存在が明らかになっている。遺跡の南西には国指定史跡飯田古墳群を構成する飯沼天神塚（雲彩寺）古墳をはじめ数多くの古墳が点在している。

遺構と遺物

本年度は調査対象地のうち北部の調査を実施した。遺構は調査区全体に広がり、これまでに調査された隣接地の結果と同様、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の居住域であることがわかった。弥生時代の遺構検出面は黄色の砂質土で明確に検出可能であるが、弥生時代から奈良・平安時代の遺物包含層は大半が連続して堆積し、一部に弥生時代の遺構を削平する砂層が堆積する。竪穴建物跡（SB5）の床面からは弥生時代後期の甕や壺・高坏などの土器片や、有肩扇状形石器や磨製石包丁・砥石・台石などの石器が出土した。炉跡は中央より南側の主柱穴の間にあり、穴を穿った甕の胴下半部が埋設されていた。これらの遺物から弥生時代後期中島式の時期の遺構であると考



図57 藪腰遺跡 第1検出面全景（北から）



図58 藪腰遺跡 弥生時代面全景（北から）



図59 竪穴建物跡（SB5） 遺物出土状況

えられる。

周辺の遺跡との関係

栗沢川を挟んだ対岸の高屋遺跡や同じ低位段丘上に立地する弥生時代後期の拠点集落遺跡である丹保遺跡との関係を明らかにする必要がある。

3 高屋遺跡

所在地及び交通案内：飯田市上郷別府1714-1ほか
JR伊那上郷駅から南東約1km

遺跡の立地環境：天竜川右岸の低位段丘上で、天竜川支流の栗沢川右岸の土石流堆積物上に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.4.25～2022.11.15	350㎡	長谷川桂子 両角太一

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	1	古墳時代～古代
土坑	31	古墳時代～古代
流路跡	1	不明

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代（土器）、古墳時代・古代（土師器、須恵器）
石器	弥生時代、（磨製石鏃、打製石斧）

調査の概要

国道153号飯田バイパス建設に先立ってこれまでに調査が行われ、弥生時代から奈良・平安時代に至る墓域であり、中世になり集落域に変化することが確認されている。

本年度調査対象地のうち南半分の調査を実施した。土坑は調査区全体に分布する。直径60cmほどの柱穴と思われる土坑がいくつか並ぶことから、これらは掘立柱建物跡の一部になる可能性がある。また、南西から北東方向に流れる流路跡からは拳大の礫とともに、摩耗した土器片や石器が多量に出土した。上流からの流れ込みと考えられる。遺物包含層は調査区の大部分において後世の攪拌や削平によって消失しているが、それらが及んでいない国道沿いにはわずかに残存し、竪穴建物跡が検出できた。しかし、掘り込みは地山の黄褐色土まで達していないため、包含層が分布していない部分での検出は困難である。次年度以降の調査では、本年度よりさらに南へ調査が進むので、本遺跡の全体像が明らかになるであろう。

（長谷川桂子）

(9) 川原遺跡・ 下川原遺跡

防災・安全交付金（道路）事業・
国補ダム建設（治水ダム）事業（合併）

1 川原遺跡

所在地及び交通案内：飯田市下久堅1559ほか
中央自動車道飯田ICから東へ約7.0km

遺跡の立地環境：天竜川左岸の低位段丘上に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.4.18～2023.1.17	5,970㎡	寺内貴美子 春日皓介 岡角太一

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	5	弥生時代、古墳時代
掘立柱建物跡	1	古墳時代
方形周溝墓	5	弥生時代～古墳時代
土坑	57	中世以降
溝跡	4	縄文時代～中世
集石遺構	5	中世以降

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・土製品	縄文時代（土器、土偶）、弥生時代（土器）、 古墳時代（土師器、須恵器）、平安時代（土師器）、 中世以降（陶磁器）
石器・石製品	縄文時代（石鏃、石匙、打製石斧）、弥生時代 （有肩扇状石器、磨製石鏃）、古墳時代（白玉）
金属製品	近世・近代（銭貨）

調査の概要

本遺跡は、過去の発掘調査で縄文時代の竪穴建物跡や土坑、弥生時代の竪穴建物跡、縄文時代～中世の土器や石器、陶磁器などが確認されている。



図61 川原遺跡と下川原遺跡（北から）



図60 遺跡の位置（1：50,000）

本年度の発掘調査では、上記時代の遺構遺物に加え、古墳時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、弥生～古墳時代の方形周溝墓がみつかった。

新たにみつかった古墳時代の集落

古墳時代の竪穴建物跡と掘立柱建物跡は、いずれも天竜川に近い段丘上の微高地でみつかった。すぐ西の天竜川沿いでは縄文の集落もみつかり、生活を営むのに適した場所であったのだろう。

竪穴建物跡では、いずれも炭化材が出土しているが、SB2（口絵4-⑧）では床面に炭化材が放射状に残り、炭化物も広く分布している状況が確認でき、焼失家屋と考えられる。なお、炭化材は年代測定と樹種同定を現在委託しており、遺構の時期決定等検討資料にする予定である。

カマドが良好な状態で残っていたのはSB3とSB5である。SB3は一辺6m以上の建物で、カマド以外からも土師器を中心とした多量の遺物が出土している。カマドの天井石は外して前方に置かれ、半分に割られた土師器甕が天井石を覆うように置かれている状況を確認した。また、カマド



図62 遺構分布状況（西から）

内部では、重なり合う土師器片を取り除くと、高坏坏部が伏せた状態で出土している。SB5のカマドは、天井石が割れた状態で検出され、内部には土師器甕がやや傾いた状態で残っていた。遺物量はSB3ほどではないが、完形に近い土師器壺などがカマド以外で出土している。掘立柱建物跡(ST1)は、竪穴建物跡から北東へ少し離れた位置に建てられている。柱穴の直径0.5~0.6m、5間×3間(約10.6m×3.8m)の規模を測る。これらの遺構は、古墳中期と考えている。出土遺物の検討が必要だが、この時期の集落の様相を考える良好な資料と言えよう。

縄文時代から弥生時代

遺構を確認することはできなかったが、縄文中期を中心とした土器片、石器類、土偶などが出土している。縄文時代中期~後期の集落は、天竜川左岸築堤に係る調査で天竜川に近い地点で見つかるが、そこからは南東に約150m離れている。なお、天竜川左岸築堤に係る調査の隣接地は、来年度調査の予定である。

また、方形周溝墓(SM1~5)の発見は、新たな知見である。弥生時代~古墳時代に属すると



図63 カマド周辺の遺物出土状況 (SB3)



図64 カマド周辺の遺物出土状況 (SB5)

思われるが、これも本格的な調査は来年度になる。

2 下川原遺跡

所在地及び交通案内：飯田市下久堅1407-1ほか
中央自動車道飯田ICから東へ約7.0km

遺跡の立地環境：天竜川左岸の低位段丘上に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.4.18~2023.1.17	2,660㎡	寺内貴美子 春日皓介 両角太一

検出遺構

遺構の種類	数	時期
土坑	1	時期不明

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	時期不明(土師器、陶磁器)

本遺跡は天竜川が狭窄する手前に位置し、天竜川左岸築堤に係る調査が2016・2017年に実施されている。今回の調査は、前調査より標高の高い場所になる。トレンチを4か所掘削して、堆積を確認した。堆積の厚さは一様ではないものの洪水砂をすべてのトレンチで確認した。それより下層では、若干の土器片の出土と時期不明の土坑を確認した。(寺内貴美子)



図65 トレンチ断面(北より)



図66 下川原遺跡と天竜川(北より)

(10) にしうらいせき 西浦遺跡

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：飯田市上郷飯沼2705ほか
JR 元善光寺駅から、南西約900m

遺跡の立地環境：天竜川右岸の東側に向かい傾斜する低位段丘面に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.6.13～2022.12.23	4,100㎡	上田典男

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	12	古墳時代、平安時代
掘立柱建物跡	10	古墳時代
土坑	352	縄文時代、古墳時代、平安時代、中世
溝跡	17	古墳時代、平安時代
古墳	1	古墳時代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文時代中期、古墳時代前期・中期、古代、中世
石器	弥生時代、古墳時代（打製石斧）
石製品	古墳時代（管玉）
金属製品	古墳時代（刀子）、平安時代後期（和鏡、鉄製紡錘車）
ガラス製品	古墳時代（勾玉、小玉）

調査の概要

本年度の発掘作業は、県教育委員会と事業者との協議により、県教育委員会からの通知文（平成30年10月23日付け30教文第456号「長野県埋蔵文化財センターが行う発掘調査において民間調査組織の支援導入を実施する場合の留意点について」）に基づき、民間調査組織の支援導入を実施して行った。

当センターでも初めてのケースであり、本年度は、(株)シン技術コンサルに発掘作業支援業務を委託して実施した。

調査は、A～F区の6地区に区分し、順次進め



図67 遺跡の位置（1：50,000）

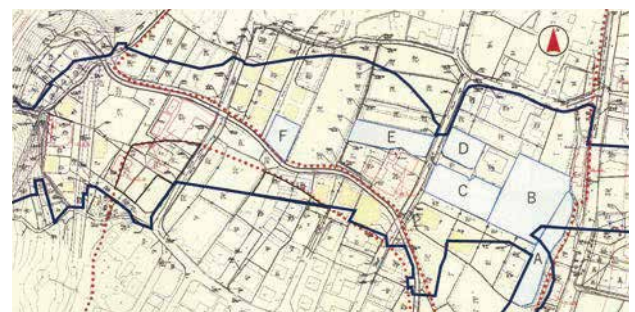


図68 本年度調査区

ていった。A区は昨年度の、E・F区は平成29年度の確認調査の結果から、トレンチ調査のみで対応したが、E区については遺構等が確認されたため部分的に面調査を実施した。また、C・D区はTGパイル工法で個人住宅が建てられていたため、住宅基礎を撤去後、鋼管を残した状態で重機により遺構検出面まで掘削し、鋼管切断後に遺構調査に入るという方法で実施した。

今回の調査では、古墳時代前期初頭の集落跡や未周知の古墳の周溝がみつき、平安時代後期の竪穴建物跡から和鏡が出土する等の成果が得られ、飯田下伊那地域でも希少かつ重要な資料を提示することとなった。

溝に区画された古墳時代前期初頭のムラ

直線的に走行する幅50cm弱の細い溝跡が幾筋も検出された。それらは、平行して、また直交して分布する。溝跡の底面は、一様に凹凸があり、規則的ではないものの小穴が連続し、また長方形の掘方が確認され、布堀の溝に柵木列のような構造物が構築されていたと考えられる。検出された竪穴建物跡や掘立柱建物跡の建物方向は、これら溝

跡の走行方向と一致するものが含まれる。方向を同じくする竪穴建物跡の時期は古墳時代前期初頭であり、これらの溝跡の一部は古墳時代中期の竪穴建物跡や古墳の周溝に切られている。以上のことから、柵木列等により方形に区画された土地に竪穴建物と掘立柱建物が整然と配置された古墳時代前期初頭の集落景観が復元される。なお、溝跡の走行方向は2種あり、それぞれに建物方向も対応しており、前期初頭の集落は少なくとも2時期に類別される。

古墳時代前期初頭の竪穴建物跡は、4本主柱穴を基本とし、炉跡を複数箇所もち、壁周溝や壁から床面中央に向かう間仕切り状の溝跡を持っている。うち一つは鍛冶炉を想起させる強い熱を受けた炉跡となっている。また、一様に出土遺物が少なく、パレススタイルの壺が出土した竪穴建物跡が1軒あるが、土器埋設炉に用いられた甕を除き、完形に近い高坏、高坏状器台が竪穴の隅から複数個体出土するという特徴を持つ。該期の集落跡の一般的な竪穴建物跡とは様相を異にしているといえよう。

掘立柱建物跡は、4間×4間（桁行7.4m）、2間×4間（桁行6.5m）と大形の建物で、建物方向から先の溝跡で区分された2時期に分かれ、それぞれが集落内で象徴的な存在だったと考えられる。

今回検出された古墳時代前期の集落跡をもって豪族居館跡とするには程遠い内容である。しかし、一般的な集落とは一線を画すものと捉えておきたい。西浦遺跡の古墳時代前期の集落跡からは、飯田市を象徴する風越山や座光寺富士（猪ノ山）は眺望できず、見下ろす位置にママ下遺跡や堂垣外遺跡等がある。逆に、堂垣外遺跡等からは風越山や調査対象地を眺望することが可能で、常に仰ぎ見る位置に西浦遺跡は立地している。遺跡内に古墳が築造された理由とも重ねて考えることができるのではなかろうか。

竪穴建物跡出土の和鏡

平安時代後期の竪穴建物跡は1軒のみの検出で、出土遺物は、明和27号窯式の灰釉陶器を主体



図69 B・C区空中写真（合成）

とし、他に和鏡、鉄製紡錘車が出土した。北東隅にカマドを持ち、埋土は炭化物が層を成すように充満し、壁の一部は火を受けて赤化していた。炭化した

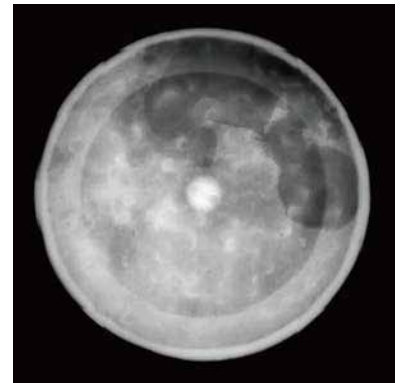


図70 竪穴建物跡出土和鏡 X線写真

建築部材等は確認されていないので、上屋を一旦外し、別の場所で燃やした後に、その燃え殻を竪穴内に投入したと推測される。和鏡は、この炭化物層を掘り窪めた穴の中に、鏡面を上にした状態で埋置されており、一連の祭祀行為を象徴する。

和鏡は、直径約8.4cmで、X線撮影を行ったところ、文様は不鮮明なものの、周縁を内側に折り曲げたような細工が等間隔に6カ所確認された。陶器にみられる輪花手法に類似するものと想定される。

竪穴建物跡から和鏡が出土したという事実を踏まえ、和鏡自体の分析はもとより、和鏡の出土状況を含めて、祭祀行為や該期の集落の在り方についても分析を進めていく必要がある。（上田典男）

(11) 五郎田遺跡

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：飯田市座光寺4066-1ほか
JR 元善光寺駅から、南西約1km

遺跡の立地環境：天竜川右岸の東側に向かい傾斜する低位段丘面に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.6.1～2022.6.3 (確認調査)	1,600㎡	上田典男
2022.9.14～2023.1.11 (本調査)	830㎡	上田典男

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	14	弥生時代中期～平安時代
掘立柱建物跡	3	古代
土坑	156	弥生時代中期～古代
溝跡	6	古代・近世以降・不明

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代中期・後期、古墳時代、古代
土製品	古代 (羽口)
石器	弥生時代、古墳時代 (磨製石鏃、打製石斧、有肩扇状形石器)
その他	古代 (鉄滓、桃種子、流木)

調査の概要

本年度は、次年度以降の本調査実施予定箇所の確認調査と昨年度調査した地区の東西両隣の本調査を実施した。



図72 本年度調査区



図71 遺跡の位置 (1 : 50,000)

確認調査は、東西両地区とも路線方向を基に十字になるようトレンチを設定したが、実際には遺構の検出状況もあり、拡張した部分や省略した部分がある。西側の調査区 (①区) では2か所で竪穴建物跡が検出され、いずれも2軒重複している。一方は耕作土直下で2軒とも検出され、一方は耕作土直下に1軒、間層を挟む形でもう1軒が検出された。東側の地区 (②区) でも同様な層序が確認され、今回の二つの調査区では2面調査が必要であることが確認された。また、②区では、堀状の溝跡が確認され、方形に区画された堀のコーナー部分であることが想定された。トレンチ調査では形状を探ることが困難なため次年度以降の面的調査に期待する。

本調査は、先に記した西浦遺跡とともに、(株)シン技術コンサルに発掘作業支援業務を委託して実施した。

西側の調査区 (A区) は、土曾川に向かって流れる流路跡がほぼ全体を占めていた。この流路跡は、国道153号拡幅に伴う五郎田遺跡の発掘調査で1区とした調査区で確認された流路跡につながるものと予想される。また、部分的に遺物が集中する箇所があり、耕作地化するための造成で破壊された遺構の痕跡と捉えられる。

東側の調査区 (B区) は、昨年度の調査区の続きで遺構が密集することを予想していたが、それは現水田の畦畔下のみにとどまり、水田面造成時の削平により、多くの遺構が消失したものと考え



図73 遺跡遠景（東から）

られ、検出された竪穴建物跡も大部分が掘方のみであり、柱穴も深く穿たれたもののみが遺存している状況であった。また、南東隅に土曾川方向に大きく傾斜する旧地形が確認され、北東隅では流路跡が検出された。この北東隅の流路跡は、古代には埋没していたことが確認でき、この流路跡を挟んで、東側と西側とでは土層の堆積環境が大きく異なることが本年度の確認調査の結果から指摘できる。

いずれにしても、現地形では平坦に見え、埋蔵文化財包蔵地として大きく捉えられているが、旧地形では埋没した流路跡等が幾筋もあることが明らかとなった。

大形の掘立柱建物跡群

柱痕跡を明確に伴う径1mを超える掘方をもつ柱穴が数多く検出された。しかしながら、建物配置を把握し、掘立柱建物跡とした遺構はわずか3棟である。後世の削平を受け消失した柱穴もあるとは考えるが、把握した建物跡はあまりにも少なく、柱穴の規模・内容から、建物の補助柱穴や建物建築時に利用されたものとは考え難いため、本格整理作業時に、再度検討していきたい。

掘立柱建物跡として遺構番号を付したST101は、3間×4間以上の掘立柱建物跡で、柱穴掘方はいずれも2個ずつあり、建替えの痕跡がうかがい知れる。長期にわたり利用されていたことが想定され、同様の掘立柱建物跡は昨年度の調査区でも1棟確認されている。また、一部に布掘り状の掘方があり、近接するピットとともに扉部分を構成した何らかの痕跡ではないかと考えられる。



図74 ST101完掘状況



図75 ST101（人が立つ位置が柱跡）

五郎田遺跡の性格

今回の調査では、円面硯・墨書土器等の文字関係資料や鍔帯・刀子・銭貨等の金属製品といった官衙に関連するような遺物は出土していない。

ただ、昨年度の調査



図76 ST101扉（推定）部分

ただ、昨年度の調査分を合わせて3間×4間（桁行7m）以上の規模の掘立柱建物跡が群をなして機能していたことは間違いなく、一般の集落跡にみられる掘立柱建物跡群と解釈するには躊躇する。

大規模な調査が実施された土曾川対岸の堂垣外遺跡からは、円面硯や鍔帯・馬具などの遺物が出土しており、官衙との関連が議論されている。恒川遺跡群と同じ土曾川左岸に立地する本遺跡の位置付けを探ることは、史跡恒川官衙遺跡を中心とした領域の様相を考察する上で重要であり、今後の調査の進展が期待される。（上田典男）

(12) 座光寺石原遺跡・ 土井場遺跡

中央新幹線建設工事

1 座光寺石原遺跡

所在地及び交通案内：飯田市座光寺2232ほか

JR 元善光寺駅から南西約1km

遺跡の立地環境：天竜川支流土曾川左岸の氾濫原上で土石流堆積物上に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.11.22～2022.12.23	4,800㎡	長谷川桂子

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文時代～古代、中近世

調査の概要

中央新幹線建設工事に伴い土曾川ヤード地点の確認調査を実施した。2020年度・2021年度に調査を行った座光寺上郷道路調査地点の南側に隣接している。調査地周辺は古墳群の分布域であり、古墳時代の土坑墓がみつまっている。

調査地は階段状に造成され、水田や果樹畑に利用されていた。確認調査ではトレンチを15本掘削した。いずれも上位から、表土（耕作土）、砂礫～シルト層、巨礫を含む砂層が堆積する。

調査地内には石塚3号古墳、石原古墳などの存在が指摘されていたため、その推定地周辺に5本のトレンチを入れたが、古墳やその他の遺構は確認できなかった。遺物は表土から陶磁器類、巨礫を含む砂層から摩耗した土器片（縄文時代～古代）が僅かに発見されたのみである。

土曾川由来の土砂が谷あいを削り込みながら堆積していると考えられ、本調査は必要なしと判断した。

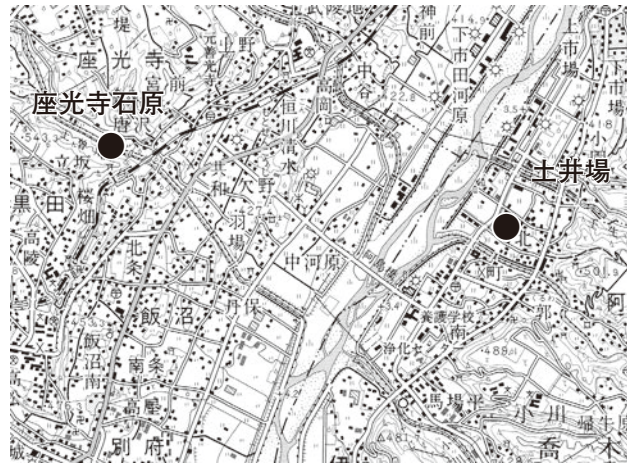


図77 遺跡の位置（1：50,000）

2 土井場遺跡

所在地及び交通案内：下伊那郡喬木村294ほか

喬木村役場から北東約1.5km

遺跡の立地環境：天竜川左岸の氾濫原上に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2022.12.19～2023.2.3	9,700㎡	長谷川桂子

調査の概要

本年度の確認調査範囲は土井場沢川の両側で、昨年度調査範囲の東側に位置し、現在は水田や畑地、宅地として利用されている。本遺跡は弥生時代中期の土器散布地として知られている。

確認調査ではトレンチを8本掘削した。層相や層厚に変化はあるものの、上位から現耕作土、圃場整備時の造成土、旧水田土壌、天竜川由来の砂礫層の堆積物からなる。昨年度と同様、遺構や遺物は検出されず、本調査は必要なしと判断した。

（長谷川桂子）



図78 座光寺石原遺跡 トレンチの様相（1 T北東から）

Ⅲ 整理作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	整理の内容（作業）	整理中の主な成果
塩崎遺跡群 石川糸里遺跡 長谷鶴前遺跡群	長野市	一般国道18号 (坂城更埴バイパス) 改築工事	遺物写真撮影、遺物実測・ トレース、遺構・遺物図 版組、遺物一覧表作成、 原稿執筆	塩崎遺跡群は、堅穴建物跡を412軒検出した弥生時代～ 平安時代の複合集落遺跡である。弥生時代前期～中期前 半期の土器について整理指導を受け、やや変容した遠賀 川系土器の存在や、東海地方の条痕文土器が長期間継続 して出土することなどを確認した。石川糸里遺跡と長谷 鶴前遺跡群は、溝跡や畔跡などの帰属時期を再確認し、 弥生時代中期後半から中近世に至るまでの土地利用や水 田跡の変遷が明確になった。
ふじ塚遺跡	下諏訪町	一般国道20号 (下諏訪バイパス) 改築工事	遺物注記・分類・計測・ 写真撮影・文字判読、金 属製品の応急的保存処理	本遺跡は2020年度に発掘調査を行い、中世末から近世初 頭の礫石経塚を確認した。 本年度の整理作業では、礫石経の総数が6万3208点で あることが判明した。そのうち、半数以上に法華経（妙法 蓮華経）の経文や、梵字が書写されていることが分かっ た。また、礫石経塚から出土した銭貨95点の銭種同定及 び応急的保存処理を行い、経塚の築造年代を16世紀代に 比定できることが分かった。
沢尻東原遺跡	辰野町	北沢東工場適地の 開発事業	遺構・遺物図版作成、遺 物実測デジタルトレース、 遺物写真撮影、遺構・遺物 一覧表作成	沢尻東原遺跡は、縄文時代中期の集落を、ほぼ丸ごと調 査している。50軒の堅穴建物跡を調査した。貉沢式期～ 曾利Ⅱ式期までの間に継続して集落が営まれたことが判 明した。居住域は北群と南群に大きく分かれる。両居住 域の間には空間があり、土器を埋設した土坑を多数検出 した。中には骨片が出土するものもあり、墓域の可能性 もある。



時枝務立正大学教授による整理作業指導の様子（ふじ塚遺跡）

しおざき いせきぐん いしかわじょうり いせき
(1) 塩崎遺跡群・石川条里遺跡・
はせつるさき いせきぐん
長谷鶴前遺跡群

一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築工事

整理作業の概要

塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群は長野市南部の塩崎地区に位置する。3遺跡を貫くように一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築工事が計画されたため、発掘作業を2013～2021年度に実施した。本格整理作業は2016年度に開始した。なお、3遺跡は千曲川左岸の自然堤防・後背湿地・崖錐地形（微高地）に立地し、それぞれ遺跡の性格も異なるが、隣接して相互に関連するために並行して整理作業を実施している。

本年度の塩崎遺跡群の整理作業は、出土土器の実測・トレース・図版組や、石製品・土製品の整理作業等を進め、出土人骨・獣骨や弥生時代前・中期の土器については鑑定や整理指導を受けた。また、弥生時代中期の土器棺再埋葬や堅穴建物跡から出土した黒曜石製石器の産地推定分析を委託し、すべて諏訪エリア産（星ヶ台群）という結果が得られた。

石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群は、遺物の写真撮影、報告書掲載図版や観察表の作成、原稿執筆等を実施した。特に、検出遺構の帰属時期の確認や、千曲川洪水砂の被覆状況など遺跡形成に関わる土層図や遺構分布図の作成を行い、弥生時代中期後半から中近世に至るまでの土地利用の状況や水田跡の変遷を明らかにした。



図79 遺物実測作業

塩崎遺跡群の弥生時代前・中期土器

昨年度までの遺物分類作業により、塩崎遺跡群には遠賀川系土器を含む弥生時代前期後半～中期前半期の土器が多量に存在することが判明し、本年度はこれらの土器の図化作業を進めた。

塩崎遺跡群の当該期土器は、前期末～中期初頭と中期中葉の2時期に出土量のピークがある。前者については浮線文系といった在地土器に、西日本・東海・飛騨・関東・東南北部等の土器が混在して出土する様相で、多彩な地域の土器がみられる。また、遠賀川系の土器は出土量もさることながら、東海地方の土器の影響を受けつつ在地で変容したと考えられる資料があることが分かった。

図80-1～4は遠賀川系の甕である。口縁の形状や、頸部に横位の直線文を数条有する点は共通するが、口唇部の様相などにバリエーションがある。1・2はハケ状工具、3は棒状工具、4は縄文原体（絡条体）を口唇部に押圧している。縄文を押圧する遠賀川系の甕は、比率は高くないものの、塩崎遺跡群で数個体出土している。縄文の施文は東日本系土器の影響なのか、東海地方までの遠賀川系土器にはみられず、当遺跡の特徴かもしれない。

また、図81は遠賀川系の壺の胴部片で、橙～赤褐色の器面に暗赤褐色の顔料で文様を描いている。こうした彩文土器は三重県津市納所遺跡など東海地方では類例があるが、東日本では初めての事例と思われる。

中期中葉の土器については、市道松節地点（長野市教育委員会1986）の木棺墓出土資料に該当する在地の土器群がある。一方で、前段階の中期前葉の在地の土器群を抽出できていない。本調査で検出した再埋葬・木棺墓などの遺構は中期前葉に途絶する時期があり、土器の出土様相と重なる。しかし、東海地方の条痕文系土器群が前期後半から中期前葉まで継続して確認できたこと、関東地方の中期前葉（平沢段階）に併行する資料が少数だが存在したことから、この時期の塩崎遺跡群でも何らかの人的活動があったことが想定できる。当該期については、北信地域外からの搬入・模倣

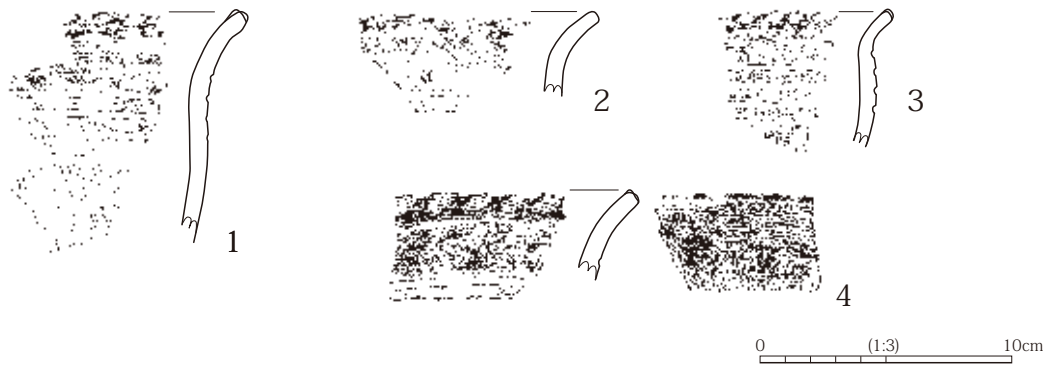


図80 塩崎遺跡群出土の遠賀川系土器（甕）

品のあり方を整理しながら、在地土器（条痕文系・沈線文系・櫛描文系等）の把握が課題となる。

塩崎遺跡群の紡錘車

石製品・土製品の整理作業で紡錘車（紡輪部）が定量確認できたため、現状の概要を報告する。

塩崎遺跡群で出土した石製紡錘車は10点（円盤形1点、円錐台形9点）で、土製紡錘車は16点（円盤形11点、円錐台形5点）ある。遺構外でみつかったものをのぞくと、円盤形は弥生時代中期後半～後期、円錐台形（図82-1）は飛鳥～平安時代の遺構から出土する傾向がある。

このほかに、紡錘車と想定する土器片加工品が94点ある。中央に孔が開いた土器片の周囲を打ち欠いたり研磨して円形に整えたもので、弥生時代中期後半～後期の資料が多いが、中期前半の資料も少数ある。塩崎遺跡群には石製・土製・鉄製・土器片加工品といった様ざまな素材の紡錘車があり、各時代の素材の組み合わせなどから紡績の様相を捉えたい。

なお、図82-2は円盤形の土製紡錘車の1つで、片面に沈線文様を施す。松本市境窪遺跡の例に文様が類似する。境窪例は弥生時代中期中葉の竪穴建物跡から出土しており、県内では古い様相の資料である。本資料は古代の竪穴建物跡埋土でみつかったが、遺物の帰属時期については類例との比較や出土状況から再度検討する必要がある。

塩崎遺跡群で本格的に集落が展開される中期後半より前の時期の、石器・石製品・土製品の把握についても今後の課題である。（杉木有紗）



図81 遠賀川系彩文土器（縦約5.5cm）

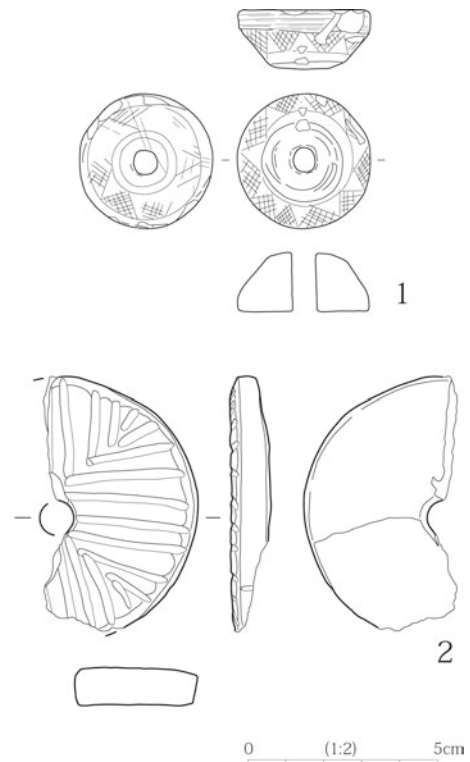


図82 紡錘車（1：石製、2：土製）

(2) ふじ塚遺跡

一般国道20号(下諏訪岡谷バイパス)改築工事

ふじ塚遺跡は、砥川右岸の河岸段丘上に立地する。一般国道20号(下諏訪岡谷バイパス)改築工事に伴い、2020年・2021年に発掘作業を実施した。検出遺構と出土遺物は下表のとおりである。一部未調査区を残すものの、2021年度より本格整理作業に着手し、本年度も整理作業を継続した。

主な遺構

遺構の種類	数	時期
土坑	10	縄文時代・不明
溝跡	5	不明
礫石経塚	1	中世末～近世初頭

主な遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代晩期・古代・中近世(陶磁器)
石器	縄文時代(石鏃、剝片)
礫石経	中世末～近世初頭

整理作業の概要

本年度の整理作業では、約4万点と想定されていた礫石経の総数が6万3,208点であることが判明した。そのうち約3万5,000点の注記と分類、約2万点の計測と簡易的な写真撮影と文字の判読を完了した。なお、礫石経の文字判読や経塚については、昨年度に引き続き時枝務立正大学教授のご指導を受け、以下の特徴が判明した。

礫石経の特徴

ふじ塚遺跡の礫石経は、1つの石に1文字もし



図84 礫石経の文字

(左から「南無阿弥陀仏」、「南無大日如来」、「ササ菩薩」)



図83 礫石経の判読作業

くは数文字書写した「一字一石経」である。総数のうち約8割に文字が書かれている。また、嘘字や判読し難い文字がみられ、文字に親しみのない民衆が礫石経の書写にかかわっていたことが推定される。

本年度の整理作業では、「ササ菩薩」という、仏書の書写等に用いられる文字が確認された。これは、「菩薩」の二字の草冠を縦に並べて書くために、片仮名の「サ」の字を合わせたようにみえる「菩薩」の略字である。民衆をまとめた仏教的指導者の存在がおぼろげながらみえてきた。

また、「キリーク(千手観音菩薩・阿弥陀如来)」や「ア(胎蔵界大日如来)」などの梵字がみつき、ふじ塚遺跡の礫石経塚が密教の影響を受けていることも明らかになった。

来年度以降も整理作業を継続し、判読・分類作



図85 礫石経の梵字

(左から「キリーク(千手観音菩薩)」、「バン(金剛界大日如来)」、「ア(胎蔵界大日如来)」)

業を通して、ふじ塚遺跡の礫石経の書写形態や埋納の在り方を明らかにしていきたい。

金属製品整理作業の概要

ふじ塚遺跡からは95点の銭貨が出土した。本年度の整理作業では、応急的保存処理の工程を通して、銭貨の実体電子顕微鏡観察、X線透過撮影など自然科学的手法を用い、同資料を構成する銭種、内部構造の解明を目的とした調査を実施した。

応急的保存処理

錆の除去は物理的手法により行い、防錆及び強化処置は、ベンゾトリアゾールによる防錆被膜形成とアクリル樹脂を減圧含浸する方法を用いた。遺物表面は塩基性炭酸銅に覆われている。遺存状態は比較的良好で、数点を除いて遺物の内部構造には大きな空隙や孔食、クラックが認められず、鋳巣も目立たない。

銭貨の特徴

銭貨95点の内訳は、下表のとおりである。初鋳年は最も古いものが、唐621年の「開元通寶」、最も新しいものが、明1433年の「宣徳通寶」であった。なお、2区かく乱からは、江戸時代（1863年）の「文久永寶」が出土している。

そして、礫石経の出土が最も集中したブロックからは、北宋銭から明銭までの39点の銭貨が出土している。

ふじ塚遺跡の礫石経塚は、上面に起伏があり、礫石経の間には随所に隙間がある「ブロックの集合体」のような状態を示しており、このブロックは礫石経が複数の単位で納められたことを示すと

時代	種類	点数	構成比
唐	1	3	3%
後周	1	1	1%
北宋	15	46	48%
南宋	2	2	2%
遼	1	1	1%
元	1	1	1%
明	4	17	18%
小計	25	71	75%
江戸	1	1	1%
無文銭	—	1	1%
不明	—	22	23%
合計	26	95	100%

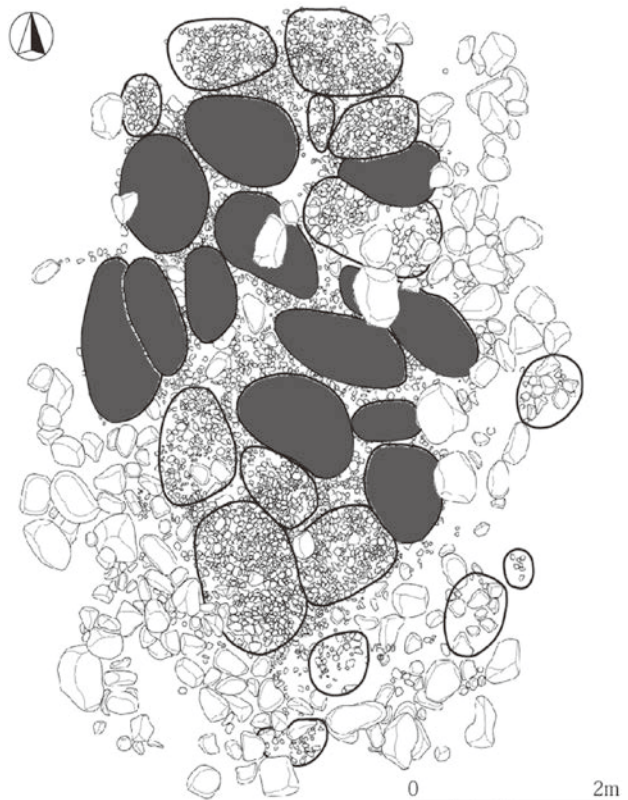


図86 ブロック認識図（網掛け部分は銭貨出土地点）

されている（河西2022）。銭貨は、礫石経塚の中央部において、礫石経に混じる状態で出土しており、各ブロックに散逸している。各ブロックにおいて銭貨の構成比に差は認められない。

礫石経塚のほぼ中央部から出土している銭貨、和鏡（15世紀）、かわらけ（16世紀）から、ふじ塚遺跡の礫石経塚の築造は、16世紀代と考えられる。（水科汐華）



図87 礫石経塚から出土した「宣徳通寶」
左：処理前写真 右：X線透過写真

参考引用文献

河西克造 2022 「下諏訪町ふじ塚遺跡の礫石経 その構造と特徴」
『長野県埋蔵文化財センター年報38』

(3) さわじりひがしばらいせき 沢尻東原遺跡

北沢東工場適地の開発事業

本遺跡は2019年度に発掘作業を行った。本格整理作業は2020年度から開始し、本年度で3年目となる。遺構に関しては個別遺構のデジタルトレースと写真図版作成、遺物に関しては土器の委託写真実測、土製品・石器の実測、土器の委託写真撮影を実施した。

遺構数は以下のとおり。

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	50	縄文時代中期
	1	古墳時代前期
屋外埋設土器	48	縄文時代中期
土坑	15	縄文時代中期

屋外埋設土器について

本格整理作業において遺構の分布を検討した所、居住域の内側に広がる空間を中心に土坑が多数存在することが判明した。この土坑群では、土器を原形のまま埋設する、もしくは土器を意図的に割り破片を一括埋納する事例を48基確認した(図88)。

報告書は2023年度刊行予定であり、詳細は同書に委ねるが、本稿でその概要について報告したい。

掘り方：屋外埋設土器は、プランが不明瞭でも個体のまま出土する例や、一括出土した破片が接合により1個体になる例が認められるため、埋設当時は掘り方を有したと考える。

掘り方が判明した土坑もあるが、埋甕の直径に合わせて穴を掘る例や、埋土が地山に類似する例もあるなど、プランの把握は困難であった。

土器の大きさ：埋設した土器の大きさは、上部を圃場整備時の削平で欠損するものが多いため、計測値として集計できない。このため本遺跡から出土した略完形の土器を基に大きさを推定して、小(30cm未満)、中(30cm以上50cm未満)、大(50cm以上)の3クラスに分けた。

埋納姿勢：正位が圧倒的に多く、逆位は明確に抽

出できない。横位や斜位も少なからず存在する。小形土器についても立位で出土する事例があり、土器の大小に関わらず、意図的に埋設したものと考える。埋設姿勢の選択に大きさや時期による傾向は認められない。

屋外埋設土器周辺出土の石について：屋外埋設土器の上部、脇、もしくは土器内から大形の石器や石が出土する例があり、埋設時に何らかの標識として大形の石を用いた可能性がある。また土器内から中形の石が出土する例もある。

土器内出土遺物：土器内からは石器が出土する例は少なからず存在するが、土器は明確に出土した事例はない。

土器の埋設時期：集落の登場期(猪沢式期)から終焉期(曾利Ⅱ式期)まで存在する。集落の各段階における埋設数は検討中であるが、概ね段階別の集落の規模の大きさに比例した数となる。特に集落の規模が最盛期を迎える井戸尻式期には、埋設土器の数も最大となり大中小様々な土器が埋設されるが、特に大形品が多い傾向が認められる。一方、曾利Ⅰ式期になると、中形品が主体となり、大形品はほとんど確認できない。

埋設土器の性格：SK42とした土坑からは頭蓋骨の破片が検出された。小片のため人間と断定できないが、本遺跡における屋外埋設土器は居住域の内側にまとまる点から、墓跡の可能性は残しておきたい。(廣田和穂)

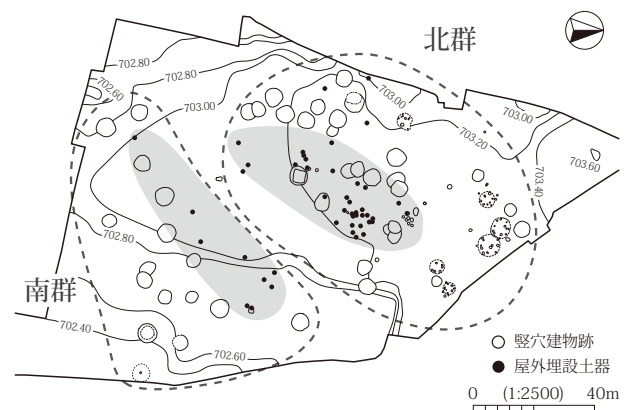
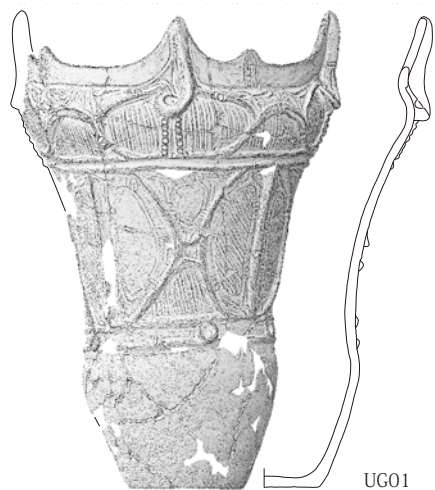
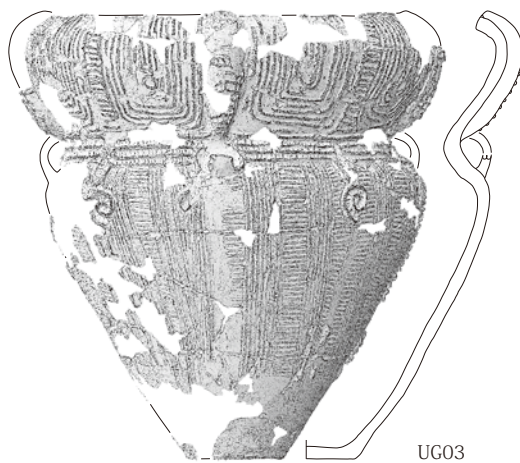


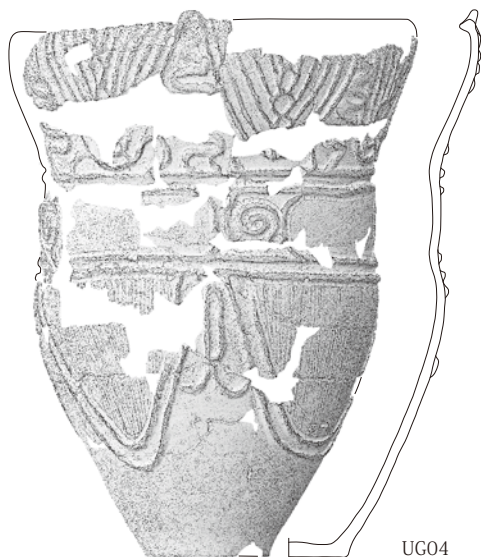
図88 主要遺構配置図
(トーンの範囲が屋外埋設土器群分布範囲)



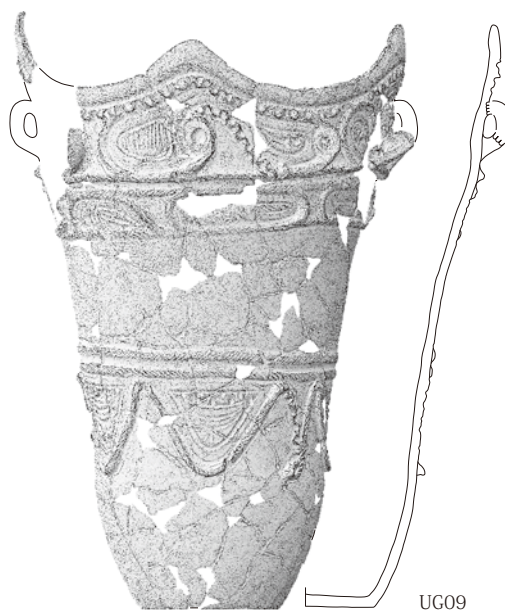
UG01



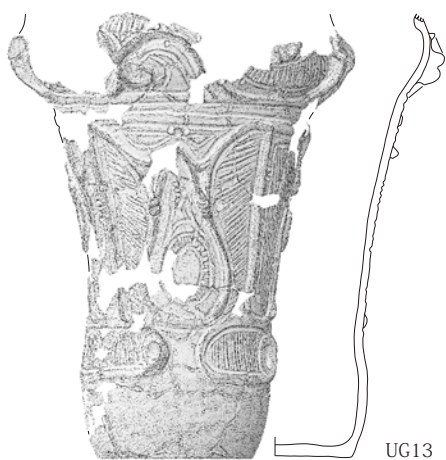
UG03



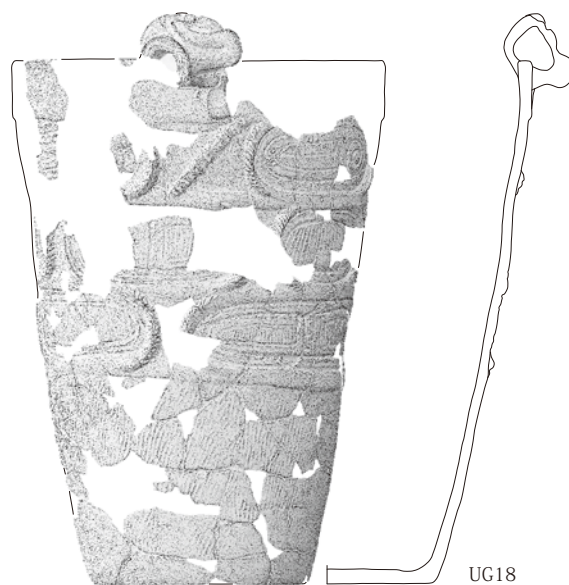
UG04



UG09



UG13



UG18

0 (1:8) 20cm

图89 屋外埋設土器

Ⅳ 普及公開活動の概要

	分類	内容	場所等	期日	参加者数(名)
1	施設公開	夏休み考古学教室 2022	当センター	8/5・6	333
2	現地説明会	発掘現場の公開・出土遺物の展示	上五明条里水田址	11/3	52
			真光寺遺跡	11/19	91
	遺跡見学会	ひさかたウォーキング ～川原遺跡～	川原遺跡	11/5	75
3	講座	石器時代の長野県	篠ノ井老人福祉センター	5/19	24
		善光寺平南部の弥生時代	篠ノ井老人福祉センター	6/16	23
		長野県の古墳時代—装身具を中心として—	篠ノ井老人福祉センター	7/21	24
		松本盆地における古代集落の立地と変遷	篠ノ井老人福祉センター	8/18	17
		古代 水田跡	篠ノ井老人福祉センター	9/15	21
		遺跡見学	長沼城跡	10/20	16
		篠ノ井街歩き	当センターほか	11/17	17
		近世「城下町」	篠ノ井老人福祉センター	12/15	18
		成果報告	長沼地区仮設庁舎 長沼城跡ほか	6/28	23
		親子発掘体験		8/2	13
		遺跡見学		11/5	88
		講演会		12/15	20
		意見交換		2/22	30
出前授業		弥生時代から古墳時代の歴史と文化 ～米づくりのはじまりから古墳の出現まで～	上松町立上松小学校	5/13	32
		過去・現在・未来 長沼城跡の調査から	信州大学工学部	12/9	76
		石器時代の長野県	県立篠ノ井高等学校	12/13	23
		古代の集落調査	県立篠ノ井高等学校	12/20	23
		アクセサリーの考古学 —長野県の旧石器から古代を中心に—	県立篠ノ井高等学校	1/12	23
職場体験		長野市立篠ノ井東中学校生徒	当センター	7/14・15	3
		豊野高等専修学校生徒	長沼城跡・当センター	7/25・26	1
		長野俊英高校生徒	当センター	11/28・29	2
4	速報展・講演会	掘るしん 2022	長野県立歴史館	3/19～6/12	3427
		掘るしん in さくほ 2022 ～地中の宝物～	佐久穂町生涯学習館	9/16～10/10	67
		生涯学習月間県庁ロビー展示	長野県庁	11/21～12/2	—
5	施設利用		展示室		47
			図書室		67
				総計	4676
				国補対象計	543

◎上記の内、太字の普及公開活動は、文化庁の国補事業「地域の特色ある埋蔵文化財補助事業」を活用して実施した。

◎展示室・図書室の利用人数は2月16日現在の数字。

(1) 施設公開

○夏休み考古学教室2022の開催

実施日：8月5日（金）午後1時～4時

8月6日（土）午前9時～午後3時

目的：夏休みの期間中に、埋蔵文化財センターの施設を公開し、展示室や実際の整理作業を見学してもらう。また、埋蔵文化財に関連する体験を家庭で挑戦してもらうことで、埋蔵文化財に対する理解をより深める。

内容：

- ・施設公開…展示室や土器及び石器の実測作業を公開、埋蔵文化財や考古学の質問に回答
- ・体験…新型コロナウイルス感染症感染拡大防止に留意し、「縄文ワークショップ」を実施した。その他、埋蔵文化財に関連する体験を自宅で行う教材として「まが玉作成キット」を配布した。

来場者数：333名

5日（金）102名、6日（土）231名

当センターの業務理解の促進や埋蔵文化財に対する理解の深化という施設公開の趣旨に基づき内容を検討し、あわせて新型コロナウイルス感染症感染防止対策を講じた上での実施となった。

地元篠ノ井地区を中心に長野市内の小学生以下の子供とその家族が多数来場され、埋蔵文化財センターの業務や埋蔵文化財行政に対する理解、考古学に対する普及啓発に資するイベントとなっている。また、開催を毎年継続してきた結果、夏休みのイベントとして定着しており、篠ノ井地区に対する地域貢献としての意義も大きい。

施設内は、床に縄文時代の動物の足跡を配するなど社会的距離を保つ工夫をこらし、安心して見学していただけるよう工夫した。

ブースは、遺物の実測や観察作業の見学、展示室の見学、来場者の考古学や埋蔵文化財についての質問に、当センター職員が回答する質疑応答ブースを設けた。また、初めての試みとして、文化振興事業団活動支援策ワーキンググループのメンバーが当センターを訪れ、講師に森泉智哉氏を招き、縄文時代の遺物を模した塗り絵と縄文時代をテーマとした絵本作りからなる、「縄文ワーク

ショップ」を実施した。これは昨年度のアンケートで体験型ブースの実施を望む声が多かったことを受け実施したもので、来場者からはたいへん好評であった。また、普段別々の施設で異なる業務を行っている文化振興事業団職員間の交流という面でも効果があった。

また、本年度は、自宅で埋蔵文化財に関する体験ができる教材として「まが玉作成キット」、来場の記念品として辰野町沢尻東原遺跡で出土した土偶をデザインしたトートバックを配布し、いずれも好評であった。

来場者へのアンケートでは、「細かい作業の積み重ねのご苦労と楽しさを感じられました。」「歴史好きな娘の興味・関心を刺激できました。今後の進路の参考になるお話も気軽に答えて下さり見通しをもつことができました。」「夏休みの大きな思い出になって、楽しかったし、勉強になった。」など、好意的な感想が寄せられた。一方で、従来行ってきた拓本や土器洗い等の体験の復活を望む声も聞かれた。来年度は、新型コロナウイルス感染症の感染状況を踏まえた上で、来場者が安心して参加できるような体験内容を考えていきたい。

(村井大海)



図90 縄文ワークショップの様子



図91 遺物の実測作業見学の様子

(2) 現地説明会

現地説明会は、2遺跡で実施し、見学者は現地説明会において143名を数えた。

○上五明条里水田址（坂城町）

開催日：11月3日（木）

見学者：52名

現地では、平安時代の集落跡を公開し、特に製鉄炉跡と竪穴建物跡の状況説明に力を入れた。出土遺物の展示においては、昨年度の発掘調査で出土している、鉄生産に関わる遺物も公開した。

参加者からは、当時の製鉄の様子に関すること等様々な質問が寄せられ、「鉄」で知られる坂城町の町民にとって興味深い遺構だと関心をもつていただくことができた。地元の見学者がやや少なく、地域への周知に課題が残る一方、SNSを見て遠方から来跡した見学者の方もあり、情報の広がりを実感した。



図92 上五明条里水田址現地説明会 見学の様子

○真光寺遺跡

開催日：11月19日（土）

見学者：91名

事前の報道による周知から多くの見学者が見込まれていたが、昨年度を大幅に上回り、波田地区周辺だけでなく、長野市、駒ヶ根市、東京都、兵庫県等遠方からも見学者が訪れた。現地では7世紀終わり頃の築造と推定する古墳1基と、中世の土葬墓群や火葬施設を公開した。

参加者からは「古墳の石室がしっかり残っており、感動した」、「自分が住んでいる所に首を埋めた墓が存在したとは驚いた」、「土坑墓群の集団は波田を治めていたのか」など、関心を持ってもらえた。古墳、土坑墓群、展示室ともに熱心に見学していただき、長くとどまる人が多かった。当日は報道公開も実施し、報道機関の取材を受けた。

（酒井実姫）



図94 真光寺遺跡現地説明会 見学の様子



図93 上五明条里水田址現地説明会 展示の様子



図95 真光寺遺跡現地説明会 展示の様子

(3) 速報展・講演会等

①速報展

「掘るしん 2022」

開催日：3月19日（土）～6月12日（日）

会場：長野県立歴史館

見学者：3427人

内容：長野県立歴史館の小展示室において速報展「掘るしん2022」を開催した。

今回は、長沼城跡（長野市）、浅川扇状地遺跡群（長野市）、塩崎遺跡群（長野市）、沢尻東原遺跡（辰野町）、ふじ塚遺跡（下諏訪町）、ナギジリ2号古墳（飯田市）の出土資料を出品した。

特に長沼城跡は、以前から注目度の高い遺跡であったため、見学者の関心も高くとても熱心に見学していた。



図96 沢尻東原遺跡出土遺物の展示



図97 浅川扇状地遺跡群出土遺物の展示

②地域展

「掘るしん in さくほ 2022」～地中の宝物～

展示会：9月16日（金）～10月10日（月・祝）

会場：佐久穂町生涯学習館『花の郷 茂来館』

講演会：10月1日（土）

聴講者：67名

内容：当センターの中部横断自動車道に伴う発掘調査成果や佐久穂町内の遺跡出土の既存資料を広く地元で紹介する目的で開催した。

講演会では、中村耕作国立歴史民俗博物館准教授に、佐久穂町に所在する北沢の大石棒に関連し、「大形石棒と縄文人の象徴世界」と題して講演頂いた。象徴研究の意義について解説し、大形石棒の持つ意味や用途を検討した。展示会も盛況で、見学者の関心の高さが感じられた。

（春日皓介）



図98 佐久穂町内出土遺物の展示



図99 中村耕作国立歴史民俗博物館准教授の講演

(4) 展示室・県庁ロビー展示等

①展示室

当センターでは、発掘作業・整理作業を実施している遺跡から出土品を選定し、展示室において一般公開している。本年度は長野市浅川扇状地遺跡群・塩崎遺跡群、松本市真光寺遺跡、下諏訪町ふじ塚遺跡、辰野町沢尻東原遺跡、飯田市リニア事業関連遺跡の出土品を展示した。本年度は41名の見学者が訪れた。



図100 展示室の様子

②生涯学習月間長野県庁ロビー展示

開催日：11月21日（月）～12月2日（金）

会場：長野県庁1階 玄関ホール

内容：長野県教育委員会文化財・生涯学習課による生涯学習月間の展示に協力して、当センターで実施した長沼城跡の発掘調査や、夏休み考古学教室における縄文ワークショップの内容について紹介した。



図101 県庁ロビー展の様子

③縄文カード

普及啓発用教材「縄文カード」・「縄文カードたんけんマップ」・「縄文カードホルダー」を作成した。

埋蔵文化財を題材としたカードを収集することを通して県内各地の展示施設を訪れ出土品を見学する契機とし、文化財の保護思想の普及や文化財を活用した地域作りを推進することを目的とする。

今年度は、県内の考古資料を収蔵する展示施設へのアンケートを実施し、推薦のあった遺物22種類を作成した。重要文化財や県宝だけでなく、地域の特徴を示す資料を含め、県内10広域すべてを対象館を募ることができた。カードを5枚集めると記念品としてカードホルダーと学位証を授与した。

見学者からは、「カード収集をきっかけに、長野県に多くの縄文時代の遺跡や遺物があることを知り、楽しく博物館を巡ることができた。」など好意的な意見をいただいた。（村井大海）



図102 縄文カード



図103 縄文カードたんけんマップ、学位証、カードホルダー

(5) 講座・出前授業・職場体験

① 講座

○篠ノ井老人福祉センター生きがづくり講座 「おとなりさんの考古学入門」

内容：(全8回)

- 1) 旧石器・縄文時代「石器時代の長野県」(5/19)
- 2) 弥生時代「善光寺平南部の弥生時代」(6/17)
- 3) 古墳時代「長野県の古墳時代—装身具を中心として—」(7/21)
- 4) 古代「松本盆地における古代集落の立地と変遷」(8/18)
- 5) 古代「古代 水田跡」(9/15)
- 6) 現地見学「過去・現在・未来 幻の長沼城を掘る」(11/18)
- 7) 遺跡めぐり「篠ノ井町歩き」(11/17)
- 8) 中・近世「城下町」(12/5)

5回目となる本年度も、旧石器時代から近世と幅広い時代を題材とした。8回の内、座学が6講座、6回目の長沼城跡の発掘現地見学と7回目の篠ノ井地区遺跡めぐりの2講座は体験型の講座である。座学と体験型の構成は好評であったことから、今後も取り入れていく予定である。

② 出前授業

○上松町立上松小学校 5月13日(金)

内容：「弥生時代から古墳時代の歴史と文化～米づくりのはじまりから古墳の出現まで～」

6年生を対象に、各時代の話の中で実際に遺物

に触れながらの授業を行った。学校にある資料室所蔵の吉野遺跡群(木曾郡上松町)出土資料も使用したことから、地元の遺跡を知る機会となった。

○長野県総合教育センター教科等教員研修

6月17日(金)

内容：小・中・高校の教員を対象として、県内の発掘調査と松本市の古代集落についての講義と南栗遺跡での発掘体験を行った。

○信州大学学術研究院社会科教育グループ

11月25日(金)

内容：「社会科教材開発演習」

ふじ塚遺跡についての講義と礫石経の整理作業体験、「発掘成果の教育への活用」と題したディスカッションは、調査成果を地域に還元していく役割を認識することができるものであった。

○信州大学工学部建築史講座 12月9日(金)

内容：「過去・現在・未来 長沼城跡の調査から」

建築史専攻や学芸員資格課程受講の学生などが聴講し、意見交換では活発に意見が出された。

○長野県立篠ノ井高校

内容：(全3回)

- 1) 「石器時代の長野県」(12/13)
- 2) 「センターの業務の紹介と古代の集落調査について」(12/20)
- 3) 「アクセサリーの考古学—長野県の旧石器から古墳時代を中心に」(1/12)

特に、土偶などの模造品を手にとっての観察は興味を持って取り組んでいた。また、装身具の起源から意味や目的について考える講義では、現在



図104 篠ノ井老人福祉センター生きがづくり講座の様子



図105 信州大学工学部建築史講座の様子

の自分たちの生活に結び付けて、質問や意見交換を活発に行うことができた。

③職場体験

○長野市立篠ノ井東中学校

7月14日（火）～15日（月）

参加者：2年生 3名。

内容：土器の接合、礫石経の注記・実測作業等、遺物の整理作業と、図書室での図書整理とポスターの掲示等の作業を行った。

○豊野高等専修学校

7月25日（月）～26日（火）

参加者：2年生 1名。

内容：長沼城跡での発掘体験と、土器の拓本や礫石経の計測等、遺物の整理作業を行った。

○長野俊英高校

11月28日（月）～29日（火）

参加者：1年生 2名。

内容：土器の復元と拓本、礫石経の写真撮影と文字の解読等、遺物の整理作業を行った。

（遠藤恵実子）

（6）出版物

○長野県の埋蔵文化財情報誌『信州の遺跡』

【第19号】令和4年8月1日（月）発行

- ・最新調査成果から（長野市 長沼城跡）
- ・最新の報告書から（長野市 浅川扇状地遺跡群、南相木村 孫七坂遺跡、朝日村 氏神遺跡、中野市 南大原遺跡）
- ・史跡整備最新情報（松本市 史跡小笠原氏城跡



図106 職場体験の様子

の保存活用、茅野市 尖石石器時代遺跡—縄文のたたずまいの再現に向けた再整備—、川上村 大深山遺跡の整備）

・信州の近代遺跡—近代遺跡の射程—

・珍しきもの 兜の立物「鉄形」

・考古学の窓 信州の山城 ほか

【第20号】令和5年3月1日（水）発行

・最新の調査成果から（飯田市 西浦遺跡、飯田市 座光寺原遺跡、松本市 真光寺遺跡、坂城町 上五明条里水田址、長野市 篠ノ井南条遺跡、飯田市 黒田大明神原B遺跡）

・埋文ほっと情報 40周年を迎えた長野県埋蔵文化財センターの今までとこれから

・特集その1 北海道から出向してきた私が、長野県の皆様を紹介したい北海道の遺跡

・特集その2 巡ってみよう 日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」

・考古学の窓 ほか

○『長野県埋蔵文化財センター年報 39』

令和5年3月17日（金）発行

・2022年度の事業概要 ほか

（両角太一）



図107 長野県の埋蔵文化財情報誌『信州の遺跡』第19号

V 指導者招へい

期 日	所 属 等	氏 名	内 容
4月20日～21日	県文化振興事業団理事	市澤英利	長沼城跡ほか調査指導
6月3日 11月10日	長野県立歴史館	笹本正治 中野亮一	長沼城跡調査指導
5月31日	長野南警察署交通課	北村 優	交通安全講習
6月3日ほか	信州大学理学部	保柳康一	長沼城跡ほか土壌堆積物調査指導
7月4日～5日	東北大学特任教授	原口 強	長沼城跡地層調査指導
7月5日～7日 9月8日～9日ほか	立正大学文学部	時枝 務	ふじ塚遺跡整理指導
7月8日	信州大学理学部	保柳康一	石川条里遺跡ほか古環境解析指導
8月1日～2日	明治大学文学部	石川日出志	塩崎遺跡群整理指導
8月25日	長野県立歴史館	笹本正治 中野亮一	真光寺遺跡ほか調査指導
8月29日～31日	京都大学名誉教授 獨協医科大学 日本大学松戸歯学部	茂原信生 櫻井秀雄 五十嵐由里子	塩崎遺跡群ほか 出土骨鑑定、整理指導
9月21日	松本市教育委員会	竹内靖長	長沼城跡調査指導
9月29日 R5年1月24日～25日	滋賀県立大学名誉教授	中井 均	長沼城跡調査指導
11月4日～5日	大阪大谷大学文学部	狭川真一	真光寺遺跡ほか調査指導
11月29日～12月1日	京都大学名誉教授 獨協医科大学	茂原信生 櫻井秀雄	信州大学医学部所蔵ほか 出土骨鑑定、整理指導
12月5日～6日	明治大学文学部 元愛知県埋蔵文化財センター 愛知県埋蔵文化財センター	石川日出志 石黒立人 永井宏幸	塩崎遺跡群整理指導
R5年1月23日	新潟大学災害・復興科学研究所	卜部厚志	長沼城跡地層調査指導
R5年3月13日～15日	京都大学名誉教授 獨協医科大学 総合研究大学院大学 日本大学松戸歯学部	茂原信生 櫻井秀雄 本郷一美 五十嵐由里子	信州大学医学部所蔵ほか 出土骨鑑定、整理指導
R5年3月16日	飯田市教育委員会 阿智村教育委員会	春日宇光 中里信之	川原遺跡出土土器調査指導

VI 会議・研修会への参加

(1) 会議・委員会等

期 日	内 容	出 席 者	場 所
4月22日	公共事業に伴う埋蔵文化財保護に係る関係者会議	杉木有紗 春日皓介	塩尻市
5月12日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	原田秀一・山田秀樹 川崎保	リモート会議
6月16日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	原田秀一 川崎保	群馬県高崎市
6月21日～22日	文化庁・県教委による大規模発掘調査現地指導	原田秀一ほか	松本市、飯田市、長野市中野市
10月11日～12日	文化庁埋蔵文化財・史跡担当者会議	川崎 保 柳澤 亮	東京都（文化庁）
10月14日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック会議	西 香子 廣田和穂	新潟県新潟市
11月1・2日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	原田秀一ほか	長野市（ホテルメトロポリタン）
12月2日	県文化財保護審議会史跡・考古部会	川崎 保 柳澤 亮	長野市（センター）
R5年1月11日	県文化財活用活性化実行委員会	川崎 保 柳澤 亮	リモート会議

(2) 研修会等

期 日	内 容	参加者・調査者	場 所
7月～R5年3月	長野経済研究所 実務セミナー	酒井清美ほか15名	長野市
7月25日～29日	文化財デジタルアーカイブ課程	遠藤恵実子	奈良文化財研究所
7月26日～27日	第二種衛生管理者免許試験対策講習会	伊藤 愛 水科汐華	長野市
8月31日～9月1日	文化庁第1回埋蔵文化財担当職員等講習会	柳澤 亮 遠藤恵実子	石川県金沢市
9月26日～30日	層序学・堆積学・土壌学基礎課程	春日皓介	奈良文化財研究所
11月18日	県防災課航空レーザー測量活用事例研究	柳澤 亮 杉木有紗	リモート
R5年1月16日	遺跡確認調査にかかる先進技術現地調査（職員自己研鑽研修）	柳澤 亮 川崎 保	福島県南相馬市
R5年1月17日～19日	文化財三次元計測入門課程	伊藤 愛	岡山県岡山市（奈良文化財研究所）
R5年2月2日～3日	長沼城跡の発掘作業に関わる資料調査	広田良成・大泰司統	福井県福井市
R5年2月7日～10日	弥生・古墳時代変革期資料調査（職員自己研鑽研修）	原田秀一・櫻井秀雄・ 寺内貴美子・伊藤 愛	福岡県・佐賀県・長崎県
R5年2月16日	博物館等関係職員研修会	伊藤 愛・杉木有紗	千曲市
R5年2月21日	市町村等埋蔵文化財担当者発掘調査技術等研修会	杉木有紗・春日皓介	リモート会議
R5年3月9日～11日	上五明条里水田址の発掘作業に関わる資料調査	水科汐華・酒井実姫・ 熊木奈美	福島県南相馬市・白河市

Ⅶ 学校・関係機関への協力

(1) 学校等への協力（職場体験を含む）

期 日	名 称	対 応 者	内 容
4月14日～21日	長野市立通明小学校	廣田和穂	縄文土器パズル等の貸与
5月14日	長野市柳原地区住民自治協議会	山田秀樹・川崎 保	あやめまつりでの出土品展示
5月19日 6月16日 7月21日 8月18日 9月15日 10月20日 11月17日 12月15日	篠ノ井老人福祉センター (おとなりさんの考古学：全8回)	村井大海 杉木有紗 水科汐華 廣田和穂 西 香子 柳澤 亮 村井大海 酒井実姫	旧石器・縄文 弥生 古墳 古代集落 古代水田跡 長沼城跡見学 歴史散歩 近世城下町
6月～R5年2月	長沼地区住民自治協議会 (発掘から見える長沼の歴史講座：全5回)	柳澤 亮・岡村秀雄ほか	第1回 成果報告 第2回 親子発掘体験 第3回 遺跡見学会 第4回 講演会 第5回 意見交換会
6月10日 8月25日	長野市長沼小学校	岡村秀雄ほか	発掘現場見学
7月5日 10月21日ほか	飯山市道路河川課 (かわまちづくり協議会)	川崎 保	ワークショップ等
7月14日～15日	長野市篠ノ井東中学校	廣田和穂・杉木有紗 風間真起子	職場体験（2名）
7月25日～26日	豊野高等専修学校	柳澤 亮・岡村秀雄 廣田和穂・酒井実姫	職場体験（1名）
7月27日	和田公民館	河西克造ほか	南栗遺跡見学会
8月18日	松本市島立公民館	河西克造ほか	南栗遺跡子供向け見学会
10月5日	民間社会教育指導者	川崎 保	こもづちの貸与 (千曲市東小学校)
10月26日	松本市島立公民館	河西克造ほか	南栗遺跡一般向け見学会
11月3日	長野市大室公民館	川崎 保	公民館文化祭への普及啓発資料の提供
11月25日	信州大学学術研究院	西 香子・村井大海 水科汐華	社会科教材開発演習への協力
11月28日～29日	長野俊英高等学校	廣田和穂・西 香子 杉木有紗	職場体験（2名）
R5年1月13日 ～4月7日	山ノ内町教育委員会	柳澤 亮	縄文服の貸与

(2) 職員派遣・技術指導等

期 日	依 頼 者	対 応 者	内 容
4月～R5年2月	長野大学	川崎 保	講座（日本史概論・信州地域史）
4月17日	さかき歴史愛好会	西 香子	総会記念講演会「地中に残された水田遺構」
4月18日	中野市教育委員会	河西克造	高梨沢砂防堰堤建設予定地調査指導
5月13日	上松町上松小学校	櫻井秀雄	出前講座
5月20日 12月19日	佐久市教育委員会	河西克造	国史跡龍岡城跡保存整備委員会
6月4日	長野県立歴史館	柳澤 亮	信州学講座「幻の長沼城を掘る」
6月17日	長野県総合教育センター	川崎 保・廣田和穂 河西克造	教科等教員研修（社会科の基本Ⅰ）
7月3日	富士見町井戸尻考古館	綿田弘実	企画展講座「札沢遺跡の動物装飾付釣手土器」
7月6日 10月20日	長野市東北中学校	柳澤 亮・岡村秀雄 広田良成・大泰司統	出前講座 長沼城跡発掘体験
8月11日	諏訪考古学研究会	河西克造	遺跡調査調査研究発表会「ふじ塚遺跡」
10月1日	津南町農と縄文体験実習館	川崎 保	企画展講座「遺跡からみた千曲川流域の災害史」
10月10日	NPO 法人東海学センター	川崎 保	東海学シンポジウム「あの世に学ぶ」
10月27日 12月20日	愛知県埋蔵文化財センター	綿田弘実	下延坂遺跡ほか調査整理指導
11月5日	八十二文化財団	河西克造	現地見学講座「旭山城跡を歩く」
11月5日	飯田市下久堅公民館	長谷川桂子・伊藤愛 春日皓介・両角太一	地域歴史探訪「ひさかたウォーキング」
11月20日	御代田町浅間縄文ミュージアム	川崎 保・櫻井秀雄	博物館講座「平安時代の災害—仁和888と天仁1108—」
12月9日	信州大学工学部	柳澤 亮	建築史講座「長野県における遺跡発掘調査の概要」
12月19日	佐久市教育委員会	河西克造	国史跡龍岡城跡調査指導
12月13日・20日 R5年1月10日	長野県篠ノ井高等学校	村井大海・廣田和穂 水科汐華	出前講座
R5年1月10日～11日	東京大学埋蔵文化財調査室	寺内隆夫	小石川植物園内出土遺物の整理指導
R5年1月13日	川上村教育委員会	寺内隆夫	大深山遺跡保存活用検討委員会
R5年1月14日	長野県考古学会	水科汐華	遺跡報告会「坂城町上五明条里水田址の調査成果報告」
R5年1月21日	東京大学史料編纂所	柳澤 亮	金鶏会館連続講座「考古学で探る！幻の長沼城」
R5年2月11日	松本市教育委員会	河西克造	遺跡報告会「南栗遺跡の発掘調査」
R5年2月16日	信濃町教育委員会	大竹憲昭	野尻湖ナウマンゾウ博物館協議会
R5年3月6日	伊那市教育委員会	河西克造	史跡高遠城跡整備委員会

(3) 調査資料の利用

承諾月日	申請者	内容
2月28日	元興寺文化財研究所	石川条里遺跡出土前立物（鍬形）の閲覧及び画像の借用（掲載）
3月16日	中野市立博物館	南大原遺跡出土弥生土器ほかの借用
3月18日	龍鳳書房	塩崎遺跡群周溝画像の借用（掲載）
3月28日	埼玉県行田市教育委員会	柳沢遺跡青銅器画像の転載
4月15日	長野市柳原地区住民自治協議会	小島・柳原遺跡群塔鏡形合子ほかの借用
4月18日	雄山閣	北村遺跡人骨画像の転載
5月24日	新潟大学森貴教	南大原遺跡出土石器の閲覧
5月27日	県教育委員会文化財・生涯学習課	ジュニア考古学9号ほかの画像の転載
8月1日	日本テレビ放送網	屋代遺跡群木簡画像の転載
8月22日	長野市町田ゆかり	ふじ塚遺跡画像の転載
9月5日	中野市中島庄一	塩崎遺跡群出土土器の閲覧
9月5日	長沼歴史研究会	長沼城跡出土遺物画像の転載
9月6日	読売新聞大阪本社	石川条里遺跡ほかの画像の転載
9月13日	静岡県湖西市鈴木敏則	ナジギリ2号墳ほかの閲覧
10月25日	南山大学中尾央	信州大学医学部所蔵古人骨の閲覧
10月28日 11月29日	信濃毎日新聞社	真光寺遺跡画像の転載・2次利用
11月15日	大阪大谷大学地域連携センター	真光寺遺跡画像の転載
11月28日	安曇野市歴史文化遺産再発見事業実行委員会	三角原遺跡画像の転載
12月5日	雄山閣	南大原遺跡出土遺物画像の転載
12月9日	長沼歴史研究会	長沼城跡画像の転載
12月22日	長野市町田ゆかり	ふじ塚遺跡礫石経の閲覧
1月20日	朝日新聞社長野総局	長沼城跡画像の転載
1月23日	新村文化財保存会	真光寺遺跡画像の転載
1月26日	県長野地域振興局	塩崎遺跡群画像の転載
2月2日	松本市教育委員会	真光寺遺跡出土遺物の借用等
2月9日	南山大学黒澤浩	塩崎遺跡群出土土器の閲覧
2月9日	西日本短期大学高宮さやか	屋代遺跡群画像の転載

(4) インターンシップ等

平成29年度 (ボランティア)

期 間	所 属	氏 名	遺 跡
8月21日～9月20日 (発掘)	國學院大學	春日皓介	長野市小島・柳原遺跡群

平成30年度 (インターンシップ)

期 間	所 属	氏 名	遺 跡
8月6日～24日 (発掘)	東海大学	松下友樹	長野市石川条里遺跡
8月6日～30日 (発掘)	同志社大学	大石雅興	長野市石川条里遺跡
8月27日～31日 (整理) 9月1日～20日 (発掘)	國學院大學	春日皓介	長野市浅川扇状地遺跡
9月2日～14日 (発掘)	東海大学	宮本秀隆	長野市浅川扇状地遺跡群

令和元年度 (インターンシップ)

期 間	所 属	氏 名	遺 跡
8月16日～29日 (発掘)	金沢大学	今岡 蒼	辰野町沢尻東原遺跡
8月16日～29日 (発掘)	金沢大学	歌代若菜	辰野町沢尻東原遺跡
8月16日～29日 (発掘)	金沢大学	菅原瑞穂	辰野町沢尻東原遺跡
8月19日～9月13日 (発掘)	金沢学院大学	水科汐華	長野市石川条里遺跡
9月2日～9月13日 (発掘)	金沢大学	宮田和希	中野市南大原遺跡
9月2日～9月18日 (発掘)	信州大学	井澤広行	辰野町沢尻東原遺跡
8月20日～9月30日 (発掘)	金沢大学	速水透花	中野市南大原遺跡
2月6日～3月19日 (整理)	奈良大学	酒井実姫	長野市浅川扇状地遺跡群
2月17日～3月2日 (整理)	信州大学	井澤広行	辰野町沢尻東原遺跡

令和2年度 (インターンシップ)

期 間	所 属	氏 名	遺 跡
12月14日～2月26日 (整理)	信州大学	井澤広行	下諏訪町ふじ塚遺跡
2月1日～3月19日 (整理)	大正大学	両角太一	下諏訪町ふじ塚遺跡
2月8日～3月19日 (整理)	金沢学院大学	水科汐華	下諏訪町ふじ塚遺跡
2月24日～3月19日 (整理)	奈良大学	酒井実姫	下諏訪町ふじ塚遺跡
2月19日～3月19日 (整理)	東北大学	渡邊彩佳	下諏訪町ふじ塚遺跡
2月15日～3月19日 (整理)	金沢大学	菅原瑞穂	下諏訪町ふじ塚遺跡

令和3年度 (インターンシップ受入中止)

令和4年度 (インターンシップ)

期 間	所 属	氏 名	遺 跡
8月17日～30日 (発掘)	國學院大學	東 颯太郎	松本市南栗遺跡
8月17日～30日 (発掘)	金沢大学	下平彩樹	松本市真光寺遺跡
8月17日～30日 (発掘)	帝京大学	凌 飛	長野市長沼城跡
8月17日～30日 (発掘)	信州大学	塩澤佑樹	長野市長沼城跡
8月17日～30日 (整理)	信州大学	中村瑠璃	下諏訪町ふじ塚遺跡
8月17日～9月2日 (発掘)	信州大学	伊藤 晶	長野市長沼城跡
8月17日～9月6日 (発掘)	信州大学	前田悠希	長野市長沼城跡
8月17日～9月9日 (整理)	金沢大学	菅原瑞穂	下諏訪町ふじ塚遺跡
8月19日～9月2日 (発掘)	奈良大学	井出日和	松本市真光寺遺跡
8月19日～9月5日 (発掘)	信州大学	佐々木優奈	長野市長沼城跡
8月19日～9月8日 (発掘)	長崎大学	椎葉 萌	松本市南栗遺跡
8月22日～9月5日 (発掘)	國學院大學	小出晟生	長野市長沼城跡
8月22日～9月9日 (整理)	奈良大学	宮本和真	長野市塩崎遺跡群
8月29日～9月16日 (発掘)	明治大学	五味駿太	松本市南栗遺跡
8月29日～9月16日 (発掘)	奈良大学	渡邊 廉	長野市長沼城跡
9月1日～14日 (発掘)	金沢学院大学	今井咲良	長野市長沼城跡
9月1日～14日 (整理)	立正大学	金澤陽依	下諏訪町ふじ塚遺跡
9月5日～16日 (整理)	関西大学	小久保 輝	長野市塩崎遺跡群
9月5日～22日 (発掘)	金沢大学	金澤瑛葉	長野市長沼城跡
9月12日～27日 (発掘)	関西大学	神谷駿介	松本市真光寺遺跡
2月20日～3月10日 (発掘)	東海大学	小坂 亘	長野市長沼城跡
2月16日～3月2日 (整理)	弘前大学	清水綾乃	下諏訪町ふじ塚遺跡

(5) 県有施設（県立歴史館）利用の応急的保存処理

令和2年度（参考）

遺 跡	種類・点数	内 容	担 当 者	備 考
長野市浅川扇状地遺跡群	鉄製品544点 鉄製品154点	X線透過 有機洗浄・脱塩・樹脂含浸等	—	歴史館に委託
長野市石川条里遺跡 長野市塩崎遺跡群	鉄製品25点 鉄製品38点・青銅製品3点	有機洗浄・脱塩・樹脂含浸等		

令和3年度

遺 跡	種類・点数	内 容	担 当 者	備 考
長野市石川条里遺跡 長野市塩崎遺跡群	鉄製品14点 青銅製品・鉄製品21点	有機洗浄・脱塩・樹脂含浸等	寺内貴美子 馬場伸一郎 水科汐華	※

※令和3年6月16日付県教委・歴史館・事業団による金属製品の応急的保存処理作業の実施に関する協定締結

令和4年度

遺 跡	種類・点数	内 容	担 当 者	備 考
下諏訪町ふじ塚遺跡群	青銅製品93点	有機洗浄・脱塩・樹脂含浸等	水科汐華 酒井実姫	

(6) 派遣等の受入

出向

期 間	所 属	職	氏 名	遺 跡
4月～3月	北海道埋蔵文化財センター	調査研究員	広田良成 大泰司統	長野市長沼城跡ほか

研修派遣

期 間	所 属	職	氏 名	遺 跡
10月～3月	伊那市教育委員会	学芸員	熊木奈美	坂城町上五明条里水田址ほか

Ⅷ 組織・事業の概要

(1) 組織

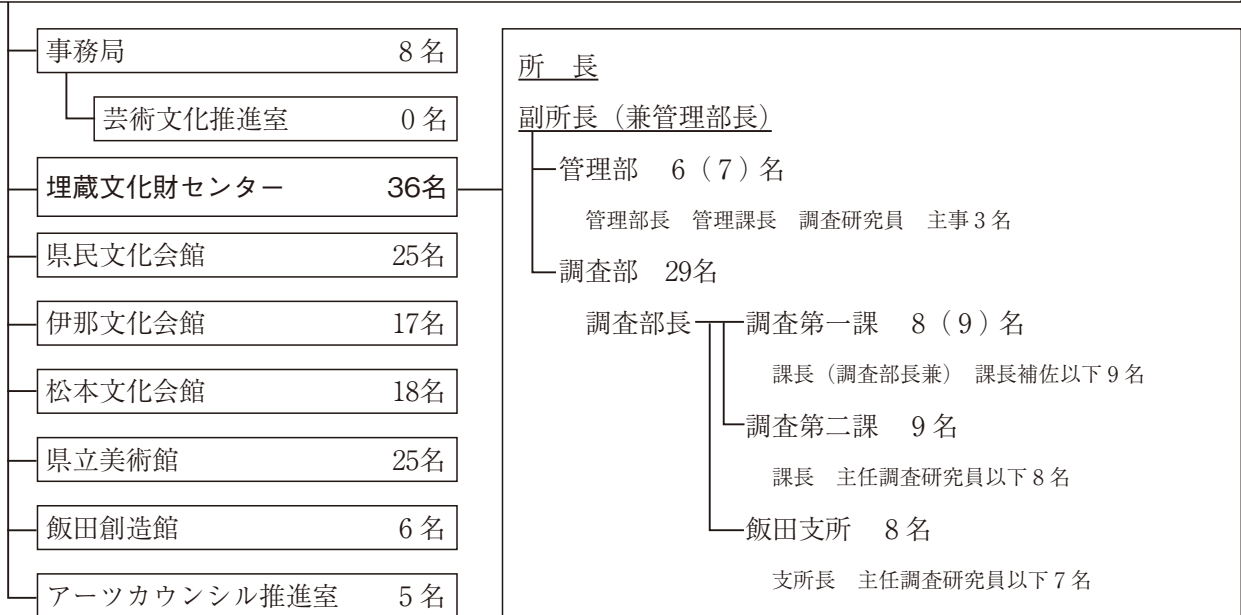
令和4(2022)年10月3日現在

一般財団法人長野県文化振興事業団

【評議員】 5名 堀内征治 笠原甲一 小出貞之 石川利江 山田明子

【理事会】 12名

理事長	：近藤誠一(元文化庁長官)	副理事長：金澤 茂	常務理事：山本晋司
理事	：市澤英利 唐木さち	松山 光	松本 透 北沢理光
	金井貞徳 丸茂洋一		
監事	：小川直樹 中村 誠		



(2) 職員(臨時職員を除く)

令和4(2022)年10月3日現在

	所 長	原田秀一
	副 所 長	山田秀樹
管 理 部	管理部長(兼)	山田秀樹
	管 理 課 長	神田弘一
	主 事	村井大海(調査研究員) 日向 育 高野和子 酒井清美
調 査 部	調 査 部 長	川崎 保
	飯田支所長	櫻井秀雄
	調 査 課 長	[第一課(兼)] 川崎 保 [第二課] 西 香子
	調査課長補佐	[第一課] 廣田和穂 [第二課] 柳澤 亮
	主任調査研究員	[飯田支所] 寺内貴美子 長谷川桂子
	調査研究員	[第一課] 水科汐華 酒井実姫 [第二課] 杉木有紗 広田良成 大泰司統(以上2名北海道埋文より出向) [飯田支所] 春日皓介 伊藤 愛 遠藤恵美子 両角太一
	調査指導員	[第一課] 大竹憲昭 平林 彰 寺内隆夫 若林 卓 [第二課] 綿田弘実 岡村秀雄 市川隆之 [飯田支所] 上田典男
	学芸員	[第二課] 熊木奈美(伊那市教育委員会より研修派遣)

(3) 事業

事業名または個所名		事業個所	委託事業者等	事業内容	精算(千円)	
受託事業	発掘・整理作業	国道18号 (坂城更埴バイパス)改築	長野市 塩崎遺跡群 ほか2遺跡	国交省関東地整局 長野国道事務所	整理作業	53,459
			坂城町 上五明条里水田址		発掘作業	64,640
		国道20号 (下諏訪岡谷バイパス)改築	下諏訪町 ふじ塚遺跡		整理作業	20,334
		一般国道158号 (松本波田道路)改築	松本市 真光寺遺跡		発掘作業	71,158
		松本 JCT 建設	松本市 南栗遺跡	国交省長野国道事務所 ネクスコ中日本	発掘作業	92,875
		長沼地区防災整備	長野市 長沼城跡	国交省北陸地整局 千曲川河川事務所 長野市河川課	発掘作業	363,276
		座光寺上郷道路(共和)	飯田市 座光寺石原遺跡	長野県 飯田建設事務所	発掘作業	24,026
		座光寺上郷道路 (座光寺上郷道路)	飯田市 宮崎南原遺跡ほか1遺跡		発掘作業	24,273
		国道153号線北改良	飯田市 五郎田遺跡ほか2遺跡		発掘作業	44,495
		飯田富山佐久間線	飯田市 川原遺跡 ほか1遺跡		発掘作業	94,947
		若穂スマート IC	長野市 川田条里遺跡	長野市	発掘作業	41,552
		北沢東工場適地開発	辰野町 沢尻東原遺跡	辰野町	整理作業	29,997
	リニア中央新幹線	飯田市 五郎田遺跡ほか4遺跡	東海旅客鉄道株式会社	発掘作業	222,877	
	技術支援	長和町教育委員会	長和町内遺跡	長和町	分布調査等	3,079
信州大学医学部		県内遺跡	信州大学	整理作業	5,000	
	研修等	長野県教育委員会	奈良文化財研究所 職員自己研鑽研修等			
自主事業	普及啓発	施設公開(夏休み考古学教室) 8月			3,284	
		出土品展(速報展)・報告会(振るしん) 3月・10月				
		遺跡説明会及び発掘体験				
		広報誌「信州の遺跡」19・20号の刊行				
		普及啓発用教材の作成「縄文カード」ほか				
		出前授業・地域普及啓発事業への協力		70		
	その他	インターンシップの受入			—	

Ⅸ 調査研究ノート

- (1) 飯田市五郎田遺跡出土の直弧文の描かれた高坏について
調査研究員 遠藤恵実子
- (2) 私牧としての佐久穂町小山寺窪遺跡について
調査部長 川崎 保
- (3) 坂城町上五明条里水田址における製鉄炉について
調査研究員 水科汐華・酒井実姫
学芸員 熊木奈美
- (4) 南信地域における物質文化の一例 —糸切鋏と沢蟹をめぐる習俗—
調査研究員 両角太一

(1) 飯田市五郎田遺跡出土の直弧文の描かれた高坏について

遠藤恵実子

1 はじめに

リニア中央新幹線建設に伴う飯田市五郎田遺跡の本調査は令和3年度から開始し、弥生時代から古代の集落跡が姿を現わしてきている（遺跡の詳細は、年報38・39号を参照）。遺物も多量に出土しており、基礎整理作業を行うなかで、令和3年度の調査で出土した古墳時代中期の高坏に「直弧文」が描かれていることが判明した。

土器に直弧文が描かれている例は、飯田地方では初めての出土例であり、今回は現段階で確認できたことについて紹介する。

2 出土遺構

直弧文の描かれた高坏が出土した土坑（SK265）は古墳時代の竪穴建物跡（SB21）と重複し、本跡の方が新しい。

SB21の床面検出時点での規模は100cm×64cmの楕円形である。確実に土坑覆土となるSB21床面から底部までは16cmあり、底部に近い位置から高坏をはじめ小型壺・甕などが出土しており、これらは埋納したものと推察する。なお、この他にも遺跡内では同様に高坏が出土しているため、高坏が出土する土坑自体は特別な存在ではない。



第1図 直弧文の描かれた高坏

3 直弧文の描かれた高坏

高坏（第2図）は、器高13cm、口径17.2cm、底径12.8cm、脚部高8.1cmである。このうち直弧文は脚部と裾部に描かれている。

坏部は外に開き、脚部から裾部が屈折する。胎土から在地産のものと推定される。なお脚部内側にあるナデ調整は、同じ遺構出土の文様のない高坏脚部にはナデがないことから、他のものよりも丁寧に作られているとみられる。

脚部と裾部の直弧文の形態は、異なっている。以下、脚部と裾部の各文様について述べる。

4 文様の概要

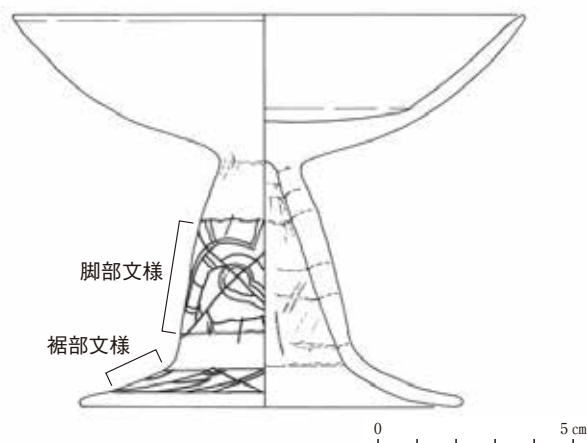
(1) 脚部（第3図） 脚部は全体が出土しており、文様の全体を見ることができる。文様の構成は、底部から2.4cmと6.3cm上に一周する直線が引かれ、この間3.9~4.4cm（3図展開図での幅）が文様帯となる。この上下の横線を結ぶX字の区画が2カ所向き合う位置に描かれる。このX字を中心に、いわゆる直弧文の渦状などの弧線表現にあたる文様①がある。2つの文様を比較すると反転した状態で描かれ、さらに中央の勾玉状の文様は反転後に90度右に回転した位置となっている。

またこの文様の間には、区画線と中央文様線をつなぐ弧線②が右上と左下にそれぞれ2本入り、その中央に同じく弧線1本が、横方向には弧が上を向き、縦は横線を中心に上線が右側に、下線が左側に弧が向く線が入る。ただし、この文様は片方のみで、もう片方はこれの半分（3図左端のみ）となっている。この違いは割付の問題であると考えられる。

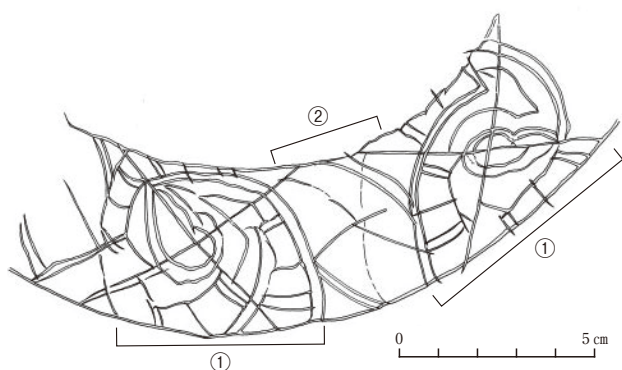
施文順序は大きく、上下の区画線→中央のX字区画（右上から左下の線が先）→X字区画を中心とした文様①→文様間の弧線②の順で描かれている。特に上下の区画線は連続せず何回か切れていることから、土器を手に持った状態で、上下直線

とX字の区画は土器を左回りに回して描いている。また、下書きや割付けなど、文様以外の線や修正をした痕などが見られないことから、フリーハンドで一気に描かれたものと考えられる。

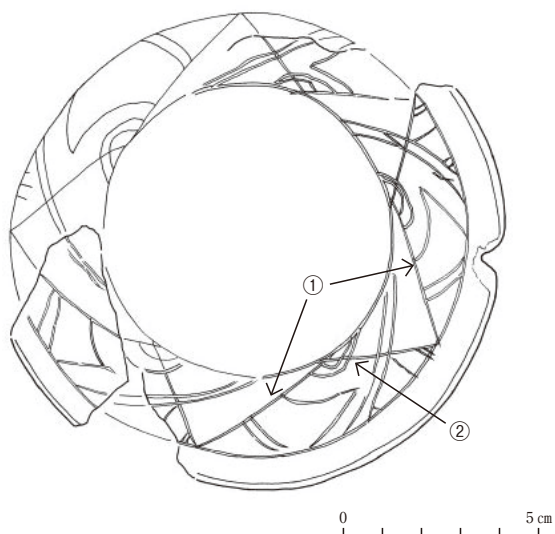
(2) 裾部 (第4図) 欠損しているため、残存は全体の半分ほどである。上下に1周する区画線



第2図 高坏実測図 (1 : 3)



第3図 脚部文様展開図 (1 : 2)



第4図 裾部文様実測復元図 (1 : 2) (1本線部 文様復元)

は、下線 (端部側) は裾端部から0.7~1 cm内側に、上線 (脚部側) は下線からほぼ2 cmの幅で一周し、この間の幅 (1.8~2.0cm) が文様帯となる。この上下の区画線を鋸歯状に区画する斜走線により、上線を頂点とする三角形と下線を頂点とする三角形が交互に5個ずつ描かれる形となっている。文様の区画は、右上から左下の斜線① (文様区画線) の間で1区画、左上から右下の線② (中央斜線) が1区画の中央に入る構成となり、文様区分も5区画となる。

各文様の構成は、文様区画線と中央斜線の交点下から中央斜線の右側にかけて半円形が2本線で、文様区画線と右側と中央斜線の上部の間から、中央斜線の中心を通過して左下に行く2重の斜めの弧線が入る。区画左側には、下区画線から上に2重の斜め弧線に沿って2重の弧線と文様区画線の交点までの半分の高さまでの弧が下を向く線と中央斜線の真ん中からこの弧線にあたる弧線が入り、この線の左側に文様区画線から下部の区画線までの2重の弧線が入る。区画は正確な5等分ではないことから、割付や下書きは行われていないとみられる。施文順序は、上下1周する区画線のあと斜線の区画が入るが、先に区画線5本、その後中央斜線5本が土器を左回りにして上線から下線へと描いている。そして最後に文様区画線に合わせて中の弧線の文様が描かれている。上下円形の区画線は正円に近く一定であり、コンパスのような道具が使われた可能性が考えられる線となっている。

(3) 施文工具

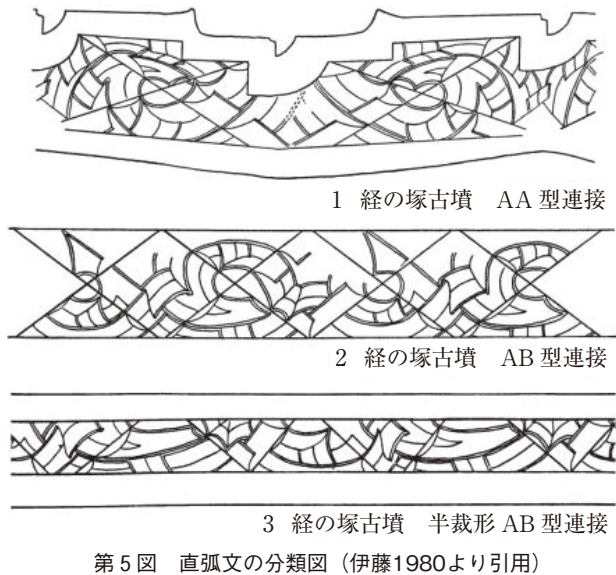
文様線の観察を細かく行ったところ、描かれている線は、筆圧の強弱による変化はあるものの、基本的には1 mm弱の幅である。工具は先端が尖ったものと考えられ、胎土には1 mm前後の礫が入るが、線が深く入った箇所でもこの礫の剥離や移動が少ないという特徴があることから、尖った部分が長い、細長い形状のものと考えられる。

5 直弧文の文様について

直弧文は、古墳時代前期から後期と古墳時代全

般を通してみられる文様で、九州に多い装飾古墳の石障や石棺のほか、刀剣装具が多くあり、このほか埴輪や鏡にも描かれている。

本遺跡の高坏は、脚部の文様がAA型接続形の完形で、1区画の文様が反転した中央文様の間に中間の文様が入る（5図-1に類似）。裾部はAB型接続の半裁形に分類される（5図-3）。



6 飯田地域の直弧文

飯田地方は、国史跡飯田古墳群に代表される、中期から後期の前方後円墳を中心とした古墳が多く造られた地域である。特に中期では馬の埋葬土坑や馬具を持つ有数の地域で、馬匹文化を受容した馬生産の地としての中央政権とのつながりや半島に関わる渡来系の要素が強い地域である。

これまでに飯田地方で直弧文が確認されているのは、埴輪や刀剣装具で、いずれも古墳出土の遺物であり、古墳に関わるものである。

このうち埴輪については、溝口の塚古墳で直線を組み合わせた文様が見られるが、模倣などが考えられ、直弧文の文様を理解していたとは言い難いものである。本遺跡の直弧文に近いものとして、鹿角製の刀剣装具が挙げられる。

鹿角製刀剣装具は、5世紀中頃から後半の溝口の塚古墳、月の木1号墳、妙前大塚古墳から出土している。鹿角製という性質から、刀剣に対し残存が一部となるが、この中で残存状態が良好な溝口の塚古墳例は、主体部出土の鉄剣と鉄刀があ



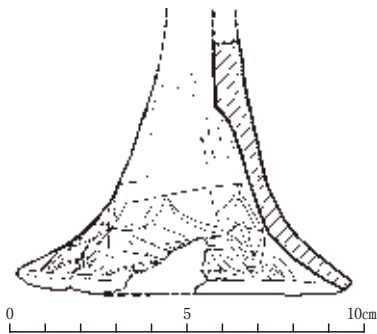
第6図 溝口の塚古墳出土剣装具 (飯田市教育委員会提供)

る。鉄剣では、把頭の位置の飾り板（第6図、註1）、直刀では、鞘口と鞘尻で直弧文を確認することができる。飾り板はA型（単位）の完形。鞘口と鞘尻は文様幅から半裁形の文様とみられ、直弧文の形としては、AA型・AB型接続の半裁形である。飯田の古墳に副葬された刀剣装具では、把頭にA型完形、把縁ほかにはAA型またはAB型の半裁形が使われている傾向がある。

刀剣装具においては、把頭にAA型・AB型接続形の完形が、把縁にはAA型・AB型接続形の半裁形が多く、鞘口、鞘尻では半裁・完形の両方が使われている。こうした状況を踏まえ、本遺跡の直弧文が描れた部位をみると、脚部は円錐形で把頭に似た形に、裾部は平面を開いた形で帯状に展開する柄縁に似る。刀剣装具の文様構成と本遺跡の高坏を合わせてみると、AA型接続形の完形の把頭の文様が脚部に、裾部の半裁形の文様は柄縁や鞘口、鞘尻にあたる文様と推測される。高坏が屈折形で脚部と裾部が明確に分かれている器形に、部位の形状によって刀剣装具と文様を合わせた可能性が考えられる。

7 土器に描かれた直弧文

土器に直弧文が描かれ、本例のように2パターンの文様があることについて考えてみたい。土器への直弧文の施文は、出土例はさほど多くないうえ完形が少なく破片のみの場合が多い。この中で全体の様子が分かる布留遺跡（奈良県）出土例（第7図）は、古墳時代中期の高坏で、ハの字に広がった脚の下部に1周した文様が描かれてい



第7図 布留遺跡出土 高杯の直弧文
実測図（竹谷1994より引用）

がみられる。本遺跡例が器形を意識して文様の配置を行った可能性からみれば、脚部の形が異なることが考慮されている可能性も考えられる。

8 鹿角製刀剣装具の文様との関係

直弧文が描かれた鹿角製刀剣装具の中心となる時期が中期前葉から後期前葉であり、本遺跡出土高杯も同じ時期である。

鹿角製刀剣装具は、畿内周辺でその大半が生産、供給され当時の中央集権が生産と分配を管理、把握していたものである。生産地が限定・管理された定型化した文様構成であることは、連接法則など「直弧文がきわめて厳密な法則性をもつ」（伊藤1980）ものであることからすれば、特に5世紀を中心とする鹿角製刀剣装具ではこの法則性が守られているということは重要である。

鹿角製刀剣装具の直弧文の著名な例として、経の塚古墳（宮城県）の刀装具（5図）、磯間岩陰遺跡（和歌山県）の刀剣装具がある。これらの直弧文は文様の反転など法則性の高いものであり、本遺跡例は上記例に類似した文様の形といえる。逆に溝口の塚古墳などの例との比較では、上下線とX字による区画といった基本的な構成は同じであるが文様自体は異なっており、本遺跡の直弧文は、飯田地域の古墳に納められたものよりも、経の塚古墳や磯間岩陰遺跡などの遠く離れた場所のものと同様形に近い。これは地元古墳の刀剣の模倣ではなく、古墳時代中期に畿内の管轄のもと生産され地方に配分されたものと同じといえる。本遺跡の直弧文を描いた人物は、畿内にて刀剣の製作に関わっていたことが考えられる。

9 直弧文の描かれた土器からみた飯田地方

本遺跡に直弧文の描かれた土器があることについて、現状で考えられることは、①直弧文は、文様の法則性に則ったもので、描き方からも文様を熟知した人物によって描かれている。②在地の土器に描かれ、その土器が埋納されたのは集落内の土坑内であり、遺跡内では普遍的に行われている方法によるもの、の2点である。

①については、畿内において刀剣装具の制作など直弧文を描くことに携わっている人物が飯田地方にいたことがいえる。②では、本遺跡の高杯を埋納する土坑が複数存在するという集落の中では普通にみられる風習の中に、畿内中央から首長に送られた「威信財」に関わる文様が描かれた高杯があるという特異な点は、今後集落の性格を考えるうえで重要となる。本遺跡の人々は直弧文の意味を知っていたのかも知れない。

本稿では類例等を十分に検討しきれていないため、推定のみで実態はつかめてはいない。しかし、本遺跡から出土した直弧文の描かれた土器からは、元々畿内地方とのつながりが強かった飯田地方において、直弧文という古墳時代中期に中央から地方にもたらされる威信財の制作に関わる人物の存在が示唆された。本稿では資料の紹介をするにとどまったが、直弧文の描かれた高杯が飯田地域にある意味など、さらに検討を続けていきたい。

執筆にあたり、飯田市教育委員会下平博行氏、春日宇光氏の御教授を得た。記して感謝申し上げます。

註1 素材について、報告書では「骨製の可能性が高い」とされているが、鹿角製の可能性がある。

〈参考・引用文献〉

- 伊藤玄三 1980『直弧文』ニューサイエンス社
- 竹谷俊夫 1994「布留遺跡出土の土師器直弧文高杯について」『天理参考館報』天理大学附属天理参考館
- 菊池芳朗 2021「古墳時代鹿角製遺物の生産と流通にかんする予測—刀剣装具を中心に」『磯間岩陰遺跡の研究 分析・考察編』
- 飯田市教育委員会 2001『溝口の塚古墳』
- 飯田市教育委員会 2007『飯田における古墳の出現と展開』
- 飯田市教育委員会 2012『飯田古墳群』

(2) 私牧としての佐久穂町小山寺窪遺跡について

川崎 保

はじめに

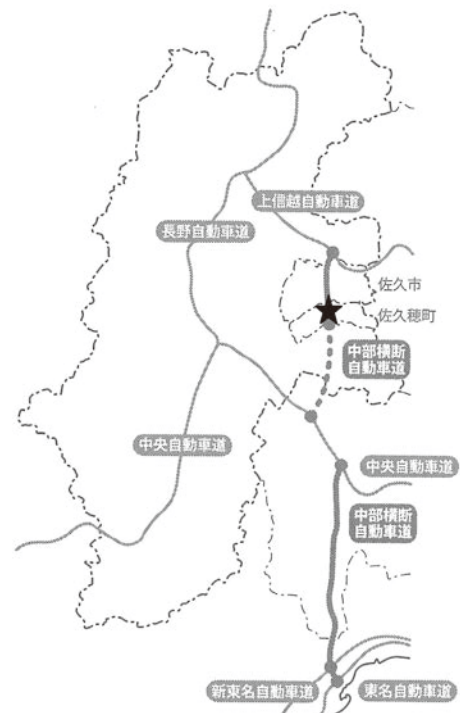
中部横断自動車道の建設に伴って佐久穂町内の遺跡が発掘調査され、2020年3月に発掘調査報告書として公表されている（長野県埋文2020）。その中の一つ、小山寺窪遺跡は、寺院（津金寺）跡伝承地としても知られ、過去の発掘調査でも古代竪穴住居跡や中世五輪塔を含む墓群が検出されている（佐久町教委2002）。高速道地点の調査でも、古代から中世の遺構・遺物は検出されたものの、寺院の存在を直接うかがわせるようなものはなかったが、一方で、古代から中世にかかる遺構や遺物が検出されており、その当時の人間の活動が見られる。

発掘調査の段階では、検出された個々の遺構や遺物の年代や性格について、年報、現地説明会や速報展などで発掘成果に基づき公表されている上に、調査組織としての正式報告書が刊行された。さらに、将来的には遺物を含めた調査資料が移管された佐久穂町で研究や活用がなされるであろうが、個々の遺構や遺物の調査成果を見直し、遺跡としての性格を多少なりとも明らかにし、今後の地域研究や更には活用に益するよう、見解を簡単にまとめた。

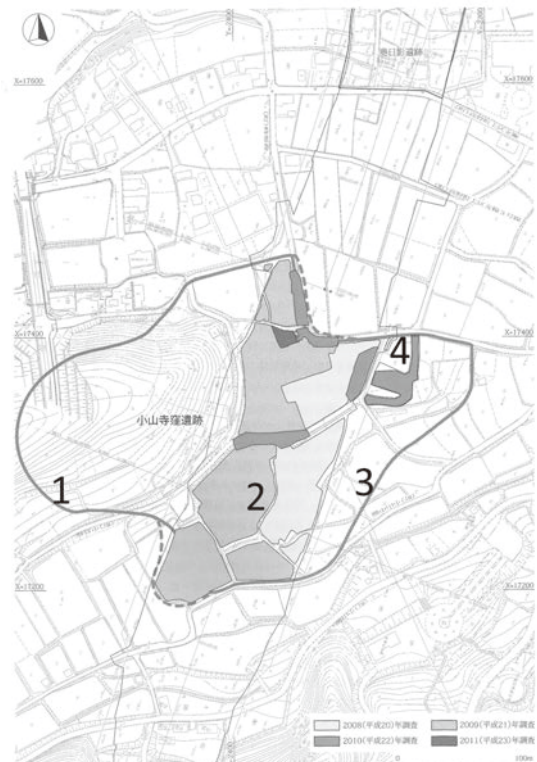
遺跡の概要

小山寺窪遺跡が所在する佐久穂町は北八ヶ岳から千曲川を横断して関東山地に接するように位置する。巨視的に見れば、北八ヶ岳山麓の東端と千曲川左岸の河岸段丘が接する地点にあり、微視的に見れば、八ヶ岳山麓の東端の低丘陵（小山）と、さらに同じく東西にのびる低丘陵との間に沢が流れる窪地（小山窪）に渡る遺跡である（佐久穂町2012a）。

この小山窪付近には、「津金寺」（三津金寺：立科町津金寺、山梨県北杜市津金山海岸寺と南佐久の津金寺）があったという伝承があり、南佐久の



第1図 小山寺窪遺跡の位置



第2図 小山寺窪遺跡の調査次と範囲

表1 小山寺窪遺跡発掘調査歴

次	年	調査主体	調査原因	文献
1	2000年（範囲確認） 2001年（本調査）	佐久町教委	農道整備	（佐久町教委2002）
2	2007年（試掘調査） 2008年～2011年（本調査）	長野県教委 長野県埋文	中部横断自動車道建設	（長野県埋文2020b）
3	2010年	佐久穂町教委	東電鉄塔新設	（佐久穂町教委2012a）
4	2010年	佐久穂町教委	町取付道路建設	（佐久穂町教委2012b）

津金寺は、平林山津金寺（現佐久穂町千手院）であるとも、再三移転したともいわれ、当地もその比定地の一つであったらしい（井出1998）。

今まで4次の発掘調査が行われている（表1・第2図）が、とくに、2001年の小山寺窪遺跡第1次発掘調査際には、推定で少なくとも100余基（多く見積もれば150余基）もの五輪塔を伴う中世の墓群が検出されている。調査範囲内では、寺院と想定できるような建物跡自体は検出されなかったが、これだけの五輪塔を建造しつづける氏族の存在と合わせて、周辺に中世寺院の存在が期待されていた（佐久町教委2002）。

2007年には、中部横断自動車道建設に伴う長野県教育委員会の試掘調査によって本遺跡が丘陵上のみならず、窪地側にも広がることが確認された。よって、現在の中部自動車横断道佐久穂インターチェンジ用地内が調査することになった。2008年からの4か年、調査面積のべ22,180㎡（第2図のトーン部分）、古代から近世にかけての竪穴建物跡・竪穴状遺構17軒、掘立柱建物跡13軒、土坑1059基、溝跡21条、杭・柵列1条、水田跡2か所が検出されている（長野県埋文2020）。ただし、寺院を想定させるような規模の建物跡は検出されなかった。

小山寺窪遺跡を区画する「大型溝」

古代から中世にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡や土坑群が検出されている。こうした古代から中世の遺構がある程度まとまって見つかること自体は、佐久盆地南部としては決して珍しいことではない。北東側に近接する佐久穂町奥日影遺跡では奈良時代（8世紀）の須恵器窯跡が検出されている（長野県埋文2020）。佐久市域でも尾根ば



第3図 溝跡 SD07

かりでなく、山あいの窪地状地形部分にも、古代から中世の遺跡が点在し、開発あるいは活用されていたことがわかる。中には平安時代後期の鍛冶関連遺構が見つかった洞源遺跡（2019a）や中世寺院跡が検出された地家遺跡（長野県埋文2019b）のようにある程度性格が特定できるものもある。無論、平野部と異なる山間地の開発に関係があることは立地から推測されるが、具体的に描きだすとなるとなかなか難しい（長野県埋文2020a）。

本遺跡でも第2次調査の2008年は窪地の小山沢沿いの低地を調査し、主に中近世の水田跡に伴う溝跡が認められた。さらに、2009年には、丘陵の最先端の尾根上を調査したところ、長いものでは90mを越える溝跡などが複数検出された（第2表）。このように小山寺窪遺跡では、遺跡の中を直線的な溝が横断ないし縦断していることに特徴がある。

小山寺窪遺跡で検出された溝は全部で21本（分岐したものをあわせて1本と数えれば20本）となる。遺物は、概ね、平安時代（9世紀）から室町時代（14ないし15世紀）までのものが含まれてい

表2 小山寺窪遺跡の主な古代から中世の大形の溝跡（第4図）

記号	長さ	幅	深さ	断面	等高線との関係	主な出土遺物
SD07	100	2	0.9	箱堀	斜行ないし平行	平安：土師器、黒色土器、須恵器、中世：内耳土器、古瀬戸、中津川等、埋土上層よりウマ下顎歯列4点
SD08	93	1.8	1.2	薬研堀	平行・直交	平安：土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器坏類等
SD09	77	1.6	0.5	薬研堀	斜行・平行（弧状）	平安：土師器、羽釜、中世：青磁碗
SD13	123	3.6	1.2	薬研堀	斜行・平行	平安：土師器甕、中世：内耳土器、青磁碗、常滑片口鉢
SD15	115	1.6	0.9	薬研堀	平行・斜行	平安：土師器甕、須恵器坏、中世：内耳土器、山茶碗、中津川甕・青磁碗、洪武・永楽銭等20点

長野県2020bを一部改変、溝の長さはいずれも検出された長さ。法量はすべてm。

る。本遺跡に限らないが、竪穴建物跡など人間が生活した痕跡に伴う遺構に比べ、溝から出土した遺物は少なくかつ年代幅を持つことが多いので、少ない遺物から年代を限定することは難しいが、概ね古代から中世に位置づけられている。

50m超の溝（以下「大型溝」）が5本（うち100m超が3本）、最大幅1m超のものが14本（うち2mを越えるものが4本）、最大深も0.5m超のものが5本（うち1m超のものが2本）もある。これだけの規模と年代幅を考えると一時期に形成されたというよりは遅くとも平安時代初期の9世紀から営々と築かれていて、鎌倉時代から室町時代にかけては、度々浚渫や補修を繰り返した。しかし、江戸時代以降の遺物が全く含まれていないことを見ると、近世にはその機能を終え、最終的に近代以降は埋没した状況になったと考えられる。

大型溝の事例

一見弥生や中世の溝跡かと思われるようなもので、古代に属した溝であった例があり、これらが牧と関連することが知られている（第5図）。

大型溝が牧に伴うことは、自体は想定されていた。発掘調査の事例ではないが、茨城県八千代町では50～300haの範囲を区画する溝、土塁の痕跡、製鉄遺跡（尾崎前山遺跡）が検出されており福田豊彦は古代の「牧」の存在を想定する（福田1981）。群馬県（前沢1991）や長野県（山口1990）でも牧比定地について同様な景観が想定されている。

区画する大型溝について発掘調査の成果からとくに言及したものとしては、群馬県安中市中野谷地区の事例がある。同地域では、奈良・平安時代

の大規模な溝による区画が検出されている（中原遺跡、下塚田遺跡、下宿東遺跡、細田遺跡、注連引原Ⅱ遺跡）。中でも注連引原Ⅱ遺跡では、箱薬研状（底部が平坦で途中まで箱型だが上半は漏斗状に開く断面形）で、上幅1.5～3.0m、下幅0.7～1.3m、深さ0.7～1.3mをはかる大型溝が検出されている（安中市教委1988）。注連引原Ⅱ遺跡では当初弥生土器がまとまって出土したことから、弥生時代の環濠とも想定されたが、大工原豊によれば、当該遺跡周辺の中野谷地区では、100ha以上にも及ぶ範囲に8世紀から9世紀にかけて構築された区画する「大型溝」跡が検出されているだけでなく、狩り込め（野馬追い）用の施設、馬具などを生産する各種工房や鍛冶施設、管理用の建物といった遺構や水場などが想定できることから、これらの大型溝は放牧用の各種区画施設（大溝・土塁・柵）に相当するものであり、「牧」に関連するものとする（大工原1994）。

この他、群馬県では、安中市中野谷地区以外でも、渋川市半田中原南原遺跡でも大型の区画溝が検出されており、牧にかかわる遺構（以下、牧関連遺構等と略す）と認識されている（高島2008）。

山梨県でも、北杜市梅之木遺跡で3歳ぐらいの仔馬の骨および焼きごてが検出された。同地は上皇の私牧（御院牧）「小笠原牧」比定地の中にあることから牧との関連が注目され、その後、周辺の寺前遺跡からは馬装の鈴、上原遺跡からは轡、浅尾原Ⅳ遺跡からはこれらの鉄製品を製作可能な鍛冶工房群と炭焼き窯が検出されただけでなく、とくに永井原Ⅴ遺跡では、検出された全長約700m、幅1m、深さ0.5mで、U字形部分が多いが、

注連引原Ⅱ遺跡同様の箱薬研状の断面形も見られる（明野村教委2004）。佐野隆はこれらを総合的に把握して、前述の小笠原牧に関連する施設と理解する（佐野2008・2014）。

東京都でも多磨（多摩）地域で、9・10世紀に遡る可能性がある区画溝が検出されている。町田市木曾森野遺跡では東西300m、南北200m以上の2条の溝で、断面V字（薬研堀）状で最大幅1.8m、深さ1mのものを含み、日の出町三吉野遺跡群でも長さ200mで方形に区画でやはり断面はV字で、幅1.2～1.8m、深さ0.5～0.7mであるという（松崎2008）。

これらの区画溝が長大であるだけでなく、周囲から牧に関連する遺構・遺物が検出されていることもこれら大型溝を牧関連遺構とする根拠となっている。

地域史研究から見た佐久穂町周辺の私牧

信濃国に官牧（十六牧）が存在し、うち佐久には、望月、長倉、塩野牧がおかれ、さらにその周辺には在地の武士団が管理・経営する私牧がいくつもあったとされる。中でも南佐久の茂来山麓、千曲川右岸の抜井川南岸には、馬場、駒寄、牧沢（楯氏関連）、野馬除、馬洗の池、下馬瀬口（矢田氏関連）といった牧に関連するとされる地名や城館跡（楯六郎館跡、大崖城遺跡）が存在しているが、井出正義は、これらは佐久武士団の楯氏（六郎親忠）と矢田氏（義清）の拠点であり、当地に彼らが経営する私牧があったと推定する（井出1998・2004）。

とくに、抜井川南岸（左岸）の槇（牧）沢川との合流点近くに存在する後平（うしろだいら）遺跡からは、やはり長さ100m以上もある、上端幅3～4m、底幅0.5～0.7m、深さ1.4～1.6mの野馬除状遺構（溝跡）が検出されている。同遺構からは遺物は極めて少ないが、周辺の遺構から銜（くつわ）状鉄製品などの鉄製品が出土していることから、発掘調査担当者は、千曲川右岸に在地武士団が経営したと考える私牧が存在したことから、この事例についても、私牧関連遺構（野馬除け）

と想定している（佐久町教委1987）。

「ウマ」にかかわる遺構・遺物

すでに述べたように古代から中世にかけて牧関連遺跡からは、大型溝が検出され、とくに古代末には断面箱型や薬研堀のものも出現していることがわかる。

また、小山寺窪遺跡には、大型溝以外に、以下のウマ（やその文化）にかかわると考えられる遺構・遺物が存在する。

溝跡出土のウマの歯

まず、ウマそのものの一部である歯が溝跡SD07の埋土上層から下顎歯列4点が出土している。溝SD07は主に下層から平安時代前期の9世紀の土器がまとまって出土しているので、溝の開削は古代に遡るが、上層からは中世の遺物も出土している。ウマの歯も古代から中世にかけて、この溝にウマの歯が廃棄されるような状況があったことがうかがえる。

馬屋状遺構

調査範囲の南西側に古代から中世に属すると思われる建物跡群が見つまっている。中でも掘立柱建物SB14付近は、掘立柱建物跡、竪穴建物跡（の一部の溝）、小竪穴が集中、重複していてわかりにくかったが、長方形の小竪穴と溝をともなう掘立柱建物が検出されている（第6図）。調査段階では、複数の遺構が時間差を持って造成、廃棄されて重複されたことも考えたが、土層観察から切り合いは確認できず、掘立柱建物跡に小竪穴、溝がともなっている可能性が高いと考える。こうした小竪穴や溝を伴う掘立柱建物跡は、中世遺跡でいくつか類例が知られていて、馬屋状遺構との類似する（曳地2010）。

木製人形

筆者が馬屋状遺構と考えるSB14の西側のやや低い段には、建物跡とは思われない小土坑群が展開するが、その一つ小土坑SK1074から木製人

形4点が出土した(第7図)。4点は二群に分かれ、前者の1・2は2か所を抉り、被りものと推測する部分と顔部・頸部・胴部を表現する。被りもの上部は山形状を呈し、裏面は被りものから頭部にかけて斜めに削る。長さは1が16.3cm、2が15.4cm。後者の3・4は1か所を抉り、顔部・頸部・胴部を表現するが、被り物の表現はない。長さは3が14.1cm、4が14.7cmを測る。前者に被りもの表現があってやや大形であることから、男性、後者は被りもの表現がなく、小形であることから女性と推測されている。山田昌久によれば、布着せ人形の可能性が高いと指摘されている(長野県埋文2020b、109頁注)。同土坑からは木製品以外の遺物が出土しておらず、木製品自体の炭素年代などの理化学的な年代測定も行われていないが、周辺の土坑群からは中世の陶磁器が出土している。

布着せ人形といえば、岩手県など東北地方に見られる「おしらさま」が有名である。おしらさまは、農業や蚕の神以外に『遠野物語』でも紹介される「馬娘婚姻譚」に象徴される馬の神としても知られる(柳田1910)。ウマそのものではないが、馬文化に関わる遺物として解釈したい。

まとめ

平安時代の遺物しか出土しない溝の断面形はいずれもU字状、一方で、古代だけでなく中世遺物を含む「大型溝」のそれは薬研堀形(V字)あるいは箱形である。溝の断面形だけで遺構を編年することは、そもそも難しいが、今のところ古代(平安時代前期?)に開発され、その後中世にも使いつづけられ、近世以前に廃絶したものが薬研堀状を呈していると考えられる。

こうした中世の薬研堀状の溝に少なからず平安時代の遺物が含まれることは、中世の開発時に古代建物跡などを破壊した際に混入したというよりは、古代にすでに存在していた溝を度々浚渫や補修を繰り返したためと筆者は考える。ただし、厳密には二つのシナリオが考えられる。①古代の開発が、中世に引き続き行われた。つまり、古代の

開発者と中世の運営者が同一系列の集団である。

②一方、古代の開発と中世の開発はそれぞれ別で、つまり一旦土地利用に断絶があり、中世の開発時に、古代の遺構(例えば、建物跡やU字状の小型の溝など)を壊したため、中世の遺構に、古代の遺物が含まれていることとなった。古代の開発者と中世の運営者は全く別の集団である可能性もある。

遺構形成のプロセスにおける仮説については、さておき、古代開発者と中世運営者に連続性はないという②のケースであったとしても、遺構としての「大型溝」の起源が古代にあることは注目に値する。

すでに述べたように佐久穂町においても、千曲川の対岸に私牧比定地がある。これらはあくまで伝承の範囲で、考古学的な実証は十分ではないが、在地の武士によって経営されていた可能性がある。

山梨県の事例のような領主が上皇(院)のような大規模な私牧であれば、中央(京都や鎌倉)で編纂された文献資料にも名称が出てくるのであろうが、在地の国人クラスが経営したであろう私牧の経営主体が誰かとなると、なかなか難しい。

筆者も、発掘調査のごく初期には寺院跡が見つかることを期待していたが、延々と続く溝は、寺院関連施設ではないことは容易に推測できた。しかし、ではどのような性格の遺構なのかという根本的な疑問に調査段階では、なかなか回答できなかったことは忸怩たる思いが今もある。遺跡の北側の緩い尾根の等高線に並行する大溝跡が検出され、それが用水路ではないことには気がついたが、その用途については調査時から課題であった。ここでは牧とくに私牧にかかる施設であるとの見解を提示する。

一方、いわゆる牧関連遺跡では、牧を経営するために必要な金属加工関連の遺構や遺物が見られるが、本遺跡では顕著ではない。ウマの歯や馬屋状遺構はともかく木製人形にいたっては牧を示す遺物とまでは言えないかもしれない。

しかし、用途や機能不明の大形溝があったとい

うだけでなく、これを地域史研究に還元するための試案である。諸賢の叱正を待つ。

謝辞

発掘調査時の基礎的な整理を済ませ後任に引き継ぎ、報告書をまとめる機会に恵まれなかったので、調査担当者としての所見をペーパーで公表できる場がなかなかなかった。とくに、遺跡調査時には、発掘作業員の皆さんやセンター同僚諸氏はもとよりとくに地元の井出正義、島田恵子、小林範昭、加藤郁雄、曳地隆元の諸氏・諸先生からはとくに多大なる学恩をいただいた。改めて感謝申し上げます。

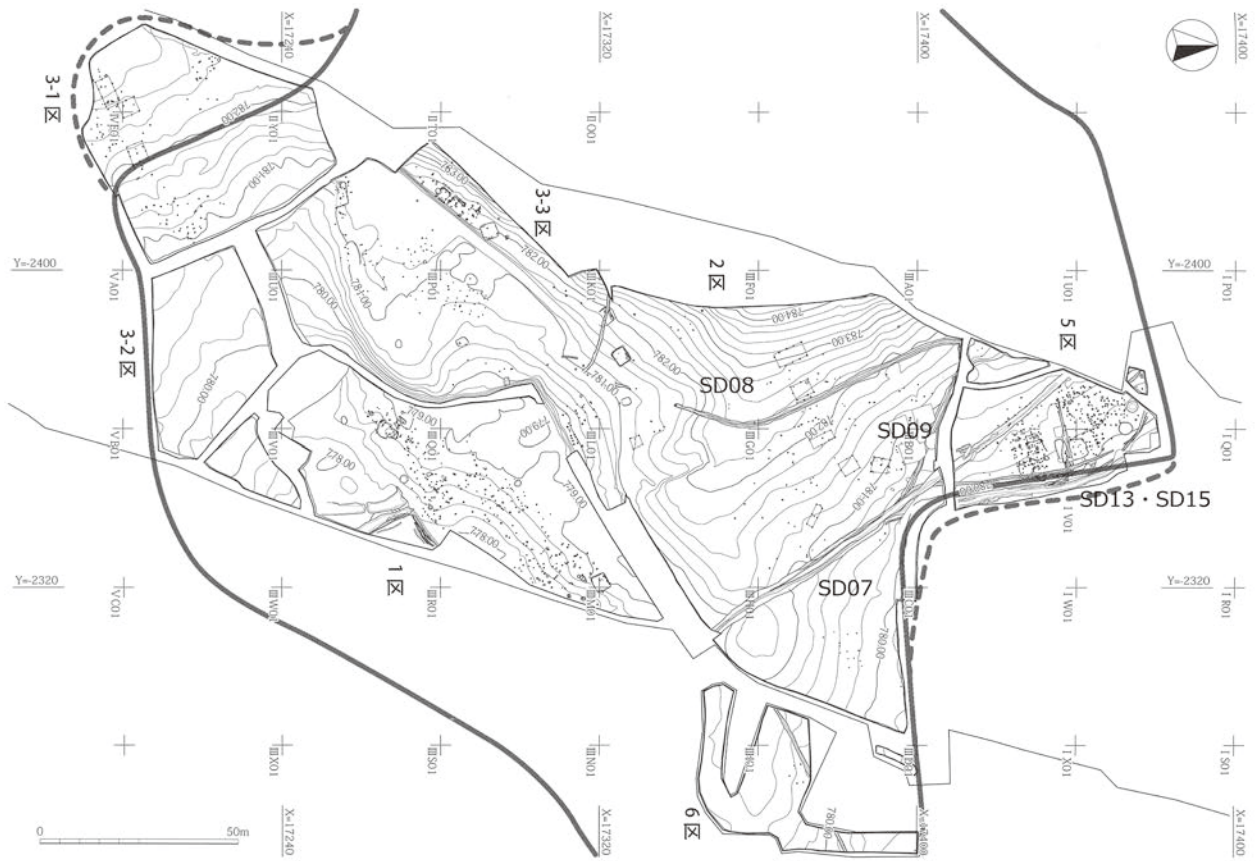
引用参考文献

- 安中市教育委員会 1988『注連引原（Ⅱ）遺跡—すみれヶ丘公園造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 井出正義 1998「奈良・平安時代」『南佐久郡誌』長野県南佐久郡誌刊行会
- 井出正義 2004「佐久町の私牧」『佐久町誌歴史編—原始・古代・中世』佐久町誌刊行会
- 佐久町教育委員会 1987『後平遺跡 縄文早期後半から前期初頭における落とし穴を伴った集落の調査』
- 佐久町教育委員会 2002『小山寺窪遺跡 伝承の寺跡および鎌倉時代～室町時代の墓群の調査』
- 佐久穂町教育委員会 2012a『小山寺窪遺跡（Ⅰ）—東京電力鉄塔新設地点の発掘調査報告書—』
- 佐久穂町教育委員会 2012b『小山寺窪遺跡（Ⅱ）—中部横断自動車道町取付道路地点の発掘調査報告書—』
- 佐野 隆 2008「小笠原牧の考古学」『牧の考古学』古志書院
- 佐野 隆 2014「発掘された平安時代の牧」『甲斐の黒駒—歴史を動かした馬たち—』
- 大工原 豊 1994「奈良・平安時代の「牧」と推定される遺構群について」『中野谷地区遺跡群』安中市教育委員会
- 高島英之 2008「上野国の牧」『牧の考古学』古志書院
- 長野県埋蔵文化財センター 2019a『小山の神B遺跡 高尾A遺跡 高尾古墳群5号墳 尾垂遺跡 尾垂古墳 洞源遺跡 荒城跡 月明沢岩陰遺跡群—佐久市内7—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書122
- 長野県埋蔵文化財センター 2019b『滝ノ沢遺跡 寺久保遺跡 庚申塚 台ヶ坂遺跡 上滝・中滝・下滝遺跡 和田遺跡 和田1号塚 滝遺跡 家浦遺跡 田島塚 水堀塚—佐久市その9—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書124

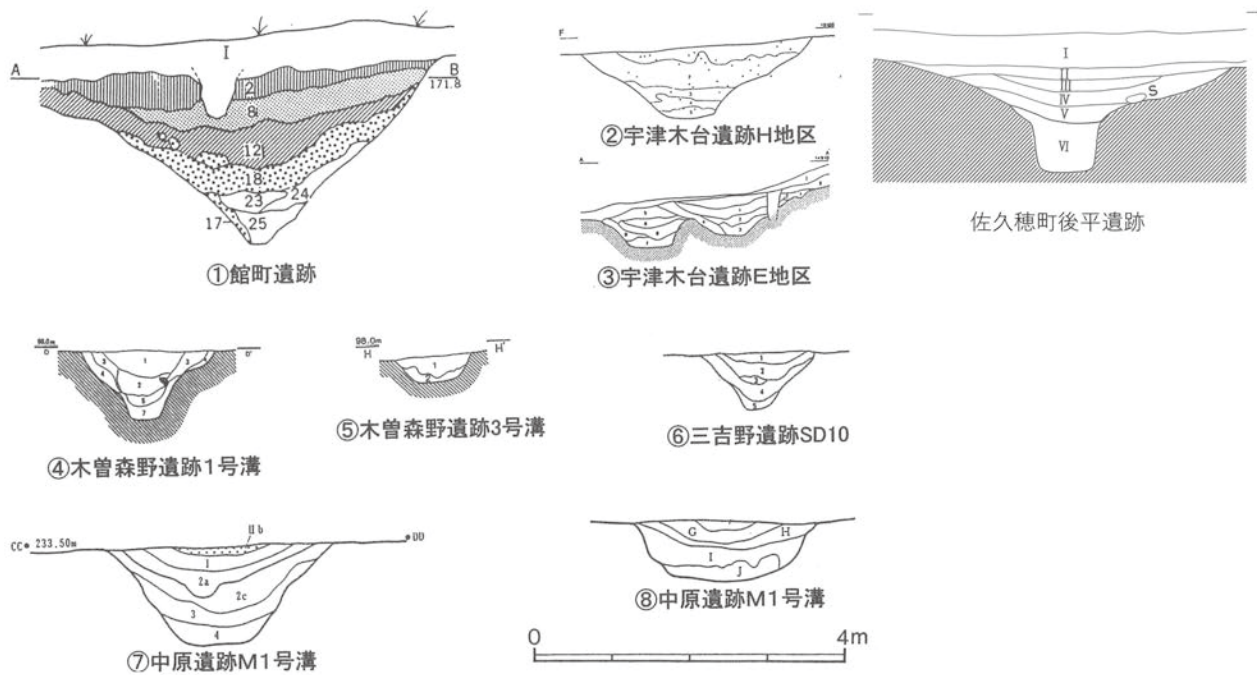
- 長野県埋蔵文化財センター 2020a『地家遺跡 兜山遺跡 兜山古墳 大沢屋敷遺跡 前の久保遺跡 三枚平B遺跡—佐久市8—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書123
- 長野県埋蔵文化財センター 2020b『奥日影遺跡 小山寺窪遺跡 上野月夜原遺跡 満り久保遺跡 馬越下遺跡—佐久穂町内—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書125
- 長野県南佐久郡誌刊行会 1998『南佐久郡誌 考古編』
- 曳地隆元 2010「中世における馬屋状遺構について」『信濃』62-11
- 福田豊彦 1981『平将門の乱』岩波書店
- 前沢和之 1991「上野国の馬と牧」『群馬県史 通史編2』群馬県史編さん委員会
- 松崎元樹 2008「武蔵国多磨郡域の牧をさぐる」『牧の考古学』古志書院
- 柳田國男 1910『遠野物語』聚精堂
- 山口英男 1990「信濃の牧」『長野県史通史編第一巻原始・古代』長野県

図の出典

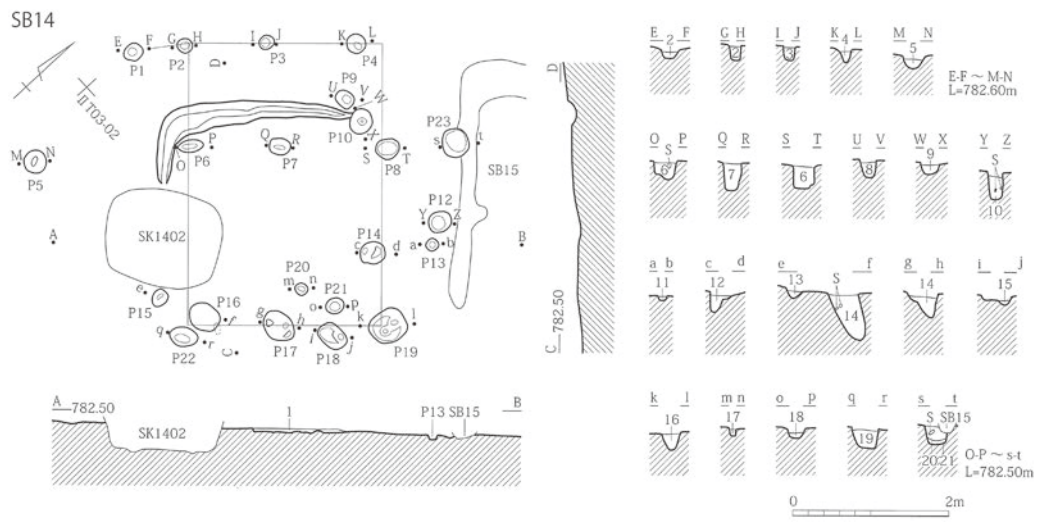
- 第1・4・6・7図 長野県埋文2020b
- 第2図 長野県埋文 2020b に一部加筆
- 第3図 佐久穂町教育委員会提供
- 第5図 松崎2008、後平遺跡のみ佐久町教委1987



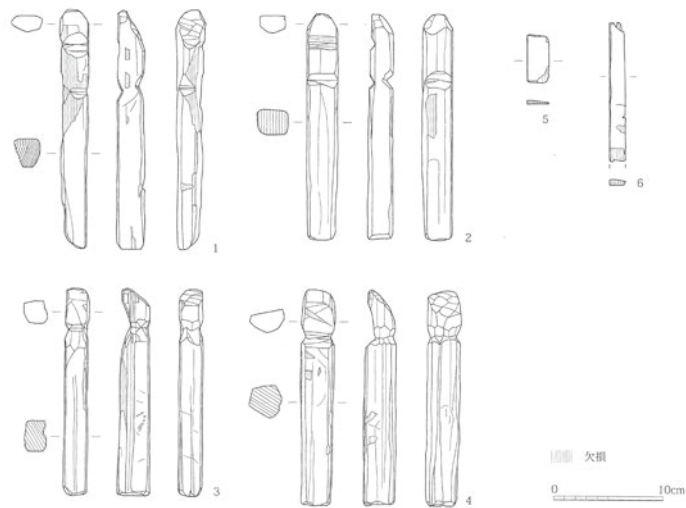
第4図 小山寺窪遺跡の大型溝平面図



第5図 牧関連遺跡の大型溝の断面



第6図 馬屋状遺構



第7図 木製人形

(3) 坂城町上五明条里水田址における製鉄炉について

水科汐華 酒井実姫 熊木奈美

1 はじめに

上五明条里水田址は坂城町に所在しており、千曲川左岸の氾濫原上に立地する遺跡である。長野県埋蔵文化財センター（以下「当センター」という）では、坂城更埴バイパスの改築工事に伴い、令和3年度より上五明条里水田址の発掘調査を実施してきた。また、この遺跡は過去にも、坂城町教育委員会や当センターによって何度も調査が行われている。

これまでに古墳時代や平安時代の集落跡や古代から近世に及ぶ水田跡などがみつまっているが、今年度の調査ではこれに加えて、平安時代後期の集落域から製鉄炉跡（SF02）が検出された（第1図）。坂城町内で古代の製鉄炉跡が発見されるのは初めてである。過去には精錬鍛冶遺構等の鉄生産に係わる遺構（長野県埋蔵文化財センター2011）や、昨年度の調査において、苧引金・紡錘車といった鉄製品が出土しているほか、鍛錬鍛冶に関わる可能性がある焼土跡を検出している。今年度の調査を含め、当遺跡はこの地域の鉄生産を考える上で貴重な資料となった。

本稿では、発掘調査の状況を振り返りながら、更埴地域（旧更級・埴科郡）の鉄器生産の様相について考察していきたい。

2 製鉄炉跡の発見と調査方法

本年度の調査区東端より、一辺約6.5mの平面

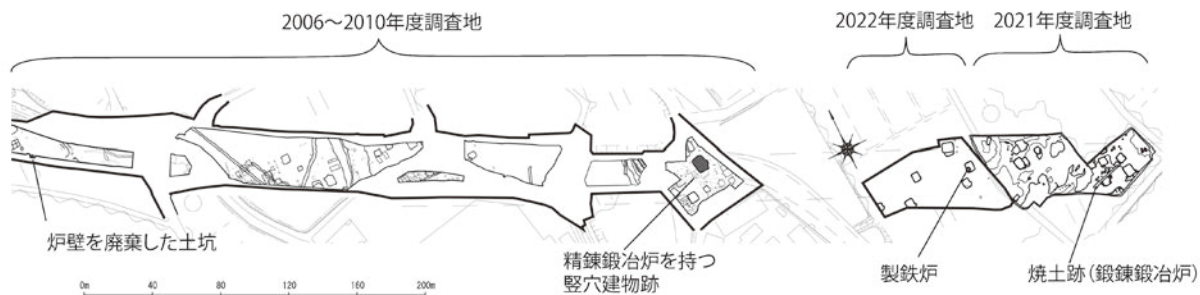
形がほぼ正方形を呈した竪穴建物跡（SB21）を検出した。検出時は、建物跡の西壁南寄りに焼土や炭化物が散逸していることから、この位置にカマドがあると想定し、セクションベルトを設定して調査を開始した。するとトレンチ内から掘り下げが困難になるほど多量の鉄滓が出土し、円形の炉体の一部を検出した。この炉体の検出をもって製鉄炉跡であることを認識し、SF02の番号を付した。そして、この時点から埋土はすべて土壤洗



第2図 竪穴建物跡（SB21）完掘状況（東から）



第3図 製鉄炉調査状況



第1図 上五明条里水田址 遺構分布図

浄するために土嚢袋に入れて取り上げた。製鉄炉跡の主軸方向は、当初想定していたカマドの主軸方向と異なるため、炉から排滓坑までを貫くように主軸となるセクションを設定し直し、それに直行する方向に炉、排滓溝、排滓坑それぞれにセクションを設定した。そして、製鉄炉全体の形状を明らかにした後、炉、排滓溝、排滓坑の断面観察を行い、堆積状況を記録して完掘した。

本遺構の遺存状態は良好で、被熱により炉内は青灰色に還元し、炉壁の縁は橙色に酸化していた。炉壁付近の埋土は移植ゴテの先を突きつくと容易に剥がれるのだが、排滓坑に溜まる鉄滓は埋土と絡みついて簡単には剥がれず、ミシミシと音を立てながら、謂わば、むしり取るような感覚で掘り進めたことが印象的であった。炉部分については、炉底部からさらに掘り下げて確認したが、粘土造りの下部構造は認められず、地山を掘り窪めた床面をそのまま火床とする地床炉であることが明らかとなった。

製鉄炉（SF02）は、約180cm×約70cmの規模をはかり、平面形はオタマジャクシのような形状をしている。炉底部は70cm×58cm、残存深さ38cmの楕円形土坑で、それに接して39cm×28cm、残存深さ27cmの排滓溝、80cm×73cm、残存深さ41cmの排滓坑がつく。

残存する炉底部から推定される炉の形式は、「円筒形自立炉」（岡田2008）である。この型式の炉は、8世紀初頭に東日本（関東—東北南半）で出現する半地下型竪型炉から発達したもので、9世紀後半から東北地方—九州中部まで分布する（土佐1981）。なお、これまでに確認されている長野県下の製鉄炉の形式はすべてこの型式に限定される。岡田正彦氏によると、その操業方法は「円筒型自立炉」に砂鉄と木炭を交互に入れ、革鞆等で送風して鉄を作り、出来上がった段階で製鉄炉を壊し、炉内の生成物を取り出して、鉄分の塊や粒状鉄だけを取り集め、ほかは排滓土坑に廃棄した（岡田2008）と考えられる。古代の製鉄炉は操業毎に破壊されるため、製錬は単発的である。また、本遺構に残る炉壁には作り変えの痕跡は認め



第4図 製鉄炉完掘状況



第5図 円筒形自立炉模式図

られず、このことから操業は単発的なものであったと考える。

製鉄炉からの出土遺物は、炉壁片・炉内滓・流動滓・鉄滓・鉄塊系遺物・炭化材である。また、製鉄炉からの出土ではないが表土掘削中に周辺から羽口が出土している。

なお、製鉄炉跡と重複して検出した竪穴建物跡は、カマドを伴わず床面が不明瞭で、住居跡とは考え難い。しかし、製鉄炉跡とは軸が異なるため、製鉄炉跡に伴う作業場か工房跡とも断定できない。

3 更埴地域とその周辺における製錬の様相

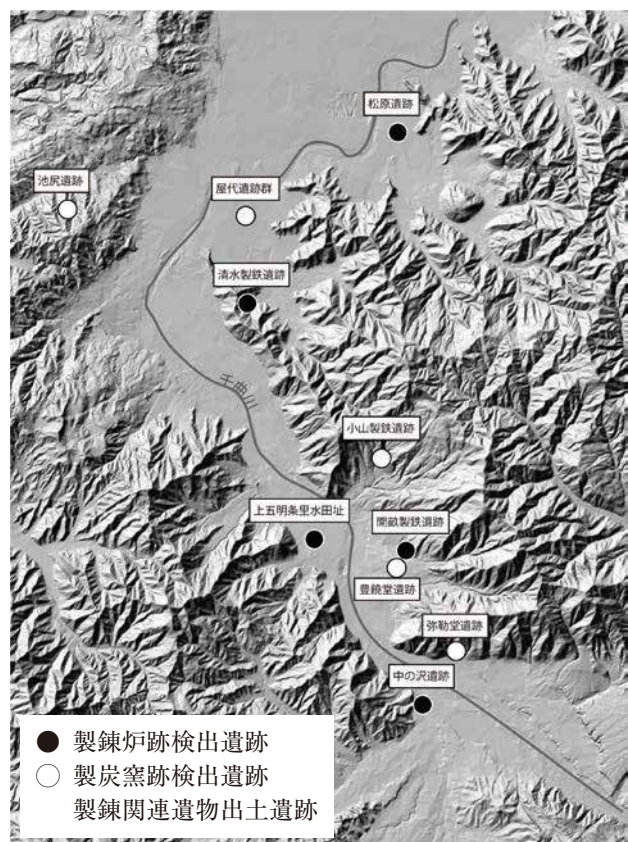
長野県下において、製鉄炉体は11遺跡で40遺構が確認されている（2022年現在）。そのうち、古代の製鉄炉体の検出が認められているのは、洞原

遺跡（佐久市）、金谷製鉄遺跡（富士見町）、五十畑遺跡（大田市）、長畑遺跡（大田市）、松原遺跡（長野市）、清水製鉄遺跡（千曲市）、上五明条里水田址（坂城町）、中の沢遺跡（上田市）である。中世・近世になると、長畑遺跡（大田市）、開畝製鉄遺跡（坂城町）、穴の尾製鉄遺跡（富士見町）、茂来山製鉄遺跡（佐久穂町）で製鉄炉体の検出が認められる。また、製鉄炉体の検出には至っていないものの、屋代遺跡群（千曲市）、小山製鉄遺跡（坂城町）、菅ノ沢遺跡（大田市）、豊饒堂遺跡（坂城町）において製錬関連遺物が出土している。さらに、製錬の原料調達のための製炭窯跡は、古墳時代末の石附窯址（佐久市）をはじめ、古代の池尻遺跡（千曲市）、中山古墳群（松本市）、清水製鉄遺跡（千曲市）で確認されている。

以上の19遺跡のうち10遺跡が、埴科郡や更埴郡が置かれた更埴地域とその周辺に特に集中して営まれている（第1表）。その理由は、更埴地域とその周辺の地形が製錬に適していたからであると考えられる。前述したとおり、製錬の原料は砂鉄と木炭である。これまでに、清水製鉄遺跡（千曲市）、屋代遺跡群（千曲市）、小山製鉄遺跡（坂城町）、開畝製鉄遺跡（坂城町）から出土した鉄滓の化学組成分析の結果、原料となる砂鉄は千曲川から採取したものであることが分かっている。また、近世たたら用語に、「砂鉄七里に炭三里」という云われがあるように、製錬立地は原料の調達、特に木炭の生産地を重視している。清水製鉄遺跡、池尻遺跡からは平安時代に営まれた製炭窯跡が検出されているが、これらは山々に囲まれた狭い谷間に立地する。古代においても木炭の遠路運搬を考慮した結果であろう。更埴地域周辺における鉄器生産は、谷あいや山麓斜面において製炭、製錬を営み、それを取り巻く緩やかな丘陵上に鍛冶遺跡が立地していることがうかがえる。そして、このような特徴は、現在までに千曲川砂鉄を原料とした鉄器生産関連遺構が確認されてい

遺跡名	所在地	製鉄関連遺構数		製錬関連遺物出土	鍛冶遺構
		製炭	製錬		
池尻遺跡	千曲市桑原	1 (平安)			
松原遺跡	長野市松代町東寺尾		10 (平安)		
清水製鉄遺跡	千曲市森岡地	2 (平安) 7 (不詳)	13 (平安)		12
屋代遺跡群	千曲市雨宮			○ (平安)	1
小山製鉄遺跡	埴科郡坂城町中之条			○ (平安)	8
上五明条里水田址	埴科郡坂城町上五明		1 (平安)		2
豊饒堂遺跡	埴科郡坂城町中之条			○ (平安)	
中の沢遺跡	上田市小泉字上半過		1 (平安)		
弥勒堂遺跡	上田市下塩尻				1
開畝製鉄遺跡	埴科郡坂城町中之条		2 (中世)		

第1表 更埴地域周辺の鉄器生産関連遺跡



第6図 更埴地域周辺の鉄器生産関連遺跡
(地理院タイルに遺跡と河川を加筆して掲載)

る、佐久地域から善光寺平に至る千曲川流域において、どこでも展開している可能性があるのではなかろうか。

また、清水製鉄遺跡にみられるように山間部に位置し、居住や耕作を営まず鉄器生産に集中する遺跡が確認される一方で、上五明条里水田址や中の沢遺跡にみられるような、山麓から下った段丘

上に位置し、古代集落内において居住とともに鉄器生産が小規模ながら営まれることにも注目したい。

市川隆之氏は松本平における居住遺跡と製錬関連遺構の展開を検討し、「九世紀末を境に、それ以前の居住遺跡の単位を越えた一定地域での製錬集中と居住遺跡で精錬・鍛錬鍛冶を行なう地域分業体制と、以後の製錬工程の増加と居住遺跡毎に鍛冶の関わり方の多様性に見られる地域流通体制」(市川1994)の2時期に分離されることを主張しており、古代集落内における小規模鉄生産の在り方を示している。千曲川流域においても、そういった視点を念頭に置きながら、さらに詳細な検討を行いたい。

4 おわりに

今回の上五明条里水田址の発掘調査において、古代の製鉄炉が新たにみつかったことにより、現在では生活に必要な不可欠となっている鉄が、坂城町内で従来、考えられていたよりも以前から生産されていたことが明らかになった。そして、このことは更埴地域とその周辺の鉄器生産のあり方を考える上で、貴重な資料となったのである。

現在、坂城町には多くの工場が立ち並ぶ。この地は、人間国宝・故宮入行平氏に代表される多くの刀匠や、工業に携わる諸企業を長年育み続けてきたという独自の特徴を持っている。密接につながり合う地域と鉄との深い関係が、今回の調査から、これまで以上に強く証明されたのではないだろうか。上五明条里水田址における古代製鉄炉の検出は、日々、技術創造の実現に励んでこられた人々により、脈々と受け継がれてきた「ものづくりのまち、坂城」の源流をたどる発見となった。

引用参考文献

- 上田市教育委員会 2009『中の沢遺跡・半過古墳群』上田市文化財調査報告書第105集
- 坂城町教育委員会 1977『開畝製鉄遺跡―第1次調査報告―』
- 坂城町教育委員会 1978『開畝製鉄遺跡―第2次調査報告―』
- 坂城町教育委員会 2004『豊饒堂遺跡Ⅲ―株式会社ウインテック工場建設に係る緊急発掘調査報告書―』
- 長野市埋蔵文化財センター 1993『松原遺跡Ⅲ』
- 長野県埋蔵文化財センター 1997『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22- 更埴市内その1 清水製鉄遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21- 上田市内・坂城町内― 小山製鉄遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 更埴市内その5 屋代遺跡群』
- 長野県埋蔵文化財センター 2011『主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書2―坂城町内― 上五明条里水田址』
- 青木一男 1994「長野県更埴市清水製鉄遺跡の発掘調査報告書」『信州の鉄を語るシンポジウム』
- 穴澤義功 1985「製鉄遺跡からみた鉄生産の展開」『季刊考古学』第8号
- 市川隆之 1994「長野県内の古代集落内における手工業生産予察」『信濃』46-4
- 岡田正彦 2008「長野県下の製鉄遺跡と下伊那」『飯田市美術博物館研究紀要第18号』飯田市美術博物館
- 土佐雅彦 1891「日本古代製鉄遺跡に関する研究序説」『たゝら研究24』たたら研究会
- 土佐雅彦 1985「製鉄炉跡からみた炉の形態と発達」『季刊考古学』第8号

(4) 南信地域における物質文化の一例

—糸切鋏と沢蟹をめぐる習俗—

両角 太一

1 はじめに

考古学が主に扱う遺物・遺構といった静的なものから、それが生活の一部を形成していた当時の動的な状態に迫ろうとするならば、人間行動と物質との関係が同時に観察できる現在に目を向け、解釈の基準を作成することが必要となる。すなわちミドルレンジ・セオリーの研究においては、必ずしも他国の狩猟採集民に限ったことではなく、我々の身近にある日常に目を向けることも示唆に富む手がかりを与えうるのではないだろうか。

ここでは疫病祓いや魔除けの習俗における糸切鋏と沢蟹を例に人とモノの関わりについて検討し、考古学の視点も含めて若干の考察を行いたい。

2 疝の虫

2-1 疝の虫切り

「疝^{かん}」とは、ささいなことでいらだつ性質や、ひきつけといった発作的な疾患など、主に神経性の小児病全般を指す。一般に子供の夜泣きがひどいときなどに「疝の虫が強い」と言われ、こうした場合に虫を切って弱めるのがよいと信じられてきた。特定の神仏に願掛けをしたり、各地域や家々によって独自の療法が試みられたりしている。この「虫封じ」や「疝の虫切り」といわれる習俗の一事例を取り上げ、物に対する伝統的な認識を掘り起こそうとするのがここでの目的である。

2-2 虫病

疝の虫というように体調変化や心理的異常の原因を体内の「虫」に求める考え方（虫因説）は、近代以前の医学では広く浸透していたようである。その代表例とされる「応声虫」は、中国宋代の医書に奇妙な姿をした獣として描かれ、日本では鎌倉時代に入り、その思想がもたらされたという（長谷川ほか2012）。国内では、こうした奇虫の存在に対して懐疑的な医家も少なくなかったようであるが、顕微鏡観察という近代的な手法を取り入れた高玄竜による医書『虫鑑』（1809）にお



図1 虫倉神社の位置（地理院地図より作成）

いて、患者の体分泌物や排泄物を検体として、「発驚」（瘧疾）、「癩風」（癩病、ハンセン病）、「瘡」（皮膚病や筋肉の外傷）、「瘰」（腫物）などを虫がもたらす症例として取り上げ、その観察図には寄生虫などを写實的に表現しているものもあれば、架空の獣や昆虫のように表現された虫も示されている。長谷川ほか（2012）はこれを、虫因説という既存の概念に強く影響されていたことで、観察結果に虚像を結び、かえって従来のパラダイムを補強することになったと評価している。さらに、「虫病」がもたらす「癆瘵」（結核性の病氣）は、それ以前には「鬼」がもたらすとする「伝戸病」（「癆瘵」の旧称）であったことなどを例に、「鬼」という霊因が、次第に姿・形のある生き物の「虫」へと変化してきたと指摘している（長谷川ほか2018）。

排便に蛔虫や蟯虫が混じることは戦後しばらくまで一般的に見られたようであり、虫因説は、民衆にも自然と理解されうるものであったことがうかがわれる。近代以前、医家の間で虫が引き起こすと考えられていた疾患は、個人以上に共同体全



図2 虫倉神社と山浦地域（北東から）



図3 虫倉神社参道



図4 「水神明王」碑石

体の問題と考えられていた側面がある。そうした意味で「虫」は社会が作り出してきたともいえるが、日本には古くから死者の悪霊である「鬼」が疫病や災厄をもたらすという病因観が現実の問題としてあった。こうした虫や鬼に対して民間ではどのように向き合い対処してきたのかについて以下で考えていく。

3 山浦地域の虫倉祭り

3-1 柏原集落と虫倉講

現在まで地区行事として疝の虫切りの講が行われている柏原地区の虫倉講について取り上げる。茅野市柏原地区（旧柏原村）は、蓼科山の麓、茅野市から長和町へと至る大門街道（国道152号線）の入口にある集落で、かつては宿場村であった（図1）。現在は毎年6月14日に虫倉神社（図1・2）への代参と、公民館へ幼児をもつ母親やその祖母が集って行者による護摩供養が行われている。虫倉講は柏原を中心に近郷の集落の人々によってつくられた講で江戸後期から明治初期にかけて設立したとされる。かつては虫倉神社の前に幼児を連れた婦人が集まって護摩を焚いていたようで、かなりにぎやかだったようである（茅野市編1988）。この機会であったのかは分からないが、虫倉神社参詣の折に祠の前へ鍬か鎌などを置いて

くるといふ風習が知られている。

3-2 2022年の事例

虫倉講は、近年、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、虫倉神社への代参のみを行っている。ここでは、2022年に行われた虫倉講について報告する。

早朝、講員は公民館を出発し、途中、田んぼの脇の水神様の石碑に御幣などを供えてから、白樺湖へと至る大門街道（国道152号線）を登っていく。最後のSカーブを抜けると右手に「虫倉神社参道入口」書いた看板が見える。ここから山へと入り、虫倉神社を目指す。この一帯は「ヤマノカミ」と呼ばれている。虫倉神社の参道には霊神碑や御嶽講関係の石造物40体（碑石32、石祠5、姿像3）が配置されており、これらの石造物を目印に道先案内人と呼ばれる先達と、区長や副区長を含む講員が急斜度な尾根を直線的に登っていく（図3）。先達はこれを務める家の者が代々継承してきており、神霊碑はこの先達の死後や、生前自己の靈魂の安住の地を信仰の地に求め、死後のよりしろとして建てられたものがあるという（柏原遺跡保存会1995）。虫倉神社へ至る道中、再び「水神明王」や「水神」などと刻まれた碑石に御幣を捧げていく（図4）。水神の石碑は、用水が枯れ

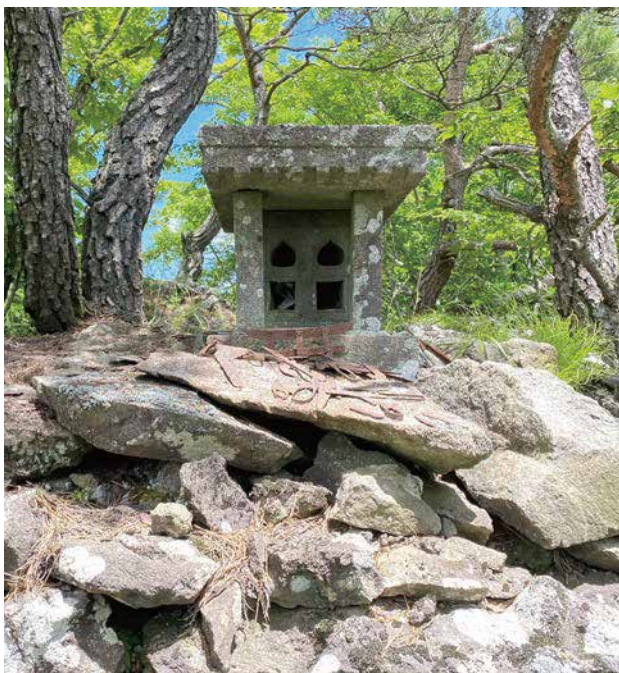


図5 虫倉神社本殿の石祠（正面）と鉄製品の分布状況図

ずに米が豊かに稔ることを願って建てられたといわれている。付近を流れる小川には今でもサンショウウオが生息し、清らかな水が保たれている。

参道入口から約1時間、身の危険を感じる難所を超えると虫倉神社へと到着する。虫倉神社(1525m)は尾根に張り出した巨岩上にあり、参道入口からの標高差は約200mである(図5)。ここからは大泉山・小泉山をはじめとした山浦地域を眺望することができ、石祠もこの方向に据えられている。虫倉神社へ到着すると御神酒と御幣を供えて、先達による木遣り歌が奉納される。虫倉神社から八子ヶ峰公園へ向かってさらに進むと張り出した岩場の上に奥の院と呼ばれる石祠が据えられている。ここでも先達による木遣りが唄われた。ここで代参は終了し、講員は帰路につくことになる。

3-3 虫倉神社の鉄製品

ところで虫倉神社の祠には聞き及んでいる糸切鋏や鎌の他、これまで記述や話に聞くことがなかった剣形、菱形を呈する鉄製品が数多く見られたことは新たな発見であった。しかし、糸切鋏を含むこれらの鉄製品がいつ、だれが、何の目的で残していったものなのか、詳細な記述や伝承は既になく、これらが考古学的な調査対象物としての性格を有していることが分かった。以降、数度の調査を行い、虫倉神社の鉄製品の平面図を作成した(図5)。長年風雨にさらされたせいか劣化が激しいものや、落下しているものが多数あったがこれらは図化することができなかった。その内容について、以下に述べておきたい。菱形の鉄製品は最も多くみられ、長さは10cm前後で形態的なバリエーションが見られる。表面には整形のために敲いた痕跡があり、そのため縁辺はやや波打っている。中には、末端が意図的に折り曲げられたものが含まれている。これら菱形鉄製品の実用性は希薄であり、剣形の模造かと思われる。また、他の鉄製品よりも風化が進んでおり、埋没しているものも多いことから古い様相を示している。

次に多くみられるのは糸切鋏(和鋏)で、剣形とは対照的に実用的である。また、剣形とは異な



図6 鎮大神社の虫封じ(上伊那郡辰野町沢底)

り、祠の前に分布が集中している。この糸切鋏の下には大振りの鎌一本が配置されている。鎌は小型の模造品もあり、またブリキ製のものが一点、近くの松の枝に引っ掛けられていた。

柏原の虫倉神社へ疋の虫切りに鋏や鎌を奉納することは知られているが、虫倉講ではこれら鉄製品の奉納は行われておらず、実際にはいつ、誰がこれを置いていったのかについては分からなくなっている。虫倉講に限らず、子供の夜泣きがひどいときに母親が我が子をおぶって密かに参詣するとか、願いが叶えばお礼参りに鋏を置いてくるなどと伝えられている。講員の中には2歳の頃、実際に母親におぶわれて一緒に山を登った経験をもつ者もいた。

上伊那郡辰野町沢底の鎮大神社では、子供の誕生に際して紙に鋏の絵と共に生年月日、名前、「虫封じ祈願」などを書いた紙を境内の建板に貼り付ける風習が現在でも行われている(図6)。鋏が記号的な絵標示となっている点が特徴的である。総社である長野市中条の虫倉神社においても鋏を用いた虫封じ信仰はみられないことから、鋏に霊性をみる考えは虫倉信仰とは別の経緯で発生してきた可能性がある。

3-4 エーヨー節にみる虫倉講

山浦地域では、民謡のエーヨー節を明治期までは草取りや畑仕事、盆踊りなど、所かまわずよく歌っていたようである。この中に虫倉講について歌ったものがあるので引用する(茅野市編1988)。

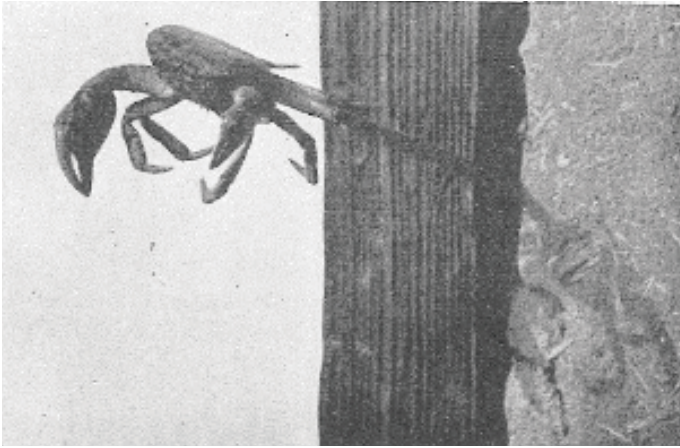


図7 長和町古町の沢蟹呪物（武田1943より転載）



図8 「かに」の標示物（長野県茅野市湖東堀）

- ① へ俺も行きたや虫倉山へ 帰り土産にゃキンタン花や
- ② へ二十四日にゃ坊やをつれて 護摩の煙に逢いに来い
- ③ へ願ひ上げます虫倉様へ 坊やの虫の切れるよに
- ④ へ虫も起きずにぼちゃぼちゃ育ち お礼詣りにゃ二人づれ

いずれの歌も人々の虫倉講への期待と子供の健康を願う気持ちを感じられるものである。②の24日は柏原の祭日と異なるが、虫倉参道の碑石の一つ「三笠山 刀利天宮」の碑石には、「明治三十七年六月二十四日 守矢与左エ門外六名」とあり、話し手の集落では24日に虫倉講があったのかもしれない。石造の碑文は柏原地区の他に、「湯川講中」「芹ヶ沢講中」「中村講中」「北大塩講中」「埴原田講中」とあり、少なくともこの5地区には虫倉神社に関係した講があったことを示している。④の「お礼詣りにゃ二人づれ」にみる二人とは、母親とその子供のことをさしているのだろうか。また、こうしたお礼詣りに鉄を置いていくとした話もあるが、鉄の奉納が虫封じに際して行われるのと、虫封じの事後に行われるのとでは意味合いが大きく異なってくるように思う。前者の場合、鉄は祀神との交渉、贈与的な性格を持ち、鉄が何らかの形で子供の虫封じに寄与する可能性があるが、事後の場合、鉄は、祀神への感謝と、今後の継続な関係を保つこと、あるいは鉄供養といった意味合いをもつという違いがあるので

はないだろうか。実際にどちらが多かったのか分からないが、調査方法によって何らかの違いが見いだせるかもしれない。いずれの場合にしても子供の成長を祈願するという場合に、単なる道具としてではなく、人と人ならざるものを取り次ぐものとしての鉄に霊性を見ているのではないだろうか。

4 鬼やらいと沢蟹

4-1 蟹の年取り

もうひとつ、魔除けについて非常に気になっている風習があるので取り上げたい。それは、1月6日に沢蟹を串に刺して戸口に飾る「蟹の年取り」である。

武田久吉『農村の年中行事』（1943）では長和町古町の蟹の年取り行事についてこのように説明している（図7）。「六日に七草の準備の草を採りに行くついでに沢蟹を沢山捕って来、それに茅又は竹の串を尻から刺し、炙って赤くなったのを、神棚を始め便所の外口等に挿すのである。裏木戸へも、また縁側の外へも、茅葺の家なら至る所の出入口の軒端に挿す。余った蟹は熬ってその夕の年取りの肴とする。蟹が得られなかった場合には、半紙にその絵を書いて間に合わせることもあり、絵のかわりにカニと文字で書いてそれぞれの場所に貼る家もある」。七草と一緒に沢蟹を採集していたことが分かる事例で、示された写真から、大きな鉄をもった沢蟹が正面を向けて掲げられていたことが分かる。

山浦の民俗に詳しい湯田坂正一は、著書『続

やまうら風土記』(2004)の中で蟹の年取りにおける沢蟹の意義について次のように説明している。「蟹は固い甲羅と鋭い爪、それに大きな鋏を持つ頑強な姿態や、二つの鋏を挙げ何ごとかを祈る仕種が悪魔から人々を守り、無病息災を祈ってくれるものと信じられてきた。また蟹という字は“虫”を“解く”と書き、豊作を祈る農民の思いがこめられているのではないだろうか。」

蟹の年取りの事例は、茅野市でも数例見られたのでここに紹介したい。

- ① 祖母が1月6日に「かに」と書いた紙を茅に挟んで戸口へ飾っているのを見たことがある。(茅野市柏原・昭和19年生まれ)
- ② 子供が習字に行く次いでに紙に「かに」と書いてきてもらい戸口に貼った。先代がやっていたので続けているが、意味はわからない。(茅野市湖東堀・2021年聞き取り)
- ③ 実家の玉川では紙に「加荷」と書いて戸口へ貼っていた。荷を加えると書き、財産や収穫が増えることを願った。(茅野市湖東中村・2021年聞き取り)

現在まで行っていたのは事例②であるが、その意味は伝承されていなかった(図8)。柱に一辺10cm程度に切った和紙に「かに」と書いて貼ってある。図5の写真と同様に本来は土壁と柱の隙間に刺していたのかもしれない。事例①、③のように現在、7・80代の方が子供のころにやっていたのを見たことがあるといった話が多く、戦後はこの習俗が伝承されていないことが多い。①の事例は、「かに」の標示化に串の要素を残しており、蟹の串刺しと、「かに」と書いた紙のみを貼るものとの中間的な形態となっていたのは興味深い。

沢蟹呪物の文字化標示は沢蟹が捕れなかった場合には古くから行われていたようであるが、文字化標示の転換や、蟹の年取り習俗の消滅は、戦後の農薬普及によって沢蟹が身近に見られなくなったことや、呪的な害虫払いの必要性がなくなったことが関係しているようである。

下伊那地域では蟹の年取り行事と同じことを節

分に行っている。また、武田(1943)によると、菅江真澄の「いほの春秋」天明4年(1784)のなかで今の塩尻市の小正月にこの行事が行われていたことが記されているという。このように、沢蟹を串に刺して戸口にさしたり、紙に蟹の絵や「かに」などと書いて出入口に貼ったりする風習は、六日正月に限らず、小正月や節分にも行われており、本来はどの行事の風習であるのか分からなくなってしまっている。しかし、疫病祓いや豊穰祈願の行事で行われていることはいずれも共通している。

4-2 沢蟹とイワシ

節分行事に鯛の頭を串刺しにして戸口へ飾る風習はよく知られているが、沢蟹の串刺しとはどういった関係になっているのだろうか。沢蟹(「かに」標示を含む)と鯛を用いた呪物の地域的な広がりを検討するため、先の茅野市の事例に加え、主に長野県史民俗編をもとに分布図(図9)を作成した(註1)。事例は両者合わせて224例、このうち沢蟹の事例は62例である。図をみると鯛は県内ほぼ全域に分布しているのに対して沢蟹は、一部塩尻にもみられるが、ほぼ東信、南信地域に限られていることが分かる。また、県南部でも木曾谷では沢蟹の事例は報告されていない。ひとつ山を越えた地域では行われていないことに注目される。沢蟹を用いる事例は、伊那谷から諏訪、山浦、佐久、上田方面と続いており、この分布圏について櫻井秀雄氏から「古東山道」のルートや、かつてあったとされる「諏訪国」との関係も考慮する必要があるのではないかと指摘があった。この行事が古代にまで遡るかはわからないが、古くより開かれていた道とこれによる婚姻関係などの社会的な紐帯が沢蟹を用いた焼きかがしの文化的な波及を促した可能性はある。

分布の密度に関しては調査者や文献調査でのバイアスを考慮する必要があるが、特に下伊那地域では「かに ひいらぎ」、「蟹 柁」などと書いた紙を貼る家が多くみられる。またこれら「かに」標示とは別に柁を戸外へ飾る事例や、一本の串に鯛と柁がセットで取り付けられる場合もあること

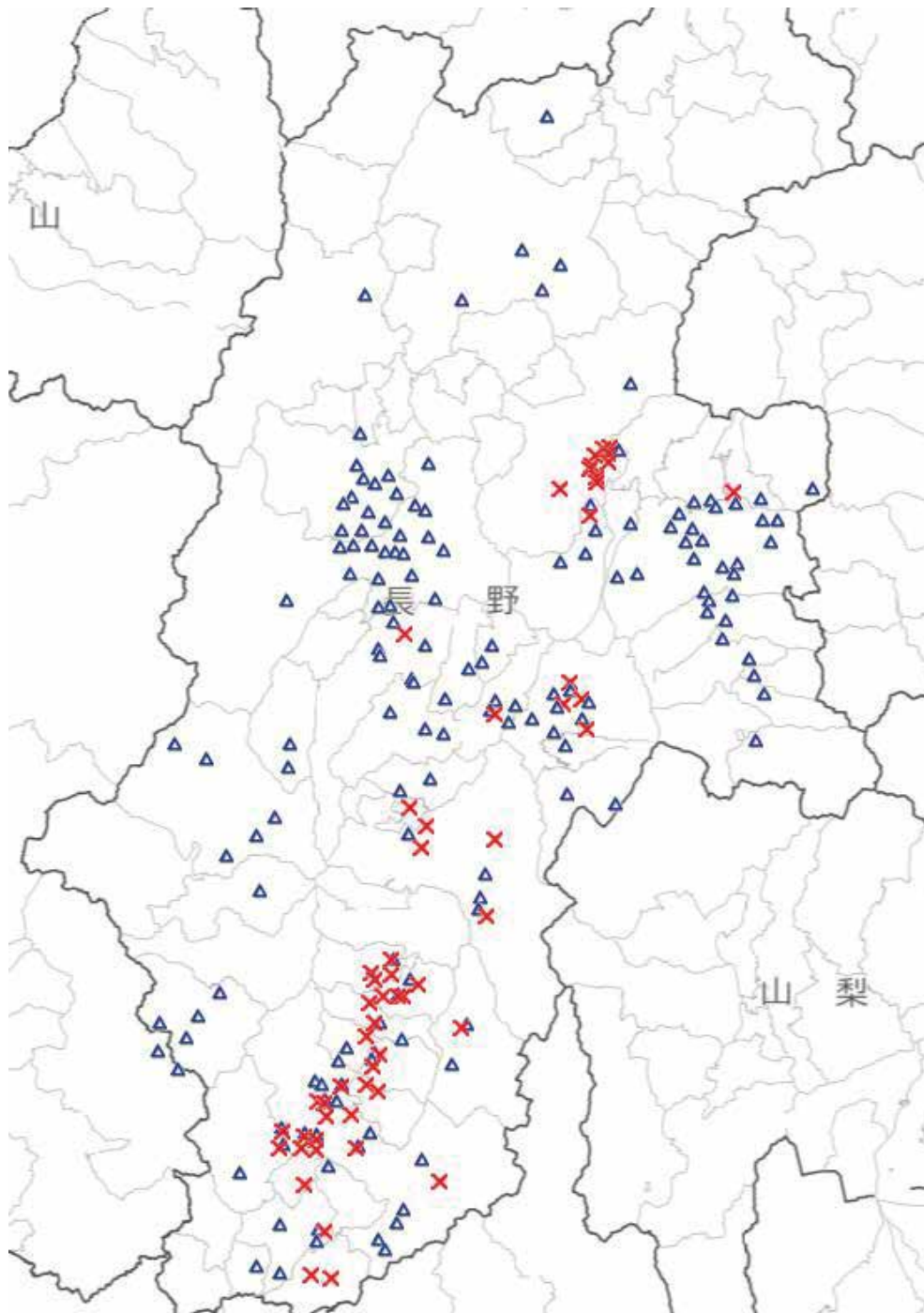


図9 長野県における沢蟹とイワシの分布（地理院地図より作成）
イワシは「△」、沢蟹は「×」で表記した。なお、六日正月・節分等を含む。

から、下伊那地域では「かに ひいらぎ」の事例は、本来沢蟹と柊をセットで用いていた可能性があり、「かに」の標示化が進んだことで、柊と別々で飾られるようになり、蟹は疫病神除け、柊は虫払いというようにその意味も分化していったのかもしれない。

蟹ではないものの、この古いかたちが用いられていた事例が、長野県最南端の阿南町新野の節分

行事の調査で報告されているので引用する（長野県1988）。「12、13cmの竹串ににほしの頭と青木を刺したオニを作って出入りする戸口全部にさす。さして歩くことをオニヤライという。オニはオニノクビ、ヤッカグシともいう」

この事例は、串刺しにした標示物の呼び名や、その行事の名称まで伝承されていた、筆者の知る限りでは唯一の事例である。この話者は、魚や柊



図10 三重県神島の蘇民将来（森1988より転載）

を串刺しにした呪物を「オニ（鬼）」「オニノクビ（鬼の首）」と呼んでおり、また「ヤッカグシ」としても知られていたようである。ヤッカグシは、鰯の頭を串にさした呪物を「焼きかがし」や「ヤイカガシ」と呼ぶことから同義の名称と思われる。そして、これらが「鬼やらい」するために用いられていたことも述べられている。鬼やらい（追儺）は、一般に節分行事で行う豆まきとして知られているが、日本では慶雲3年（706）の疫病流行に際して、陰陽道の行事として中国からとり入れられ、その年の晦日に土牛を作って鬼やらいをしたことにはじまるという（大塚民俗学会編1972）。

阿南町新野の事例は、この鬼やらいの古い伝統を民間に取り入れた形を示しているとすれば沢蟹を用いた「焼きかがし」も、本来は「鬼」や「鬼の首」を模していたものであって、単なる悪霊防除の臭気物ではなかったことになる。

興味深い事例として、森浩一の『考古学随想』表紙に三重県神島の民家の玄関に飾られた貴重な蘇民将来の写真がある（図10）。蘇民将来符を注連縄飾りに括り付け、その上に顔を描いた蟹（アシナガガニ）の甲羅を取り付けている。蟹の甲羅の突出部を上にもってきて、荒々しい形相の顔が描かれている。かつて、蘇民将来に蟹を用いる風習は、東海地方に広くあったようである。蘇民将来の伝統と焼きかがしに直接の関係はないかもし

れないが、この場合も新野の事例と同じく、鬼的な辟邪のイメージに蟹を用いて表現している点で共通している。

沢蟹を用いた焼きかがし成立の背景には、蟹になんらかの呪力を求める考え方や思想があったのかもしれない。蟹にまつわる伝説や民話（註2）、考古資料などから、その系統関係をまず調べる必要がある。

4-3 蟹の考古学的事例

蟹が儀礼的な場に登場してきた古い証拠は、弥生時代中期（前1～2世紀頃）に求められる。

兵庫県灘区桜ヶ丘や鳥取県東伯郡柏村出土の流水文銅鐸（外縁付鈕1式）に見られる同じ鑄型から製作された鐸胴部の狩猟農耕図には、鹿の群れに弓を引く人物の足元に蟹の姿が表現されている（図11、右図上面）。イモリや亀、カエルといった淡水に生息する生物と共に描かれていることからこれは沢蟹とみてよいだろう。しかも、沢蟹だけ他の水棲動物とは別個に描かれていることは注目される。春成秀爾は銅鐸絵画の解釈学的研究において、「銅鐸絵画は、神話の世界を描いたものであり、そしておそらく同時に、祭儀の実際を描いたものであろう。」と述べている（春成1990）。

もしそうであるならば、弥生文化の伝播に伴って沢蟹が農耕儀礼の場や神話的な世界観に何らかの形で登場してきた可能性がある。少なくとも水田技術の定着に伴って沢蟹を含む水棲生物が民衆の暮らしの一風景を織りなしてきたことは容易に想像できる。

一事例であるが沢蟹に関連した考古資料について紹介した。今後、地域や時期・時代別にも蟹の関連資料を収集し、思想的な背景を考えていく必要があるだろう。

5 おわりに

本稿では、疫病祓いや魔除けの習俗に関して、鋏と沢蟹を例にその物質文化を検討した。加えて、その発生と展開について若干の考古学的検討も試みた。この取り組みの可能性として、民俗を物の視点からアプローチすることで、考古資料の解釈に新たな枠組を提供し、逆に、考古学の文化

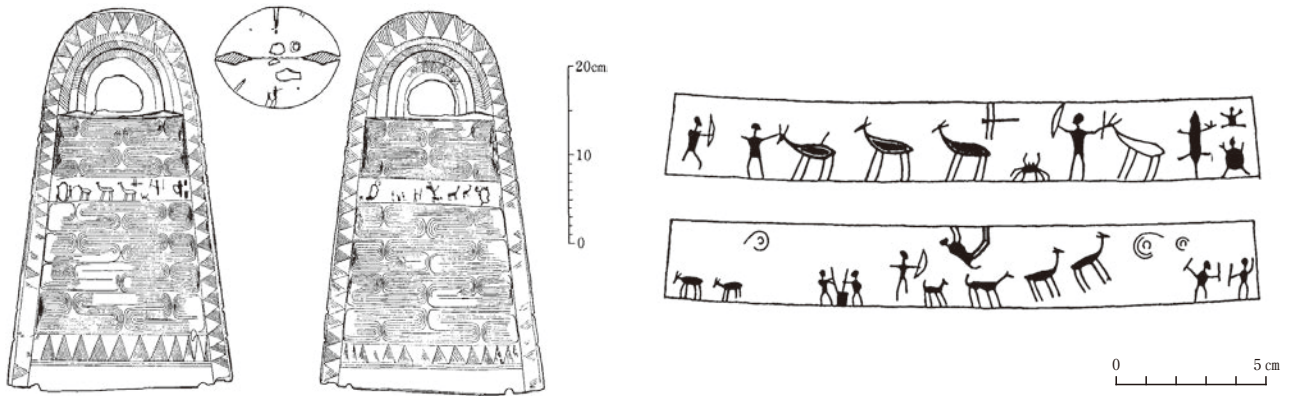


図11 左：兵庫・桜ヶ丘1号銅鐸、右：同範5鐸の絵画復元図（引用元は註3を参照）

理論へ再考を促すことで（例えば物の地域性と方言との構造的な関連など）、物にまつわる現象の体系的な理解へつながることが期待される。

謝辞

本稿を執筆にあたって、川崎保氏、櫻井秀雄氏には民俗事例や祭祀研究における多くのご教示をいただき、また飯田支所での研究環境や地域の皆様のご協力がこの取り組みを後押ししてくれました。大学の友人や先生には文献提供などにご協力いただきました。改めて感謝の意を表します。

註

- 1) 図9の図作成に用いた文献を以下に示す。
『長野県史民俗編』全巻、上伊那誌編集会 1980『長野県上伊那誌 民俗編』、茅野市編 1988『茅野市史下巻 現代・民俗』、丸子町誌編集委員会 1992『丸子町誌 民俗編』、野本 2018
- 2) 蟹と人との異類婚姻譚は少なくない（白田 1980、赤坂 2017）。
- 3) 左図は梅原（1953）原図・佐原（1979）修正図、右図は三木（1969）原図を春成秀爾（1990）が改変した図を引用した。なお、梅原末治（1953）による鳥取・泊銅鐸の絵画実測図には蟹の鉞の形まで描かれている。

参考文献

- 赤坂憲雄 2017『性食考』 岩波書店
 白田甚五郎 1980『民族文学へのいざなひ—鳥と蟹とをめぐって—』 桜楓社
 梅原末治 1953「一群の同範鑄造の絵画について」『上代文化』24、1-12頁
 大塚民俗学会編 1972『日本民俗事典』 弘文堂
 柏原遺跡保存会 1995『柏原の石造文化財』 柏原区
 佐原眞 1979『銅鐸』日本の原始美術7、講談社

- 長谷川雅雄・辻本裕成・ベトロクネヒト・美濃部重克 2012『「腹の虫」の研究』名古屋大学出版会
 長谷川雅雄・辻本裕成・ベトロクネヒト 2018「「鬼」のもたらす病—中国および日本の古医学における病因観とその意義—（上）」南山大学紀要『アカデミア』16、1-28頁
 武田久吉 1943『農村の年中行事』 龍星閣
 茅野市編 1988『茅野市史 下巻』 茅野市
 長野県 1988『長野県史 民俗編』2（2）南信地方、長野県史刊行会
 野本寛一 2018「生きものの民俗再考—サワガニ・ヒキガエルを事例として—」『伊那民俗研究』25、2-30頁
 春成秀爾 1990「男と女の闘い—銅鐸絵画の一齣—」『国立歴史民俗博物館研究報告』25、1-30頁
 三木文雄 1969「銅鐸」『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈』 兵庫県埋蔵文化財調査報告書1、77-158頁
 森 浩一 1988『考古学随想 考えたり怒ったり』 社会思想社
 湯田坂正一 2004『続 やまうら風土記』 長野日報社

長野県埋蔵文化財センター年報39 2022年度

発行日 2023（令和5）年3月17日

編集発行 （一財）長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

電話：026-293-5926 FAX：026-293-8157

E-mail：maibun@naganobunka.or.jp

印刷 信毎書籍印刷株式会社